
和洋裁縫講義

大妻

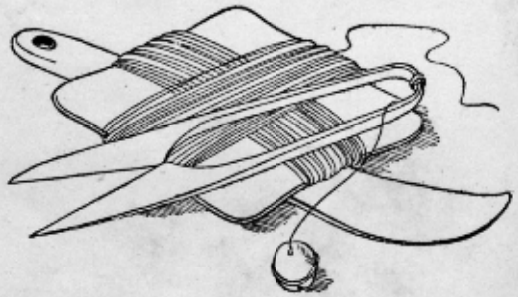
593
089

593
036
02

和洋裁縫講義

大妻技藝女學校々長

大妻コタカ先生著



東京・大興社・發行

大妻学院図書館

28033

東京都千代田区
大妻学院図書館
28033
昭和 37 10 1

裁縫教授



（上圖）大妻技藝女學校に於ける裁縫の お稽古
（下圖）大日本家庭女學會主催の講習會

和洋裁縫講義目次

第一講—裁縫實習上の心得……（一）
絲の結び方……（三）
絲の留め方……（四）
絲のつなぎ方……（五）
各種の縫ひ方……（六）
鋏の掛け方……（九）
紐方……（一一）
布の裁斷の仕方……（一三）
積り方裁ち方の注意……（一五）

第二講—本裁の單衣物……（一七）
女物單衣仕立上げ寸法……（一八）
女物單衣の裁ち方と積り方……（一八）
女物單衣裁ち方圖及裁ち切り寸法……（二一）
肩當、居敷當の裁ち方……（二四）
本裁女物單衣の標附け方……（二五）
縫ひ方……（二六）
エプロン（二三歳）……（二三）
エプロン（四五歳）……（二七）
エプロン（七八歳）……（二四）

第三講—割烹前掛の仕立方……（三五）
一、ギヤダ付前掛……（三五）
二、袖無の前掛……（三五）
三、袖付き割烹着……（三六）
四、紗割りの裁ち方二種……（三五）
五、襟入割烹着……（三七）

第四講—繼ぎ接ぎの仕方……（三九）
絹布の繼ぎ接ぎの仕方……（三九）
綿布の繼ぎ接ぎの仕方……（四〇）
毛絨物の繼ぎ接ぎの仕方……（四一）
子供物着物の揚げの仕方……（四二）
地樹紙の仕方……（四三）

第五講—一つ身單衣……（四五）

普通仕立上寸法……（四）
附紐の附け方……（五）
第六講―三つ身單衣……（六）
縫ひ方注意……（八）
第七講―四つ身單衣……（九）
普通仕立上り寸法……（九）
裁ち方の種類……（九）
標附け方……（九）
第八講―本裁女物袷……（四）
裁ち方積り方……（四）
標附け方……（六）
襟形の作り方と衿のあげ方……（九）
縫方順序……（一〇）
四つ留の仕方……（一〇）
留め方……（一〇）
第九講―本裁男物袷……（一〇）
裁ち方積り方……（一〇）
標附け方……（一〇）
縫ひ方……（一〇）
第十講―本裁女物綿入……（一〇）
仕上げ寸法……（一〇）
裁ち方積り方……（一〇）
標附け方……（一〇）
縫ひ方……（一〇）
綿の入れ方……（一〇）
絎け方……（一一〇）
留め方……（一一）
繰綿ぢと紙綴ぢ……（一一）
第十一講―本裁男物袷羽織……（一一）
普通仕立上り寸法……（一一）
裁ち方と積り方……（一一）
第十二講―本裁女物長襦袢……（一一）
普通仕立上り寸法……（一一）
裁ち方積り方……（一一）
標附け方……（一一）
縫ひ方順序……（一一）

第十三講―男物袷長襦袢……（一二九）
第十四講―腹合せ帶……（一三〇）
普通仕立上寸法……（一三〇）
忠の入れ方……（一三二）
仕立げ……（一三四）
飾りとぢ……（一三四）
第十五講―男袴……（一三六）
普通仕立上げ寸法……（一三七）
裁ち方と積り方……（一三九）
鉸の入れ方……（一三九）
標附け方……（一三九）
縫ひ方順序……（一三九）
縫ひ合せ方……（一三九）
附菱布の裁ち方……（一三九）
裏打ちの仕方……（一三九）
表腰の貼り方……（一三九）
附菱の位置……（一三九）
後紐附とその留め方……（一三九）
裏腰布附け方……（一四〇）
腰立て方……（一四〇）
前紐附と腰立……（一四一）
標附け方……（一四一）
仕上げ……（一四一）
第十六講―女袴……（一四一）
普通仕立上寸法……（一四一）
縫ひ方順序……（一四二）
後布及び前布の縫ひ合せ……（一四五）
笹襞の取り方……（一四六）
前笹襞の標附……（一四六）
笹襞の作り方……（一四六）
相引門、脇及び腰……（一四七）
門留めの仕方……（一四七）
後紐の附け方……（一四七）
第十七講―夜着……（一四九）
普通仕立上げ寸法……（一四九）
裾の割出し及び寸法……（一五〇）

縮の種類に就いて……（一五）
標附け方……（一五）
夜着縫ひ方順序……（一五）
綿の入れ方……（一五）
肩當及び掛衿……（一五）

第十八講—蒲團……（一五）
裁ち方積り方……（一五）
縫ひ方……（一五）
綿の入れ方……（一五）

第十九講—子供洋服……（一五）
下著の種類……（一六）
著方の順序……（一六）
（一）寸法の割出し方と原型の取り方……（一六）
（一）寸法の取り方……（一六）
（二）標準寸法出し方……（一六）
標準寸法……（一六）
（二）ドロワース……（一六）
（一）積り方……（一六）
（一）型紙の裁ち方……（一六）
（二）裁ち方……（一六）
（三）縫ひ方順序……（一六）
（四）縫ひ方……（一六）
（四）コーセツトウエスト……（一六）
（一）積り方……（一六）
（二）型紙の裁ち方……（一六）
（三）布の裁ち方……（一六）
（四）縫ひ方順序……（一六）
（五）コンビネーション……（一六）
（一）積り方……（一六）
（二）裁ち方……（一六）
（三）縫ひ方順序……（一六）
（六）スリツプ……（一六）
（一）積り方……（一六）
（二）裁ち方……（一六）
（三）布の裁ち方……（一六）
スリツプを裁つときの注意……（一六）

（四）縫ひ方順序……（一六）
（七）ペテイコート……（一六）
（一）積り方……（一六）
（二）裁ち方……（一六）
（三）縫ひ方順序……（一六）

第二十講—女兒服……（一六）
（一）女兒服（其一）……（一六）
（一）積り方……（一六）
（二）型紙の裁ち方……（一六）
（三）裁ち方順序……（一六）
（四）縫ひ方順序……（一六）
（二）女兒服（其二）……（一六）
（一）積り方……（一六）
（二）裁ち方……（一六）
（三）布の裁ち方……（一六）
（四）縫ひ方順序……（一六）
（三）女兒服（其三）……（一六）
（一）裁ち方……（一六）
（二）縫ひ方順序……（一六）

第二十一講—男兒服……（一六）
（一）男兒服（其一）……（一六）
（一）裁ち方……（一六）
（二）衿の裁ち方……（一六）
（三）袖……（一六）
（四）縫ひ方順序……（一六）
（二）ズボンの裁ち方……（一六）
（一）ヅボン後身の型圖……（一六）
（二）布の裁ち方……（一六）
（三）縫ひ方順序……（一六）
（三）男兒服（其二）……（一六）
（一）裁ち方……（一六）
（二）布の裁ち方……（一六）
（三）縫ひ方順序……（一六）

和洋裁縫講義目次　終

和洋裁縫講義

大妻こたか講話

第一講　裁縫實習上の心得

裁縫の種類

裁縫とは衣服の材料の選び方、積り方、裁ち方、縫ひ方、繕ひ方、其の他洗濯の仕方、保存の方法等で、何れの家庭でも最も大切な仕事で、女子の必らず修めなければならない業の一つであります。

裁縫は衣服の種類に依つて其の仕立方が違ひます、又其の品物の地質によつても取扱ひ方を違へなくてはなりません。それで裁縫する人は先づ衣服の種類は何であるか、(本裁か、四つ身か、男物か、女物か)其の品質は何であるか(木綿か、絹物か、毛織物か、片面か、兩面か、薄地か、厚地か)よく研究して取りかかるこ

運針　素縫　本縫　姿勢

とが必要であります。

裁縫は、運針が基礎で、運針の上手下手は、出來上りの衣類に表はれるものであります。又運針の早い遲いは、時間の經濟其の他いろいろの方面に影響するものであります。それで、運針を上手にならうとするには、毎日餘暇さへあらば、針と布片とを持つて運針練習をして、上達を心懸けなくてはなりません。

運針の方法　練習するには、素縫、本縫の二種があります。

素縫とは、四五寸位の絲を針に通して二重にし、絲の端を結ばずにするすると、扱ける儘にして行くので、この練習は、眞直に縫ふよりは早く縫ふ練習の仕方で、二尺五寸の布を、五秒間に一回縫ふ人が普通になつて居ります。

本縫とは、布全體練習用は二尺五寸位の長さよりも、三四寸位長い絲をつけ、衣類を縫ふ時と、同じ樣に針目の大小或は眞直等充分注意して、上手に、そして、早く縫ふ練習をするので、二尺五寸の布ならば、一分間に一本位縫ふ人が、普通になつてゐます。

運針をするについて注意すべきことは、姿勢を正しくすることであります。

糸の結び方　眞結　留結

裁縫の基礎は運針であると同じ樣に、裁縫する時の姿勢は運針する時の姿勢が習慣となりますから、充分注意することは衞生にも宜しいのでございます。

運針の姿勢は胸を張り、上體を眞直ぐにし、兩脇を張り眼より八九寸離れた高さにし、兩手の距離は初めは五六寸より段々多く離して、熟達するに從つて、七八寸にし、左右の手を同じ樣に活潑に動かすのでございます。

布は最初は晒木綿で練習して、漸次三河木綿紅絹などを用ひて、あらゆる布類を容易に縫ふことの出來るやうに練習する必要があります。

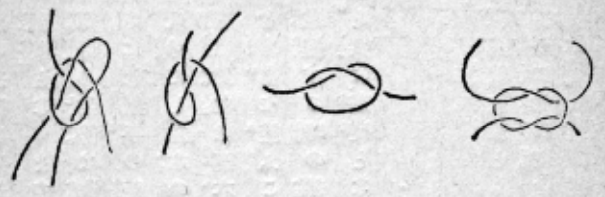
裁縫する時の絲の結び方種々の縫ひ方留め方、紮け方、躾の掛け方なども運針と共に、基礎となるもので必要でございます次にそれぞれ說明致します。

絲の結び方

(1) 眞結（細結とも云ふ）絲の兩端を圖の樣に結び合はす仕方で、袷綿入の袖口、八つ口、袖付留をする場合又は襞を掛ける途中で、絲を繼ぐ時等に用ひます。

(2) 留結　絲の端を食指の腹に卷き、拇指の腹で絲を撚り乍ら結ぶ仕方で、縫

機結
糸の留め方
打留
抄留



ひ始めになど用ひます。(玉になるので玉結びとも云ふ)

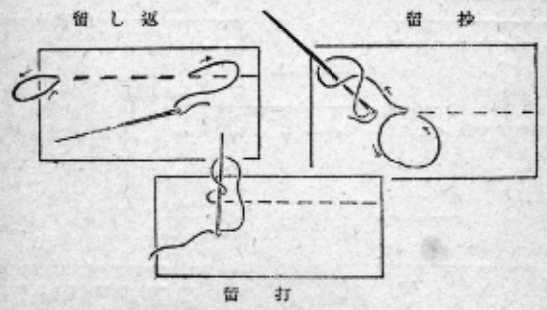
(3) 機結　絲の兩端を右を下に左を上に重ね左の食指の上に置き右の絲を左に廻らして、右の絲の端の下を通り、左絲の端の上を通り、次に左絲の端を折つて右絲の輪に入れ左の拇指で押へて、右絲を引締めます。絲を途中で繼ぐ時に用ひます。

絲の留め方

(1) 打留　左手の拇指の腹で針を布に押へ、右手で絲を卷き付けて針を引抜きます。抄留返留以外のすべての絲留に使ひます。

(2) 抄留　縫ひ終りなどを縱か横かに布を極僅か抄つて、それから打留のやうに絲を針にからんで、針を引抜き少し縫返す仕方で衣類の要所單衣の袖口、袖付、衿先、身八

返し留
糸の継ぎ方
結び継
重ね継
撚り継



つ口等はこの留方を用ひます。

(3) 返し留　縫ひ終りを少し縫ひ返して留る仕方で、衿先脇縫等に用ひます。

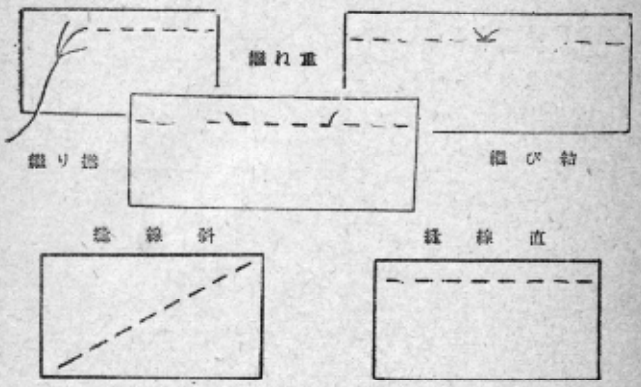
絲の繼ぎ方

(1) 結び繼　機結びに繼ぐ耳絎、襟等の途中で絲を繼ぎ足すに用ひます。

(2) 重ね繼　縫ひ合せの途中で絲の盡きた時、新らしい絲を留め結びして、五六分前から縫ひ初め前の縫ひ絲に割り込んで縫ひ重ねる仕方で背縫、脇縫其他の縫ひ目に用ひます。

(3) 撚り繼　繼ぐべき絲の端を二つに割り、其の割つた絲の一方に撚り合せる仕方で絹物の縫ひ方、又は絎け方などに用ひます。

各種の縫ひ方　直線縫　斜線縫　合せ縫　二重縫　摘み縫



各種の縫ひ方

(1)直線縫　真直に縫ふ所に用ひる縫ひ方で、衣類の大部分は此の仕方であります。

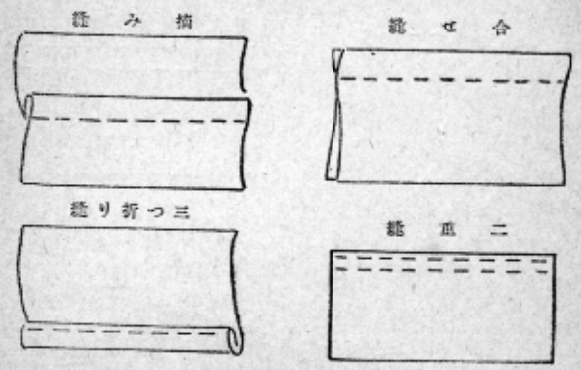
(2)斜線縫　斜に縫ふ仕方で紅付、衿付、袖付、羽織の襟付等に用ひます。

(3)合せ縫　布と布とを合せて縫ふ仕方であります。

(4)二重縫　合せ縫ひをして、其のままでは縫目が開いて困る場合に其の耳は、又端を今一度縫ひ合はす仕方で、本裁の單衣の背縫等に用ひます。

(5)摘み縫　布を切らぬ處に縫目を拵へる仕方で、四つ身の紅大幅物の背縫等に用

三ツ折縫　袋縫　伏縫　折伏縫



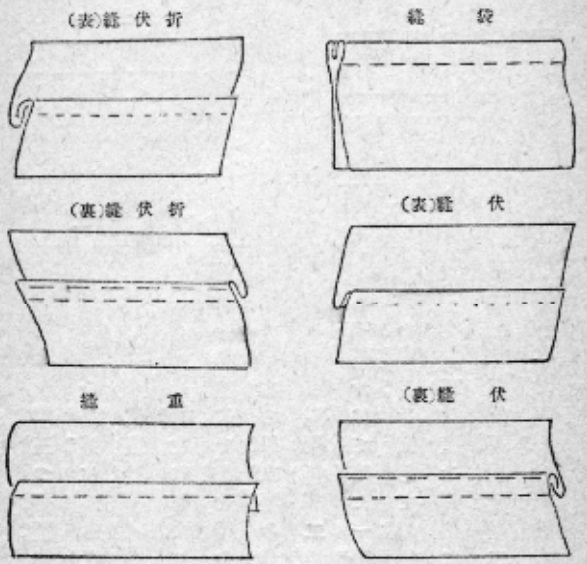
ひます。

(6)三つ折縫　布の端を二度折り、裏折代の端を普通に縫ふ仕方で、風呂敷の端等に用ひます。

(7)袋縫　布の表を出して一分位の縫代に合せ縫をなし、更に返して裏を出して四五分位の縫代で、合せ縫をする仕方で、單衣物の裾の底、絹布の單衣物の背縫などに用ひます。

(8)伏縫　二枚の布を縫ひ合はせ縫目に折をかけて、裏に一分か二分位の針目表には小さく針を出して縫込みの端を伏せ置く仕方で、布の耳を伏せる時に用ひます。

(9)折伏縫　二枚の内一枚を一分五厘位控へて縫合せ縫込みの少ない方へ折をかけ、更に長い分を折つて、其の上を伏縫と同じやうに致し、



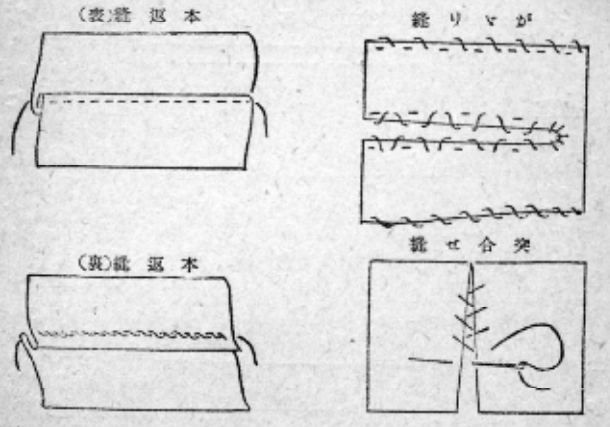
突合せ縫　かがり縫　袋縫

布の裁目の時等に用ひます。

(10)重縫　裁目のままを重ねて一筋か二筋か縫合す仕方で、紐や帶の薄地等を接ぐ場合に用ひます。

(11)かがり縫　裁目のほつれを防ぐ爲めに端を巻きながら縫ひ行く仕方で、袵肩明、鉤衽、毛織物の裁目等ほつれて困るところに用ひます、そして、袵肩明の角は、一針拔きに致します。

(12)突合せ縫　裁目のままの布を双方から合せて、一分



本返縫　半返縫　かがり縫の掛け方　平袵　額袵

位の深さに針を布の端に交る〳〵掛けて縫合す仕方で、地厚の帶裏袵裏等を接ぎ合す時に用ひます。

(13)本返縫　一針縫つて針目の全部を返して縫ふ仕方で、ミシンの代用に致します。

(14)半返縫　一針縫つて針目の二分の一だけ返つた處から縫ふ仕方で、縫目を割る時に用ひます。

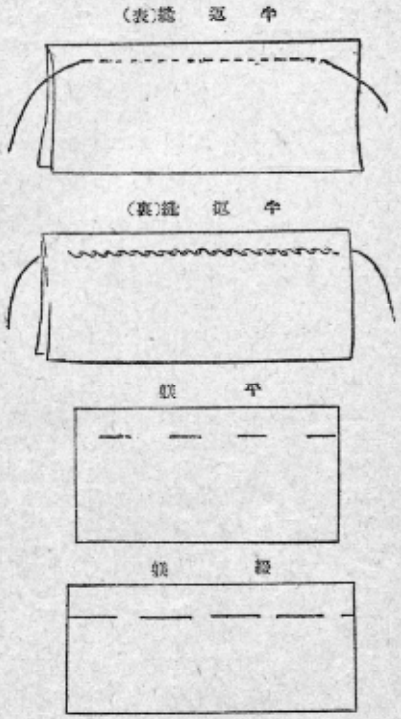
袵の掛け方

(1)平袵　裏表共同じ針目で綴ぢおく仕方で、羽縫の袵帶の端などに用ひます。

(2)額袵　表に一寸以上裏に二三分位の針目にして綴ぢるので幾枚かを一緒に綴

縫並

縫縫



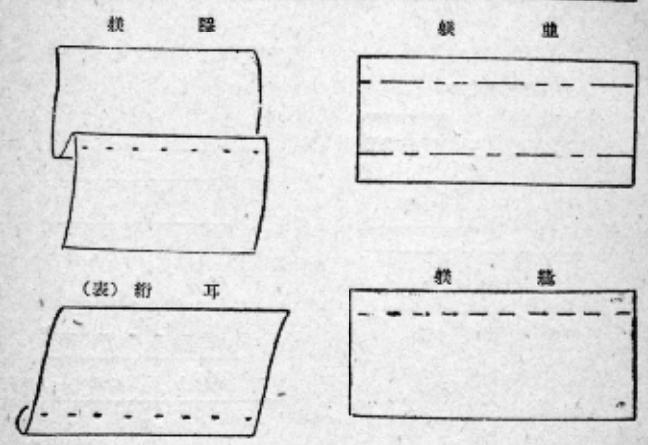
ちる時に用ひます。

(3) 並縫　雌針雄針とも云ひ、雌針一分五厘位雄針一寸位に致します、又小針の數によつて一目落し、二目落し、三目落しとも申します。二目落しは木綿に、三目落しは絹物に用ひます。又針目の大小は、品と場所とによつて應用致します。

(4) 縫縫　ぐし縫とも申します。並縫の針目で縫を掛ける仕方で、縮緬、メリンス等に用ひます。

(5) 隱縫　仕上げて後に取り捨てぬ樣に、共色の絲で五六分置きに表の針目を小さく出します、褄先、袖口、入羽織の前下り、胴接等に用ひます。

三ツ折紩　耳紩　方　隱縫

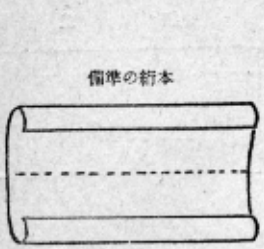


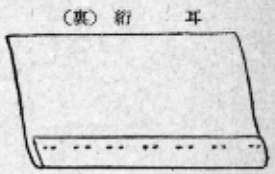
紩方

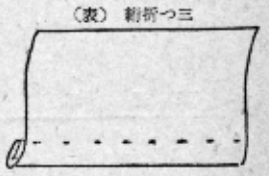
(1) 耳紩　縫ひ込みを裏に折り耳の端を紩ける仕方で、裏に一針小さく出し小針に表に一針又裏に一針出し、布と耳との間を通る、針目は品と場所とによつて三分位から六七分位の大きさにして、木綿の單衣等に用ひます。

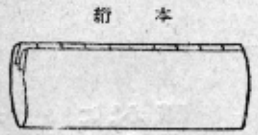
(2) 三つ折紩　布の裁目を隱す爲めに

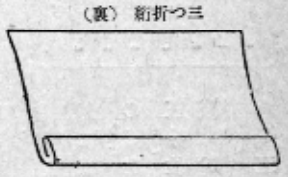
本紉











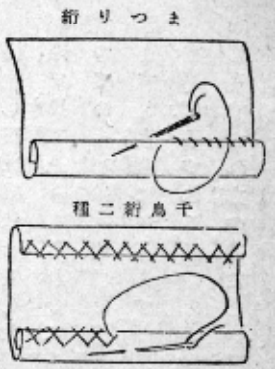
端を二度折つて、表に小さく裏の山の折目の中は品と場所とに依つて、三分から五分位迄の針目を通して紉けます、單衣の袖口、衿下、裾紉等に用ひます。

(3)本紉　布の兩端を折り、それを又二つに折り、折り山から二三厘中側を二分から三四分迄の針目に、向ふも手前も同じ大きさにして紉ける仕方で、冬物の衿下、八つ口等に用ひます。

(4)まつり紉　布を三つ折にして右の端から絲を掛け始め、先づ表の布を少し抄ひ其の針先を斜

まつり紉

千鳥紉



に三つ折の上に出し、一分位の針目に紉けます。毛織物やミシン仕立の紉ける場所に用ひます。

(5)千鳥紉　布の薄い物は三つに厚い物は二つに折り、左の方から折目の端の所では表に小さく出して、折目では表に出さずに紉けて右に進む仕方で、毛織物又は地厚の單衣物などの伏縫又は紉ける場所に用ひます。

捲紉

(6)捲紉　布の端を紙の小巻を捲るやうに捲つて、小針にまつり紉をする仕方で、上仕立の單衣の袖口、夏コートの竪衿の端などに用ひます。

布の整理の仕方

湯通し

布の整理の仕方

(1)湯通し　毛織物などは着て居る内に丈がつまつて來ますから、反物の間に湯通しを致しますと縮む物は縮みますから、それから後に裁ちます。

糊抜

(2)糊抜　新らしい物を其儘仕立ますと、雨で濡れても縮になつたり汚點になります。之れは糊が出て其の雨又は、汚點の爲めに縮が出たりなどして目立つのでありますから、最初に糊抜をして置かなくてはなりません。その仕方は入浴の出來る位の溫度の湯五六升に、布の一方の端から段々と入れて充分浸し、十分間の後引上げて絞らずに乾します。

地直し

(3)地直し　布目が曲つてゐたり幅がでこぼこしてゐたり、耳がたるんだり或はつれたりしてゐる物を平に直すことを地直しと申します。

湯通し又は糊抜きをした後に地直しをして、それから裁ち方にかかると仕立が樂で、出來上りもきれいに出來着具合もよろしうございます。その仕方は曲つてゐる布は、布の曲りと反對に兩耳を斜に持つて引きのばし、次に横に引きますと眞直になります。耳のたるむ物は、耳を少し濕して鏝をかけると縮みます。耳のつれる物は、端を紙臺にかけ一尺位離れた所を充分に引き、鏝でのばします。つれ方の甚だしい物は所々に鋏を斜に入れて切り込みを入れます。幅の充分ある物は、耳を切り去つても差支へありません。

積り方裁ち方の注意

仕立上げ寸法に就て

裾の付け方に就て

積り方裁ち方の注意

衣類を裁つ前に先づ織斑、染斑などの有無を布全體に亘つて調べ、もし有らば其れを隱すやうに工夫して積らなくてはなりません。

布の調べが終りましたらば總丈を計り、各部分の寸法を積つて見て必要の寸法よりも布が不足ならば、各部を少し短かくするか或は裁ち方を變へるか致します。布が餘る場合は寸法を充分にしてなほ餘ります場合には殘して置きますと、燒穴、鉤裂など出來た場合に用ひることが出來ます。

仕立上げ寸法に就て、縫ひ方は上手でも、着用してから身體に合はないと見苦しいものでありますから、着る人が肥つた人か痩せた人か大きい人か小さい人かを確めて、その體格に合ふやうに仕立上寸法を定めます。

裾の付け方に就て　裁ち終つた布は表を中にして折り、總べて上部を左に下部を右にして平に置きます。例へば袖は袂底を右に、袖口を向ふに、身頃は衿肩を左の手前に後幅を上に。

篦は細く小さく付けて、それを重なつてをる布に段々に寫します、毛織物などで篦の付き難い布は絲標かチヨークを使用いたします。

縫ひ方に就て

縫ひ方に就て　標通りに待針をして、着用の後縫目の彈がるところは（脊縫、脇縫など）針目を小さく、縫目の擴がらぬところは（袷の袖口裾など）縫目を少し荒く綻び易いところ（袖付、袖口など）は留をしつかりとして、全體に亘つて、絲のしごきをよくすることに注意が肝要であります。折りきせ、脊縫、脇縫、衽付、袖付、衿付の如きは三厘位、袷の袖口、八つ口、裾合せなどは六七厘位の折りきせにした方がよろしうございます。全體に亘り折りきせが多いと仕立上りはきれいに見えますが着てから崩れて來て衽が出來ては困る場所の裏がふいいり、表がふいたりいたしますから、折りきせは少い方がよろしうございます。

仕上げ

仕上げ　縫ひ終つたならば仕立上げ寸法をよく調べ、針や絲屑などが付いていないか其他萬事に注意して全體を調べた後、木綿物は水霧を吹いて重押をし、毛織物は水霧を吹いて強いアイロンをかけ、絹物は水霧なしでアイロンをかけ輕い押をしてをきます。

第二講　本裁の單衣物

本裁

本裁とは普通一反の布を裁ち合せて、一枚の着物に仕立てたものでありまして、これを大人物といひ、十四五歳から着用致します。衣服の種類は澤山ありますが、その最も基礎となるものは、本裁の單衣であります。そしてこれには男物と女物とあります。

地質

單衣物にはどんな地質を用ひるか、次にそれを書いて見ませう。

木綿織　平木綿、瓦斯、紡績、絣類

麻織　かたびら、上布類、

絹織　銘仙、すきや、つむぎ、お召、絽、縮緬類、

交織　種々

男物は女物とくらべて、地質縞柄等は範圍が狹ふございます。肩當や居敷當は男女共晒木綿麻布、モスリン、絲絹の類を用ひます。裏衿にはモスリン、絲絹、縮緬の類を用ひます。男物は晒木綿メリンス等を用ゐます。

女單衣寸法
棒衽裁
鉤衽裁

女物單衣仕立上寸法

袖丈　一尺六寸内外　袖口　六寸
袖幅　八寸五分　身丈　三尺九寸内外
身八口　三寸　後幅　七寸五分　袖付　六寸五分
衽下り　六寸　前幅　六寸　肩幅　五寸五分
衿幅　丸衿一寸五分　廣衿　三寸　衿肩明　二寸二分
　　袵　一尺六寸五分

以上の寸法は普通の體格の人の着物の仕立上寸法であります。仕立上寸法は、それを着る人々の身長體格によりまして着心地や格好等のよい樣に仕立なければなりませんから實際に仕立ます場合には、其の人に適當な寸法に依るべきであります。

女物單衣の裁ち方と積り方

棒裁と鉤裁の二種の裁ち方があります。棒衽裁を普通としますが用布の長さの不足の場合又は地厚物で衽の先に縫ひ込が多くては仕立るに困る樣な場合には鉤衽裁ちに致します。けれども鉤衽裁は片面物には出來ません

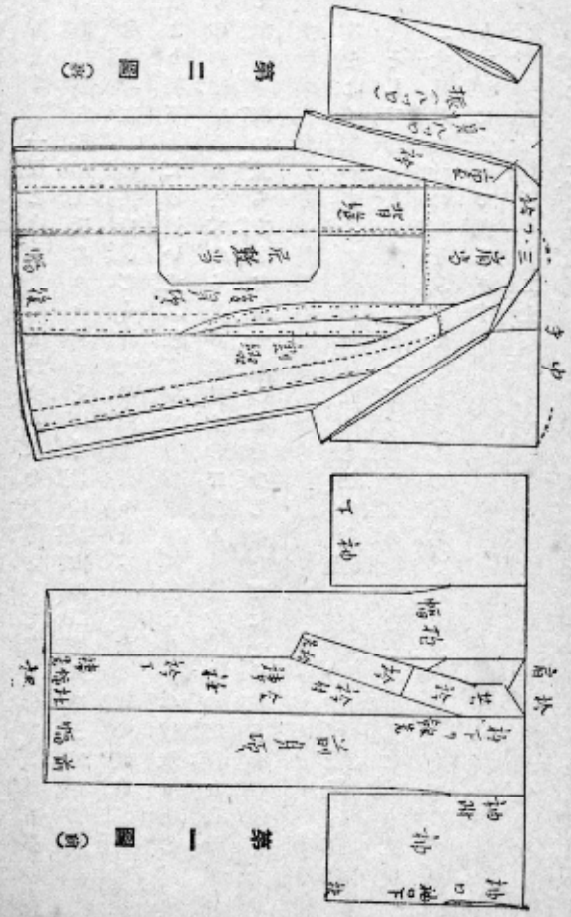


圖 I (三)

圖 II (※)

裁縫各の部名次單物女

し、又仕立直しをした時に、袵を上下に取り替へる事も出來ませんから、不便であります。一反と申しますと、二丈八尺を普通として居ります。棒袵裁の布の數は袖左右必要であります。その寸法は袖丈の四倍入ります。

身頃も左右必要で同じく、身丈の四倍要ります。袵は半幅で左右必要で、身頃より袵下りだけ短い丈二枚必要であります。袵は袵を半幅取りました殘りの半幅でありますから、長さは袵丈の二倍あります。この布數を合せまして、本裁單衣の裁ち方となり、一反の布を少しも、むだにせず裁ち合せます。

女物單衣裁ち方圖及裁ち切り寸法

布をよく調べて、耳の吊たり、延たりしたのを直し、傷の有無を充分注意します。そして、着る人の體格によつて寸法を定め、計算をして裁方に掛ります。

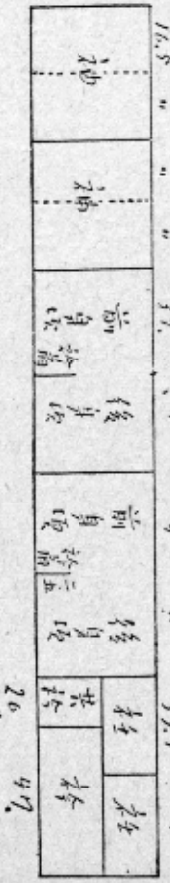
二丈八尺九寸の布を以つて棒袵裁ちの裁ち方積り方計算をして左の裁ち切り寸法に依りて裁ちます。

用布　二丈八尺九寸　袖丈　一尺六寸五分
並幅　袵肩明　二寸五分　袵幅　四寸八分
三尺九寸
身丈

棒袵裁方圖

第　圖

袵下り　五寸五分　袵丈　四尺七寸



積り方公式及び算式

(イ)袖丈と身丈とが知れてゐて總丈を知るには

公式　(總丈－袖丈×4＋袵下り×2)＋6＝身丈

算式　(16.5×4＋(3.9×6－5.5×2))＝289寸

(ロ)總丈と袖丈が知れてゐて身丈を知るには

公式　(總丈－袖丈×4＋袵下り×2)＋6＝身丈

算式　(289 − 16.5 × 4 + 5.5 × 2) ÷ 6 = 30

(ハ)袖丈と身丈が知れてゐて袖丈を知るには

公式　〔袖丈 −(身丈 × 6 − 袂下り 2)〕÷ 4 = 袖丈

算式　{289 − 39 × 6 − 5.5 × 2)} ÷ 4 = 16.5

(ニ)袂下丈を知るには

公式　身丈 − 袂下り = 袂丈

算式　39 − 5.5 = 33.5

(ホ)衿丈を知るには

公式　(身丈 − 衿下 + 衿肩廻 + 衿先縫代) × 2 = 衿丈

算式　(39 − 19 + 25 + 1) × 2 = 47

(ヘ)共衿丈を知るには

公式　袂丈 × 2 − 衿丈 = 共衿丈

算式　33.5 × 2 − 47 = 20

積り方が出來て裁ち切り寸法が定まりましたらば、先づ袖丈を計り、之れを

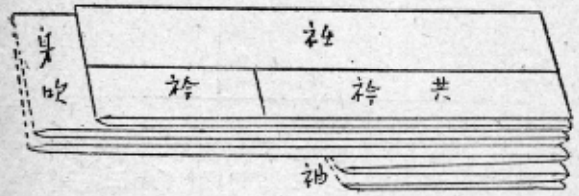
寸法の再調

肩明

四枚折り重ね其上に身丈の四枚を折り重ね次に袂丈の二枚を折り重ねます。

第四圖

用布を(袖)(身頃)(袂)と折りたる圖



そうすると圖に示した様になります。

次にこれを裁ち切るのでありますが、まづ尺度をあて、寸法を調べ、更に枚數も調べて、間違ひのない事を確めた後に裁ち切ります。

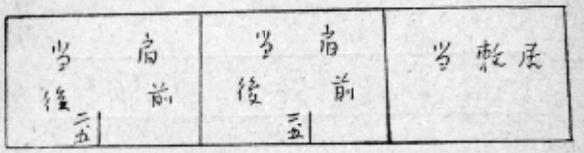
第一に袖四枚と身頃四枚との境目を切り放ち、直ちに袖は二つに切り放ち、左右の袖を別々に二つに折つておきます。

次に身頃四枚と袂二枚との境を切り、身頃を四つに折り、之れに衿肩明を二寸五分明けて、裾の輪を切つておきます。

袂と衿は半幅にするのでありますが、幅が充分にない物は衿幅の方を少し狭く裁ちます。袂幅が四寸八分位の裁ち切りになる物は半幅でよろしいの

共衿
衿裏
三ツ衿芯
肩當
居敷當

第五圖



であります。紅は二枚切つて、衿は衿丈を定め、共衿と切り放ちます。之で裁ち終へましたから、次には衿裏、肩當、居敷當、三つ衿布を用意しておきます。

衿裏丈　四尺七寸　肩當布　三尺
居敷當　一尺二三寸　三つ衿芯　半幅六寸位

肩當は表の地質によつて寸法を違へたり、又横布を使ふこともあります。薄物は肩當や居敷當を用ひないのを普通として居ります。

肩當は殆んど別布を用ひますけれども、居敷當は表の裁りがある場合には共布を用ひることがあります。

肩當　居敷當の裁ち方

肩當は後前の寸法を違へることもございます。それを前後の差と申し二寸か二寸五分位後を長く裁ちます。これで女物本裁單衣一枚の全部を裁ち終りました。

標附け方順序
袖の標附け方

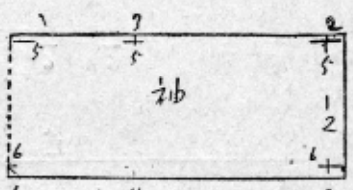
本裁女物單衣の標附け方

順序

1 袖　2 後身頃　3 前身頃　4 紅　5 衿

第六圖

袖標附方圖



1 袖　中表に二つに折り、輪の方を左に袖口を向ふにして兩袖を重ねて正しくおきます。

(一)袖の山標、袖付の方の輪の端に山形に標をし袖口には標はつけません。

(二)袖丈、出來上りの寸法に約五厘多く、向ふ手前、中央の三ヶ所。

(三)袖口、向ふ側の左端から計ります。

(四)袖付、手前の山より計ります。

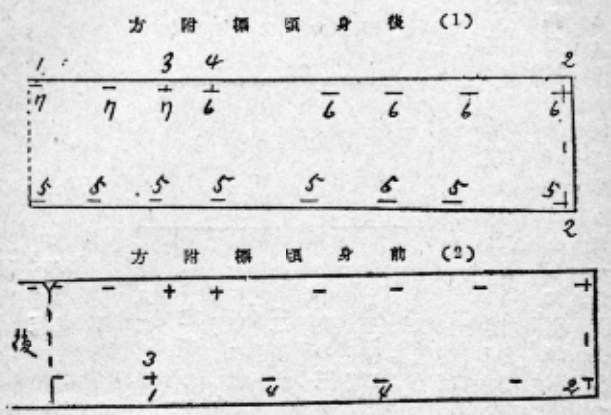
(五)袖口の紐代、向ふ側の耳端より三分。

(六)袖幅、袖口の縫代より袖付の方に向ひ出來上りの寸法に五厘加へます。

これで袖の標がつきました標が不明になると困りますから、少さくてはつきりとよくわかるやうに一枚毎にうつしておきます。

身頃の標附け方

第七圖



2 身頃

中表に二枚合せ衿肩から二つに折り後身頃を上に衿肩明を左に脊を自分の方にしておきます。

(一)肩の山標、(二)身丈の裾の紉代を五分、(三)袖附の標、(四)身八ッ口、(五)背縫の縫代を三分(脊縫は絣又は縞を通す)(六)後幅、(七)肩幅、後幅は出來上りの寸法より一分廣く(肩幅も同樣)

これで後身頃の標は終りましたから、一々下の布にうつして標をし後身頃を卷いて前身頃の標をつけます。

先づ後身頃の標をうつし

袖の標附け方

(二)袖下り、(二)前幅、出來上りより五厘位廣く、(三)袍幅、(四)袖付裾から約一尺位を眞直に致しますと、着心地が宜いのであります。そして袍幅を目標に斜につけ、袖下りから裾迄の寸法を計ります。之は袖の丈を知るのであります。

身頃はこれで終りましたから下の布に標をうつしておきます。

3 袖の標附け方

表を中にして左右の袖を合せ袖先を左に衿下(裁目)を自分の方にして正しくおきます。

(一)裾の紉代五分 (二)衿下(三)分を眞直に (三)袖幅出來上りの寸法に五厘加へて (四)相接幅(袖幅より四分少く) (五)合縫と紅裾幅とに尺度を當て斜に標し、それより上は袖丈の標のところで自然の斜より三分位縫代を多く (六)袖丈 (七)衿附 (五)の標より一分はなして標をつけ、それより衿下の標迄に尺度をあてて衿附けの標をつける。

4 衿附の標附方

衿附の標附け方

袖裏方

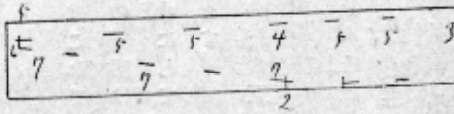
衿を中表に二つに折り輪を左に衿附(裁目)を向ふにして裏衿を下に表衿を上に重ねます。

(一)衿山、(二)衿丈、(三)衿附の縫代三分、(四)衿幅の標、出來上りより五厘廣く、裏衿はそれより一分せまく、

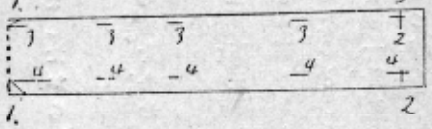
これで標附は全部すみました。

第八圖

(1) 衽標附方圖



(2) 衿標附方圖



縫ひ方

袖裏を中にして二つに折り、袖下の處の兩端を約一寸位づつ致して五厘の縫代で引き返して裏を出し標を合せて待針をし、振の方から縫ひ始め、角の所では標の外側を縫ひます。袂の丸味をつける物は角の五分の間を丸く縫ひます。

袖口明の處は抄留をし、一寸程返し縫にして、それから打留をしておきます。

これで縫ひ終りましたから折をして角を綴ぢ

背の縫方

肩敷當附方

目當附方

脇縫

ます。その時袖下を先に袖口下を後より折ります。次に袖口の三つ折り綴を致します。外袖も内袖も袖口留の兩側に必らず一針出し、内袖の方は更に一針紮けます。

身頃、脊縫から始めます。先づ衿肩明をかがり、ここを右にして脊を縫ひ、裾は返し留めにします。二重縫は肩當と居敷當の處はいたしません。

肩當と居敷當　先づ肩當の端を二つ折りにして三分位の針目で伏縫をし居敷當は下の一方だけ伏縫をしておきます。

肩當の脊を縫ひ衿肩明を右にして、身頃の向側に當て、脊縫を揃へて縫目の際を綴ぢます。そして身頃と肩當とを左右に開き、衿肩と前身頃の縫込み及び幅の兩脇を綴ぢます。

居敷當は二つ折りとし、衿下の寸法二寸五分加へた高さの所より肩當と同じやうに、居敷當を身頃の向ふに當て、脊縫に五六分の針目で綴ぢつけ開いて下の方を除き、他の三方を後巾に紮けつけます。

脇縫と脇綴、一方は前身頃を見て、一方は後身頃を見て兩脇を縫ひ、前身頃

の方に折り、縫代を割つて割り伏をし、縫込みの耳は縫込みの深い物又は薄物は折り、其の他の場合は耳のまま身頃に紐けつけます。

衿下紐　衿下紐、兩衽の衿下を、合褄の標より約一寸位上まで三つ折紐に致します。

衽附　衽附、次に前身頃及び衽の標をよく合せて待針をうち前身を見て縫ひます。

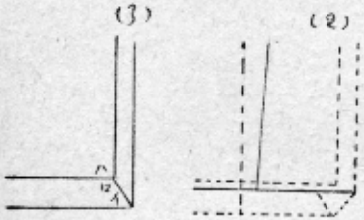
裾紐　裾紐、裾紐代を三つ折りにし、褄先を圓の如く折り、(イ)(ロ)(ハ)の順に針目を出して紐け、其他の處も表は極く小針に裾を手前にして縫目毎に一針づつ表側に出して、其の所をしつかりと止めるやうにして紐けます。

衿附　衿附、表衿の縫代を折り、衿の山と脊とを合せ脊は五六分、衿肩明の處は一分の縫代にして待針を打ち、衿肩明の左右三分位の處で衿を充分弛め、それより衽先から三寸下までは衿を心持ち弛め、以下は衿を少し張り加減に致します。次に裏衿の縫代を折り、表衿と合せて下前衿先より上前衿先まで縫ひつけます。

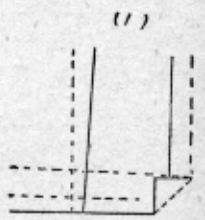
縫ひ方は、脊縫の處で一針返し、衿肩廻りを小針に、衽先の處は待針をぬいて

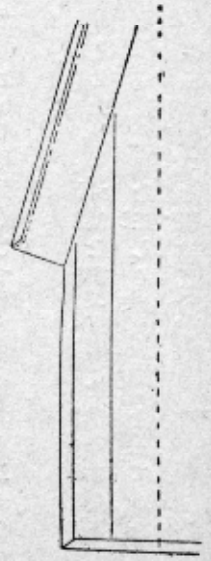
袖の附方　衿の折方　衿附縫方

第九圖　褄先折方順序



第十圖　裾の折り方





その穴に針を刺し、約一寸位一針抜きにし、他は普通に縫ひ、衿先は左右共抄留めとして、折は衿の方に返します。

衿紐　衿紐、三つ衿布を入れ衿幅を定めて折り、衿先に堅く四つ留めをして、その糸で衿先を縫ひ、折りは裏衿の方に返し、衿先の裏側は圓の如く褄形にし、鰾をかけて三分位の針目で紐けます。

袖ば身頃の脇明を折り、山標の處を約一分の縫ひ

代にして袖附の標より斜に折り、袖幅の標を合せ、山と附とに待針を打ち、袖を見て縫ひ、抄ひ留めで絡りも始めも留め、山で一針返します。袖の方に折りをして振を縫けます。振八つ口は折る場合もありますが、多くの場合は耳縫けに致します。

共衿附方

共衿、共衿丈の中央を脊に合せて、衿と綰目をよく合せ、共衿の方は、少しゆるめ加減に致します。そして要所即ち衿肩廻り、剣先等に待針をし、下衿より一二厘位共衿を出す位の程度で細かく縫けつけます。

衿糸

衿糸、衿糸は二本のより糸で、衿幅を二つに折り、脊と両肩の三箇所で二枚の衿を抄ひ衿糸の丈を衿幅の二倍より少し長くして切り、それから三ケ所の綰はそれ〳〵兩端を結ぶのであります。

仕上

仕上げ、これで全部縫ひ上りましたから、寸法を調べ、糸屑を除き、木綿物は霧吹で水霧を吹き、手できれいにのばし、折目を正しく疊み、重押をしておきます。銘仙以上のものはアイロン又は火熨斗を掛けます。

絹布は重押よりは輕く押しておく方がよろしいのであります。

二三才用

裁切つたまゝで出來る

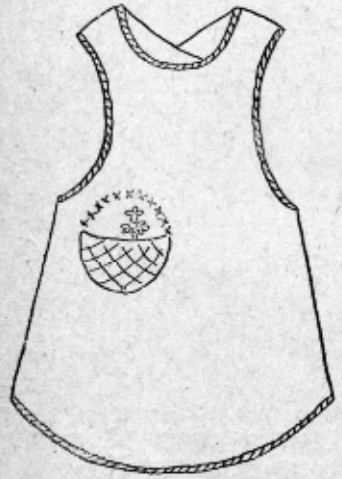
エプロンの仕立方

◇エプロン(二三歳)

このエプロンは圖の如く、極くあつさりした形でありますから、ポケットに花籠をつけて面白味をつけます。

ヨチヨチ歩き初めの御子樣に誠に可愛く似合ます。

出來上り圖 (1)



そしてこれは裁切つたものが其まゝ出來上り形になつて居りますので別に縫ひ合せる處はありません。ただ裁ち目の廻り全部を斜切かテープでおさへておくのであります。

斜切は裁目を覆ふ爲に用ひるのでありますが、一つには飾りと

後の形は十字ヌスキ

標の付け方

斜線の引き方

用布

もなりますから、なるべく引立つ色を用ひた方が宜しいのであります。

出來上り圖(2)の(イ)は(ロ)のスナップに、(ハ)は(ニ)のスナップに留めます。つまり後は十字形のタスキになるわけであります。

用布、幅二尺二寸　長一尺三寸

地質　キャラコ

斜切又はテープ　八尺

裁ち方

第一圖の(1)の樣に裁ちます。

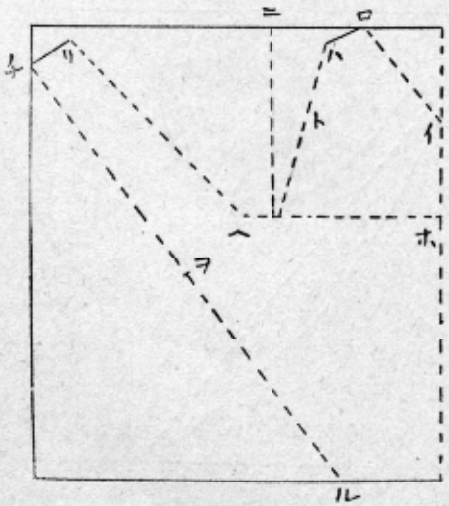
先づ布の幅を二つに折りまして圖の樣に置き、イロハの順に標附を致します。

(イ)は端より三寸二分(ロ)は端より二寸二分

(イ)と(ロ)とに斜線を引きます。(ハ)は裁目より三分入り(ロ)より一寸二分、——(ニ)は端より五寸(ホ)は端より五寸として(ニ)と

裁切り線の引き方

第一圖の(1)



(ホ)で直角を作ります。(ヘ)は(ニ)と(ホ)の線の角より(ホ)線を、五分延ばします。(ト)は(ヘ)より七分入つた處と(ハ)とに斜線を引きます。(チ)は裁目より八分(リ)は裁目より四分入つた處に(チ)より一寸二分(ヌ)は(リ)と(ヘ)とに斜線を引きます。(ル)は右端の輪より二寸五分(ヲ)は(ル)と(チ)に斜線を引きます。

これで第一圖(1)の線が全部、出來ましたから、次に第一圖(2)の樣に裁切線を標します。

(ワ)は(イ)と(ロ)の中央にて六分

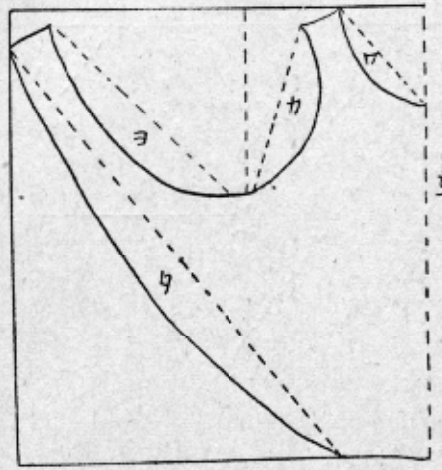
(カ)は(ハ)と(ヘ)の中央にて一寸二分(ヨ)は(ヘ)と(ト)の中央にて一寸

(タ)は(チ)と(ル)の中央にて一寸五分として各々圖の如く丸みをつけて裁ち切り

裁ち切り
斜切れの付け方
ポケットの付け方

線をえがきます。

第二圖の(2)



これが出來上りましたら線通りに裁ち切ります。

そして布を廣げますと、もうこれですつかり、出來上りの形になつて居ります。

この裁ち目の廻りに、ぐるりの斜切又は、テープを表に附けて二分位の縫代に縫ひます。返して裏でマツリつけます。

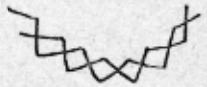
次に肩に二つづつスナップ(絲屋にあります)をつけます。

ポケットは口二寸五分深さ二寸にして底に丸みをつけて裁ち切ります。そして廻りの裁ち目にぐるりと斜切を表につけ裏にまつりつけまして脇の

刺繍で飾をする
男女兒兩用になる
四五歳用

折り目より五分脇の刻より一寸下げた處にポケット口の端を、あわせてマツリつけます。

第二圖



籠の手は刺繍に致します。絲はフランス刺繍の茶色がよろしいのでありますが、若しありませんければ普通の絹絲を二本にして用ひるとよろしいのであります。

第二圖の樣に二分位の針目にして十の字を斜めにしてつづければよろしいのであります。又一寸花等を刺繍したのもきれいでありますが、お洗濯した時色が出て困りますから、まあこの位がよろしいのでせう。

◇エプロン(四五歳)

これは圖の如く簡單でありますから裁ち方縫ひ方もやさしいので、初歩の方にも分り良い事と存じます。この飾布を時色又は藤色等に致しますと女兒によろしくありますし、水色又は黒等は男らしくなります。又細かい縞や格子縞等を用ひましたのも面白いものであります。

寸法は着物から割り出す

この形をよく理解なさつて普通標準寸法を會得なされば。他の形に應用する事が出來ます。

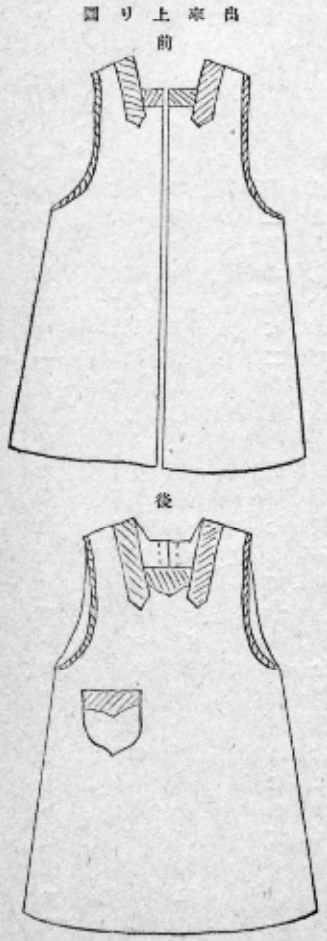
普通出來上り寸法

寸法は皆樣に御分りのよい樣にお子樣の着物から割り出します。

裾幅は後幅の四倍自至五倍。　衿肩明は着物の衿肩より一分廣く。

胸下りは衿肩明に一寸加ふ。　後下りは五分自至一寸。

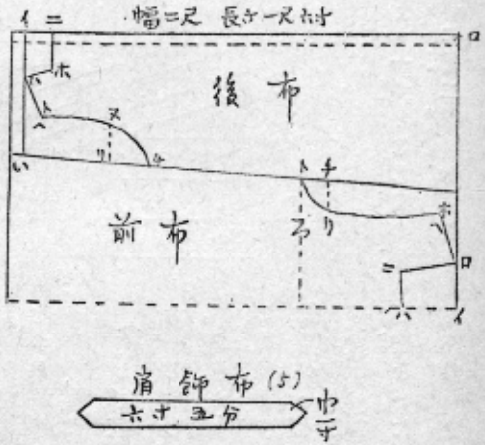
胸幅は着物の後幅より五分廣く（五寸五分か六寸位）。



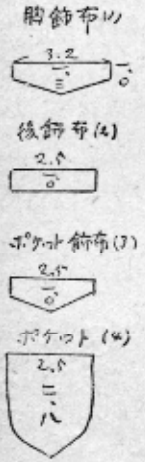
圖上り出來

用布　標の付け方　前布の標

第一圖



第二圖



用布は幅二尺長さ一尺六寸とし地質はキャラコがよろしいでせう。なほ飾布を幅九寸五分長さ七寸用意します。地質はギンガム、毛朱子、ビケー等がよろしくあります。

裁ち方

幅を二つ折りに輪を手前にして置きます。

（い）は輪より五寸五分。（ろ）は右の端より五寸五分入りたる處にて輪より四寸五分。（い）は（ろ）の標に通しべラを致し前布と後布とに分けます。

次に前布の標を致します。

（ロ）は（イ）より一寸六分。（ハ）は（イ）より

二寸五分。(ニ)は(ハ)より一寸三分。(ホ)は右の端より五分。(ヘ)は(ロ)より一寸八分として圖の如く衿ぐりを致します。

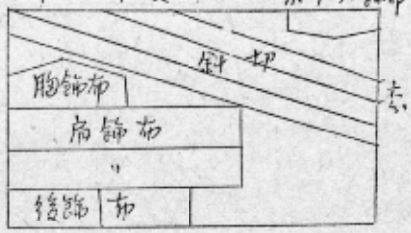
(ト)は右端より五寸五分。(チ)は(ト)より一寸五分。(リ)は(チ)より一寸三分。(ト)より(リ)を通り(ホ)に丸みをつけ脇の刳をいたします。

後布

(イ)は左端より五分裁ち落します。(ロ)は耳より六分となし上から下まで標を致します。(ハ)は(ロ)の點線より一寸八分。(ニ)は(イ)より一寸。(ホ)は(ロ)の點線より一寸五分。(ヘ)は(イ)線より五分。(ト)は(ハ)より一寸八分となし圖の如く後衿刳と致します(チ)は(イ)線より五寸(リ)は(チ)より一寸五分。(ヌ)は(リ)より一寸となし圖の如く脇刳をいたします。

次に第二圖の如く飾布を裁ち切ります。

第二圖の一



後布の標

飾布の裁ち切り

縫方順序

縫ひ方

一、後の(ロ)の標を裾から眞直に六分に折りをつけ更にそれを出來上り四分になります樣に三つ折りにして細かく絎けます。

二、肩を前後接ぎ合せまして後に折りをつけてマツリつけて置きます。

三、前衿刳(ニ)及び、後衿刳(ホ)の處に二分の切り込みを入れます。

四、胸に胸飾布をつけます。(ハ)(ニ)の處へ胸飾布を裏にあて一分五厘の深さに縫ひ、表に返して飾布の端を一杯に折つて表布にマツリ附けます。

五、後飾布を胸飾布と同じ附け方にいたします。

六、肩飾布を胸飾の如く、前衿刳り(ニ)(ロ)後衿刳(ハ)(ホ)の處に飾布を裏よりあて。一分五厘の縫代で縫ひ、表に返して飾布の端は一杯に折つてマツリ附けます。飾布の兩端は劍形にいたします。これで衿は出來上り圖の如くになります。

七、脇を袋縫ひに致し後に折りをつけます。

八、斜切を接ぎ合せ兩脇の裁目を一分五厘に折り、出來上り三分幅に鏝で折りをつけて置きます。

スナップの付け方及び仕上

七八才用洋服用

九、これを脇割りの處へぐるりつと、つけて表に返しマツリつけて置きます。

十、裾を五分幅に三つ折に致し細かく絎けます。

十一、ポケットの口に飾布を裏にあてて縫ひ、表に折り返して幅を一杯に折つてマツリつけます。

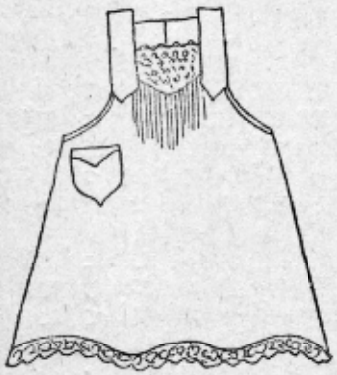
十二、ポケットの周圍を一杯に折りをつけて、身頃の右の脇下の縫代より一寸はなし、脇明より一寸下げた處をポケット上部の端にあてて附けます。後は左を上身としてスナップをつけ、それより二寸位下に、も一つ附けます。

これで全部出來上りましたから、アイロンをかけて仕上げを致します。

◇エプロン(七八歳)

これは七八歳の女兒の洋服用のエプロンでありますが和服の上に用ひましても、なかなか可愛いものであります。

前出來上り圖



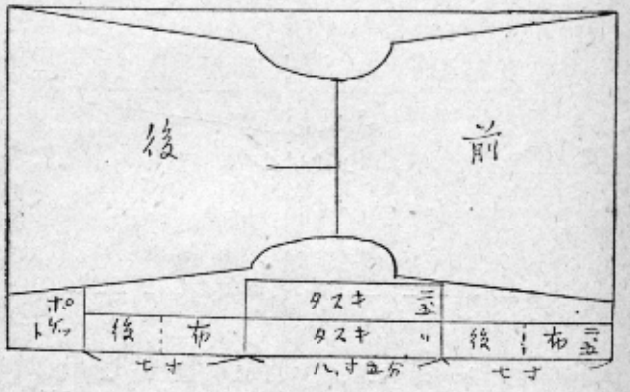
後布の付け方

巾に四寸の差を付ける

用布

第三圖の(1)

長さ二尺六寸　巾二尺四寸



用布は幅二尺四寸長さ二尺六寸入ります。地質はキヤラコとし倘テップ又は斜切二尺とレースを幅一寸位長さ六尺と同幅二寸長さ六寸のを用意致します。

裁ち方

裁ち方は第三圖の(1)の如くに裁つのであります。先づ第三圖(2)の如く幅に四寸の差をつけて折り輪を手前にして置きます。

前布を一尺二寸五分。後布を一尺三寸五分。と中央に標をつけます。

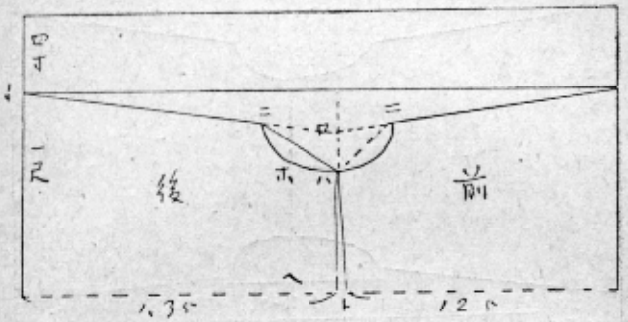
次に後布をイロハの順に標を致します。

前布の標

裾の裁ち方

第三圖の (2)

巾に四寸の縫ひ付けてニつに折たるもの



(ロ)は裁目より二寸とし(イ)より(ロ)に斜線を引きます。(ハ)は(ロ)より二寸五分(ニ)は(ロ)より三寸(ホ)は(ニ)より(ハ)に斜線を引き中央で八分丸みをつけます。(ヘ)は前後の裁切線より輪の處を四寸切り込みます。ここは丁度脊になる處であります。これで後布の標がつきました。

前布は(ロ)より(ニ)迄を二寸と致し(ニ)と(ホ)に斜線を引き八分の丸みをつけます。(ト)は前後の裁ち切り線より五分として(ハ)より斜線を引きます。これですつかり標が附きましたから線の通りに裁ち切ります。

次に第三圖の(3)の如くに裾を山形に裁ち切りますが前布を縦に二つに折りまして

裾を山形に裁ち切る

縫方順序

第三圖の (3)

裾の裁ち方



て更にそれを三つに折ります丁度六つに折れましたわけであります。

この時圖の如くに脇の方は、縫ひ込み三分ばかりを出して折ります。

(ロ)は裾口より一寸五分といたし(イ)より(ロ)に斜線を引き中央(ニ)は線の上にかけ(ハ)は(ロ)と(ニ)の中央で二分のふくらみに。(ホ)も(イ)(ニ)の中央で裾の方へ二分のふくらみを入れまして圖の如く山形に標をして裁ち切ります。

次に第三圖(1)の寸法通りに後布及びタスキ、ポケット等を裁ちます。

縫ひ方

一、脇縫ひを致します、此の時前布を後布より一分出して縫ひ後に返して折伏せにしてマツリ附けます。

二、脇の刳りにぐるりとテープを淺く縫ひつけてマツリます。

三、後身の脊の切込みの處は、左の方を細く裏に三つ折りに紺けて下身に致します。右は六分に折り更にそれを出來上り四分の幅に折つて紺け、上身と致

します。下身の上に上身を四分の深さに重ねて合せます。

そして切込の下の輪の處は其儘重なりましただけ六七分の襞を取りましておさまりよく致します。

四、胸の處を兩端一寸殘して縫ひ縮め五寸七分と致し、上から鍛で縫込の分だけギヤダの山をつぶして置きます。

五、後は脇から一寸離して縫ひ、それを三寸二分に縫ひ縮め同じく鍛で山をおさへておきます。

六、胸のギヤダの所に幅二寸長さ六寸のレースを兩端一分五厘出して表に重ねて縫ひます、そしてレースの方に折りをつけその上を返し縫ひに致します。

七、長さ七寸の後布を二つ折に端を二分の深さに縫ひまして其輪になりました間に後ギヤダをはさんで返し縫ひにして表に返します。

その返した口の處を二分ばかり裏に折つて表から返し縫ひに致します、尙ここを脊の方へ鈎の手に返縫をつづけます。

八、タスキの幅を二つに折りまして細長く縫つて返します。兩方の先は劍形

三四才用

用布

裁切りす法

致します。

九、其タスキを前はレースの端一杯に後は後布の端一杯に合せて本返し縫ひで兩方の端をつけます。この時タスキ布だけの處迄も全部返し縫ひにして置きます。

十、裾にレースをつけます、この附方は山形に出て居ります處はレースに一分位の襞を六七分置き位に取つて附けます、凹んだ處は襞をつけませんで平につけますと出來上りの格好がよいのであります。

十一、ポケットをつけましたら後にスナップを二つ附けます。これで全部出來上りました。

◇エプロン(三四歳)

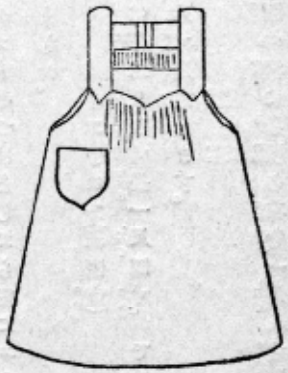
用布は幅二尺四寸長一尺四寸。で地質、キヤラコ、フランネル等とし、テップを一尺六寸用意します。

裁ち方

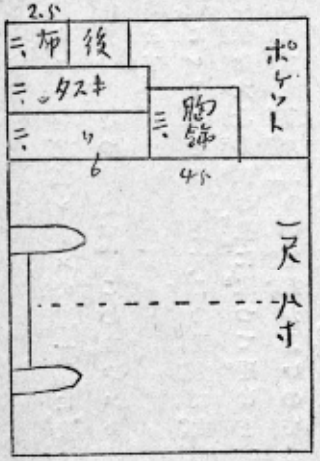
第一圖の樣に身頃の布を、一尺八寸幅に裁ち切ります。

標の付け方

出來上り圖後



第一圖



肩幅　長さ六寸　幅二寸二枚
胸布　長さ四寸五分　幅三寸
後布　長さ二寸五分　幅二寸
ポケット　口二寸五分　長さ二寸
八分

右の寸法に裁ち切ります。

次に始めに裁つた身頃の布を縦に二つに折り更に二つに折りますと、(二)圖に示す樣に四つに折れたのであります。それを(二)圖の樣に下に平に置き、手前側の輪の二枚重なつてゐる左手の角(イ)より四寸と(ロ)に標します。

(ハ)は(イ)より一寸(イ)と(ロ)の間の四分の一だけ(ロ)より上つた處迄は(ハ)の標を眞直に引き下げ、それより(ロ)までは圖に示す如く丸くして置きます。

そして(ハ)より(ロ)迄四枚一所に曲線通りに裁ち切り、それを擴げますと、第三圖のやうになります。

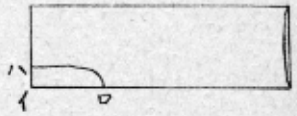
次に第三圖のやうに輪を手前に置きます。(ニ)を二寸(ホ)を二寸として(ニ)より(ホ)迄を眞直に裁ち切ります。

肩布は縦二つ折りにして輪でない方に縫代一分五厘と標し、兩端は(イ)より(ロ)迄を四分として劍形に標して裁ち切ります。

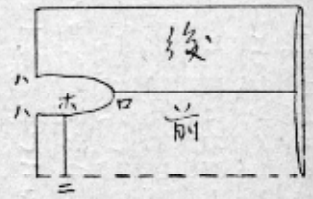
胸布は縦に二つに折り、更に二つに

標の付け方

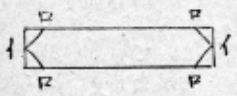
第二圖



第三圖



第四圖



第五圖



縫方

折り、四枚重なつてゐる端の角の(イ)の標から五分と(ロ)に標をつけ(ロ)の標を一寸位の間は眞直に致し、それより先にて内側に丸味を付けて(ハ)の角へと線を引き、(ロ)より(ハ)迄を裁ち切りそれを擴げますと第五圖の樣になります。是で全部裁てました。

縫方は七八歳用のとほゞ同じですが、次に一通り申上げませう。先づ最初に脇の剩りにテープをつけます。次に後布の背筋を左右とも四分巾に三つ折りにして縫けます。次に胸の處の兩端を一寸位殘して、飾布の巾だけに縫ひ縮め後も脇から一寸位離してそれを縫ひ縮めまして、どちらも上から鍵で縫込みの分だけギヤダの山をつぶしておきます。次に胸飾布を二つに折つて兩端を縫ひまして、表に返し胸のギヤダの所に縫ひ付け裏にてマツリ縫に致します。次に後布も前飾布と同樣に付けます。それからタスキを劍形に縫つて七八歳用のと同樣に本返し縫ひにして付けます。次に裾を出來上り五分巾に三つ折にして細かく縫けます。それからポケットをつけて、後にスナツプを付けますと出來上るのであります。

ギヤダ付き前掛　用布

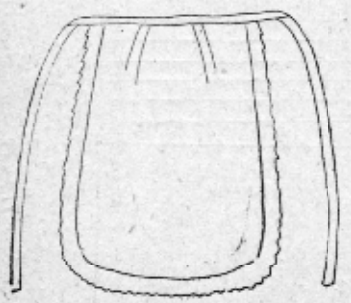
第三講　割烹前掛の仕立方

割烹前掛とは厨房の仕事をする時に掛けるもので、お召物の汚れを防ぐと同時に、身のまはりのバサ〳〵せぬやうに纏ふのであります。そして白い清潔な前掛で活動することは如何にも愉快にまた物が美味やうに感せられます。その形にも色々ありますがまづ簡單なものから始めませう。

用布はキヤラコ、天竺木綿又は格子縞等がよろしくありますが、單衣物の古いの等を利用なさるのも結構です。

一、ギヤダ付前掛

前掛出來上り圖（一）



用布　幅二尺四寸　長さ二尺一寸

着物の汚れを防ぐ爲に普通の前掛より幅をすつと廣くし、丈も長くして帶の上に掛ける樣にしてあります。

布取り

標付け方

丈は其人の丈けによつて長くも短かくも自由に致します。

裁ち方

始め布の端から一寸五分のギヤダ布を三本取ります。

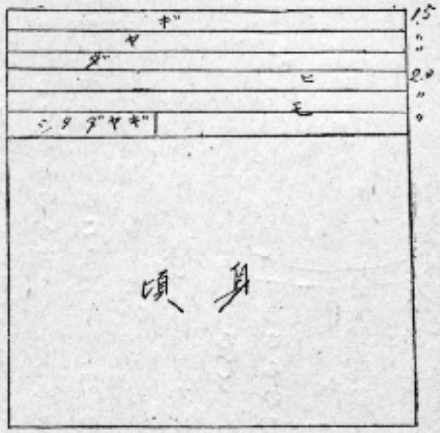
次に二寸幅の紐布を三本取ります。この内の一本は長さの$\frac{1}{3}$だけギヤダに廻します。

殘りの布が身頃になるのでありますから第二圖の樣に輪を手前にして置きます。

(イ)輪の左から五分。

(ロ)裁目の方より五分として(ロ)から

第一圖



(イ)に斜線を引きます。

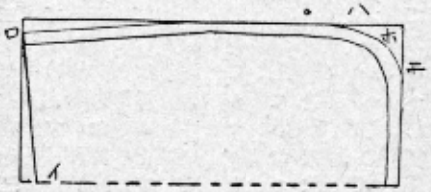
(ハ)裁目より三寸。

裁切り

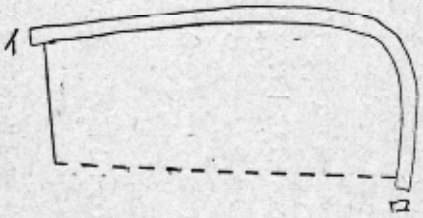
(ニ)裁目より三寸。

(ホ)角の處より一寸二分入つた處に標をして(ハ)(ホ)(ニ)と丸みをつけます。

第二圖



第三圖



次に丈の中央から(ロ)に斜線を引きます。

右の標が出來ましたら、圖の樣にその標より六分内側にグルリと標をして標通りに裁ち切ります。

この六分幅の裁ち落し布は、みかへし布にいたします。

このみかへし布を身頃の端の處へ重ねますと第三圖の樣に(イ)(ロ)の處へ端が出ますから(イ)の方はそのままそろへて切ります。(ロ)の方は接ぎ代だけ殘して裁ち切ります。

縫方

縫ひ方

(一)二本半の紐布をしつかりと接ぎ合せてから紐けます。

(二)ギヤダ布を三本半接ぎ合せます。次に片端を一分位の巾に三つ折りにして紐けます。

(三)今紐けた反對の端を、極淺く縫つて、この長いギヤダ布を身頃の廻りの丈けだけに縮めます。

(四)身頃の中央とギヤダの中央とを合して待ち針を打ちます、そして何處も同じ樣に、ギヤダを平にして待針を細かく打ちます。

(五)其上にみかへし布の端を一杯にそろへて待針を打ち直しまして、一分五厘の縫ひ代で半返し縫ひに致します。全部縫へましたら。

(六)みかへしの布の方から、すつかり鍛をあてゝ、きせをかけない樣に折りをして、みかへし幅三分として折り表にマツリ附けます。

(七)これで紐を附けるのですが、出來上りの圓の樣に身頃に四五分の襞を二つ取りまして紐を附けます。

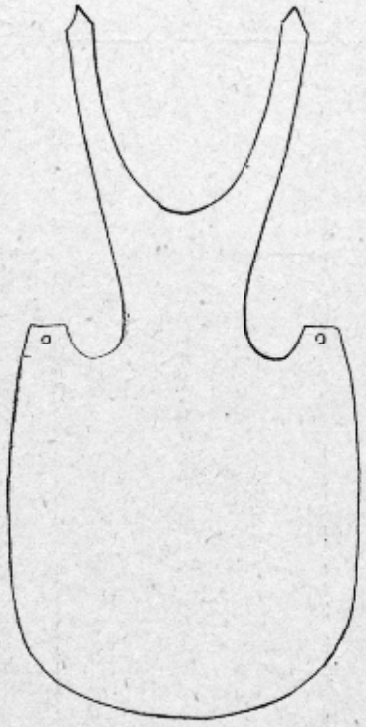
袖無し前掛

用布

二、袖無の前掛

この割烹前掛は袖のない簡單なものであります。脇の剏の處に袖をはさんで後はタスキになります。

出來上り圖(二)



用布　幅二尺
長さ三尺。

裁ち方

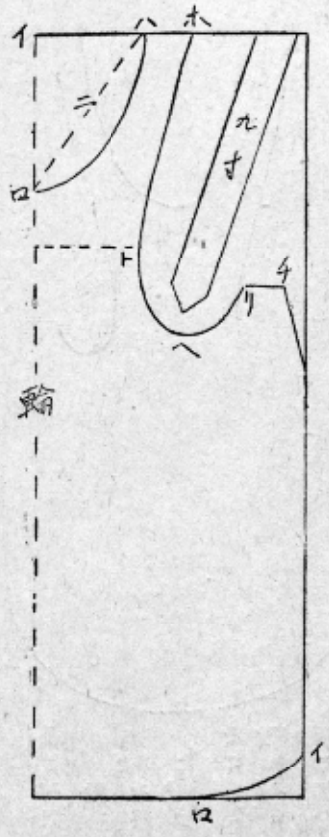
布を縱に二つに折つて輪を手前にして置き、イロハの順に標をつけます。

縫付け

(イ)五の端を(イ)とします。

(ロ)(イ)より四寸五分。

裁ち方



(ハ)(イ)より四寸として(ロ)より(ハ)に斜線を引く。

(ニ)(ロ)(ハ)の中央で一寸二分ふくらみを入れる、これが頭廻りです。

(ホ)(ハ)より二寸。

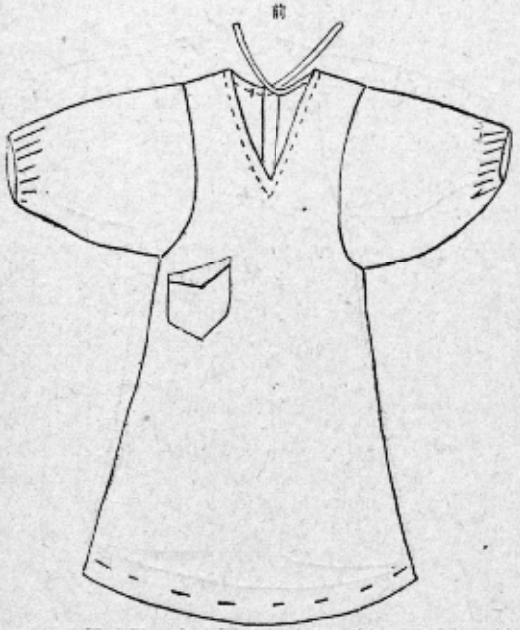
(ヘ)左端より一尺。

(ト)(ロ)より二寸下つた處で輪より四寸。

(チ)裁ち目より五分入つた處で左の端より、八寸五分。

裁ち切り

出來上り圖 (三)



(リ)(チ)より二寸(ホ)(ト)(ヘ)リ(チ)と圖の通り線を引きます。

(チ)より三寸ばかりの處で斜めに線を引きます。

これが脇の剳りであります。

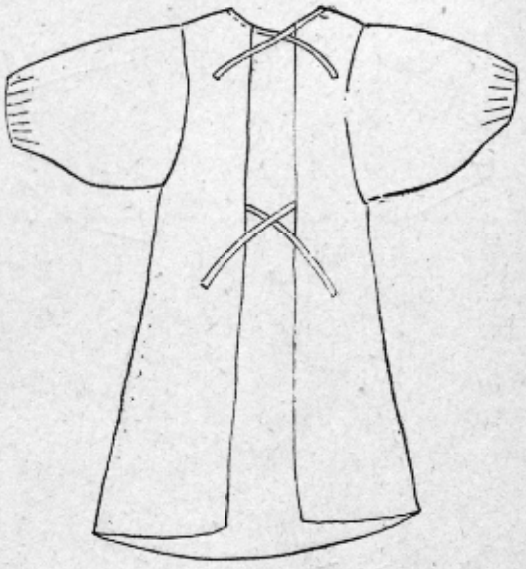
裾は(イ)一寸五分(ヰ)五寸として丸みをつけます。

タスキは二寸幅を斜めに圖の樣に九寸取ります。

これで線の通りに裁ち切ります。

縫方

出來上り圖（三）



縫ひ方

一、(ホ)(ハ)の處へ、タスキ布を接ぎます。

二、衿廻りを一分五厘位に三つ折りにして細かく絎けます。

三、脇の刳を矢張り三つ折りにして絎けます、タスキの兩端も同じく絎けます。

四、タスキの端と(チ)(リ)の中央とにスナップをつけます。

着用した時、後はタスキになつて脇の下でスナップで止めるのであります。

袖付き割烹着
用布
裁ち方
標付け

三、袖付き割烹着

これは(二)の割烹前掛よりも復雜して居りまして身幅も廣く後の方まで廻つて居り又袖も附いて居りますので、着物の汚れを、防ぐばかりでなく、身體がキチンと致しますし尚見た格好もよろしいのであります。

用布　幅二尺四寸、長さ五尺二寸。

地質　キャラコ、天竺木綿又は格子縞等がよろしいのであります。若し單衣物の、古いのを利用します時は、木綿巾を二布半又は三布接ぎ合せて圖の樣に裁ちます。

裁ち方

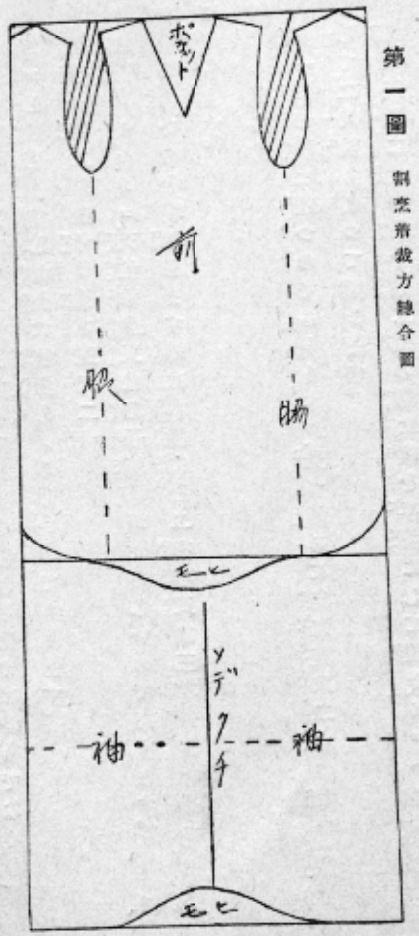
第一圖の樣に裁つのでありますが、先づ始めに總尺五尺二寸の中から、袖布として、二尺裁ち切つて置きます。

次に三尺二寸の布を、第二圖の樣に、輪を手前にして置き、イロハの順に標附けを致します。

(イ)輪の左の端に(イ)と標します。

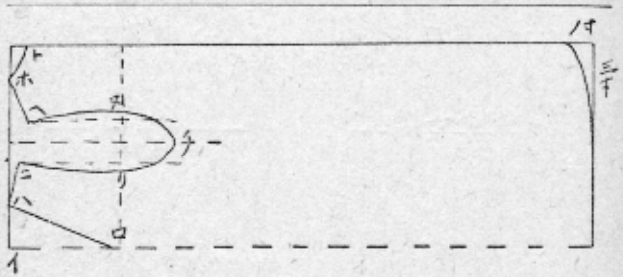
(ロ)(イ)より六寸五分。
(ハ)(イ)より二寸五分、(ハ)より(ロ)に斜線を引きます。

第一圖　割烹着裁方總合圖



(二)裁目より五分へ入つた處で(ハ)より三寸として(ハ)に斜線を引きます。
(ホ)左上の端より一寸五分。

袖裁ち方



第二圖　身頃の裁ち方

(ヘ)左裁ち目より一寸入つた處で(ホ)より三寸として、斜線を引きます。
(ト)左裁目より一寸として(ホ)より少し丸みをつけて標します。
(チ)(ニ)と(ヘ)の中央で裁目より九寸。
(リ)手前の輪より(ニ)を計り眞直に點線を引きます。
(ヌ)向ふの端より(ヘ)を計り同じく點線を引きます。
(チ)より三寸よつた處で(リ)及(ヌ)に二分のふくらみを入れて圖の樣に丸くします。
次に裾を圖の樣に三寸の處から丸みをつけて、一寸の切り上げをつけます。

袖の裁ち方

袖は巾二尺四寸長さ二尺の布を縱に二つに折り、更に横に二つに折まして第三圖(二)の樣に、左及向ふ

袖附けに丸みを付けること

側を輪にして置き、袖口七寸五分と標し、二寸ばかり眞直にして、それから丸みをつけて圖の樣にハマグリ形にします。

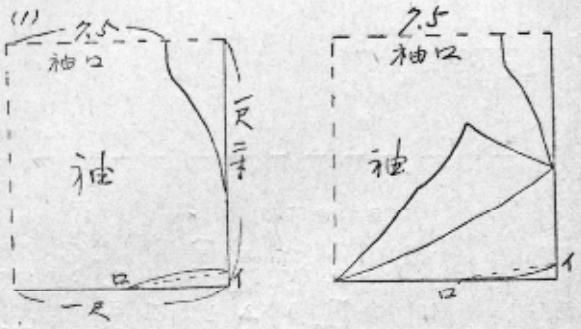
次に袖附は身頃の方が丸く刳つてある處に、眞直なものを附けるのは、嚴に附けにくいものでありますから。

第三圖(二)の樣に(イ)を端より五分と標し(ロ)は幅の中央として(イ)より(ロ)に斜線を引き、中央で外側に二分のふくらみをつけて標をして上の二枚だけ裁ち切ります。

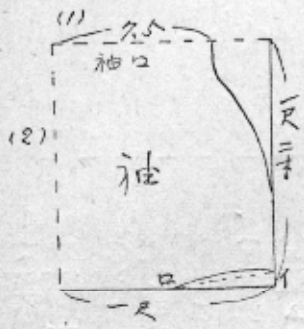
次にこの裁ち切つた二枚を上に、よけて下の二枚には反對に前の斜線よ

第三圖の(一)

袖の裁ち方



第三圖の(二)



注意の時る折か袖
すましに輪てつ折を方の(ニ)に次しに輪てつ折に先を方の(イ)め留

り、內側に二分の丸みをつけて第三圖(一)のやうに標しをして裁ち切ります。

つまり前袖は袖附の處が、ダブダブしない樣に二分切り込み、後袖附は手の運動に、ともなひ前に引かれるので二分ふくらみを附けて、餘裕を取つてあるのです。

これで大體裁てました。

若し肥つた人でしたら、胸下り(ロ)を七寸とし又(ト)より(ホ)の部分を一寸にして、袖の刳りを大きく致しますと者よいのであります。

ポケット　衿の刳り落しから取ります。

紐　出來上り幅三四分長さ五六寸として袖の裁ち落しから取ります。

斜切　これは衿の廻りに力布として用ひるのです。

袖刳りの裁ち落しを幅六分として斜に何本も取り接ぎ合せて衿の廻りの丈だけにします、そしてこれを兩端から折つて三分の幅にして鍛をかけて置きます、これで全部裁ち終へました。

縫ひ方

縫方

斜切の付け方

一、すべて縫ひ代は極く淺くして、細かく縫ひまして、折り伏せにして、マツリ付けます。

二、袖下を縫ひます。縫ひます時、後袖の方を一分先へ出して合せて縫ひます。

そして前袖の方に折り伏せ三つ折の事にしてマツリます。

三、身頃の肩つまり(ニ)(ハ)と(ホ)(ヘ)とを合せて縫ひ、後身の方に折つて、マツリ付けます。

四、衿廻りは、グルリと斜切をつけます。

附方は前に折つて鏝をかけて置きました斜布を衿廻りの表にあてて縫ひ、裏に返して、マツリます。

五、次に袖をつけます。折りは身頃の方に折り伏せにしてマツリます。

六、裾を一寸折り出來上巾八分に縫けます。

七、袖口を七分折り出來上り巾五分に縫けます、縫け終りを一寸ばかり殘しておき、そこからゴム又は紐を通します。

八、紐を三四分の幅で六七寸の長さに縫けまして、衿の後につけ、それより一尺

衿刳り

ばかり下にも二本つけます。

九、ポケットは隨意の形にして袖附より一寸下に、脇の折目より五分前身の方によつた處をポケットの上部の端に合せてマツリつけます。

これで全部出來上りましたから、アイロンをかけて仕上を致します。

衿廻りに斜布を用ひました處をレース又は格子縞の斜布等にて飾りにするも結構です。

四、衿刳りの裁ち方二種

第三の割烹着の衿は出來上りの圖の樣に劍形になつて居りますが、これは丸衿にも角衿にも自由に裁つ事が出來ます。

丸顏の人は劍形の衿になさると調和がよろしくありますし又面長の人は丸衿になさると愛らしく見えるものです。

角形衿

第四圖の樣に裁ちます。

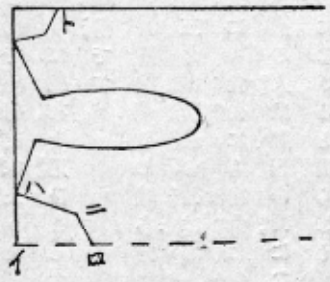
(イ)(ロ)の左端に(イ)と標します。

角形衿

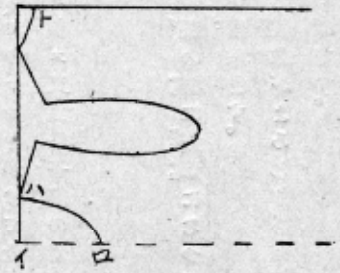
(ロ)×(イ)より四寸五分。
(ハ)×(イ)より二寸五分。
(ニ)×(ロ)より五分上つた處へ(ロ)より二寸と標し圖の樣に(ハ)×(ニ)×(ロ)を斜線を引きます。

丸形衿

第四圖　角形衿裁方



第五圖　丸形衿裁方



(ト)左上の端より一寸五分下げ圖の樣な形に致します。次に線通りに裁切ります。

丸形衿

第五圖の樣に裁ちます。

(イ)輪の左端に(イ)と標します。(ロ)×(イ)より四寸(ハ)×(イ)より二寸五分として圖の樣に丸くします。(ト)左端より七分として丸みを附けます。

襠入割烹着

次に線の通りに裁ち切ります。

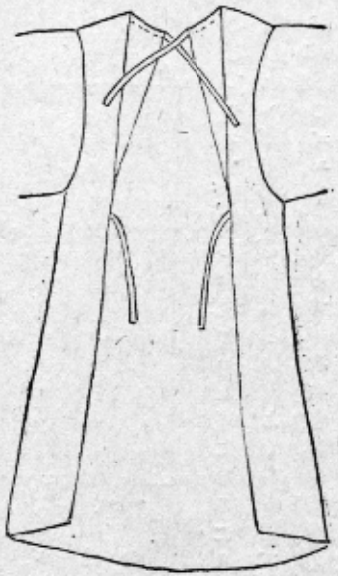
五、襠入割烹着

第六圖は、二尺幅にて作れる割烹着、二尺幅でお裁ちになりましても、別に身頃が狹くて困るといふ事はありません、少し細つた方は、此二尺幅で結構であります。天竺木綿や格子縞等は二尺幅の物が多くあります。

後の衿及脊の處は、圖の樣に、三角に繼長い襠を入るのであります。

第六圖

二尺巾にて作れるもの

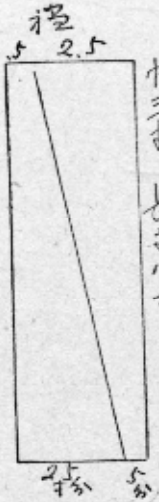


第二圖の(ホ)×(ト)の部分を取りませんで、向の端の角を(ホ)と致します。(ホ)×(ト)に當る分を襠布から取るのです。

福布三寸巾で長さ七八寸の布を圖の樣に切つて出來上りの圖の樣に、三角の角を下にしてつげますればよろしいのであります。

以上に述べましたのはいづれも前だけのものでありますが、次に述べますのは、體の後から褄までも全部包まれて、衣服が汚れず誠に働きよく、そしてモシお子樣にお乳をお上げになるにも便利であります。

第七圖



縫方は古い單衣を利用すると分りよくあります。先づ單衣の袖丈を好みにつめ、袖口にゴムを通します。次に右脇の適當な處を四五寸あけて內側にポケットを付けて口を紐けておきます。身丈は對丈に致します。衿と紐とは取りまして是をはぎ合せて衿とし紐は付けずに、前幅を一杯として長褄袢の樣に衿を下まで付け衿幅は一寸位の幅に衿けておき紐は手頃のところに付け、其中間にホックを一つ付けます。是で出來上ります。

第四講　繼ぎ接ぎの仕方

毎日着て居ります着物は長い中には自然にすれて地が薄くなつたり、傷んだり、又は燒穴が出來ましたり、或は思はぬ鉤裂をこしらへたり致します、それを少し手を入れて體裁よく繕つて着るといふ美しい心掛けを皆樣に持つて頂きたいと存じます、少しの手入で着物はずいぶん長く着られるものであります。

凡て繼ぎ物や接ぎ物の要領は、其の繼ぎ目や接ぎ目がわからない樣に手ぎわよくするといふ事が肝心でありますが、それには練習が必要でありますだが別段練習を致しませんでも忠實にして居ります中には上達致しますから先づ丁寧にするといふ心掛けでなされればよろしいのであります。

次に地質を綿布と絹布と毛織物とに別けまして述べます。

◇綿布の繼ぎ接ぎの仕方

一針　地質は綿布でも針は絹針を用ひます。

一、絲　職ぎ絲と申て極く細くて割合に強い絲を買つて居りますから、それを用ひます、色は地質と同じものを使ひます。

綿布片返し接ぎ

一、片返し接ぎ

これは普通の接ぎ方であります、接ぎ合すべき布を二枚合せて縫ひましてこれを二枚一處に一方へ折返したものであります。

先づ接ぎ合はすべき二枚の布の縞目をよく合はせます、模様物ならば、其模様をなるべく合せる樣に致します。そして布目も曲りません樣に注意いたします。これが二枚合ひましたなら、二枚の布が動きません樣に假にしつけをかけて、おさへて置きます。そして細かい針目で二枚を接ぎ合せます。そして、きせを餘りかけません樣に一方へ折りつけまして、其絲で隱し鏤をかけて裏から烙鏝をかけて仕上げます。

綿布割り接ぎ

二、割り接ぎ

これは、接ぎ目を平らに致す時、又丁寧に接ぎます場合に、この仕方に致します。二枚の布を揃へて縫ひまして、縫ひ目を兩方にびつたりと割るのであります、ますから、絲は細くて而かも強いものを用ひます。

先づ片返し接ぎと同じ樣に、接ぐべき二枚の布の縞目及布目を正しく合せて假に鏤をかけて二枚が動かないやうにおさへて置きます。そして第一圖の樣に細かく縫ひます。次に第二圖の樣に縫目を兩方へびつたりと開きます、其開いた縫代の端を、かくし鏤でおさへて置きまして裏から烙鏝をかけます。

綿布掛け接ぎ

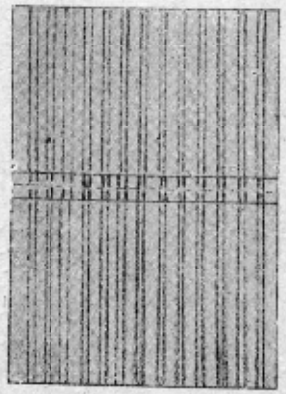
三、掛け接ぎ

先づ接ぐべき二枚の布を、別々に縫代の處を布目を通して眞直に裏へ折りつけます、この折りましたものを二枚表を中にして合せます。この時は第三

第一圖　割はぎ (1)



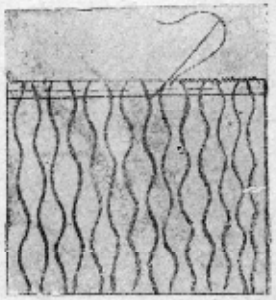
第二圖　割はぎ (2)



圖の樣に縫代丈け折つた分は、前と後に行きまして表は中に合さる樣にするのでありますから御注意下さい。

次に二枚の縞目と布目とを合せて動かぬ樣にし襞でおさへて置きます、そしてこの二枚の折り山を縫絲二本位をすくつて手前から向ふへ、又は向ふから手前に針を出してマツリ紐けをするやうな針使ひで抄ひ縫ひに致します。この接ぎ方は手間が取れますが、面倒を見てなさると餘にキチンとして出來上りがきれいであります。全部縫へましたら襞を取り布を廣げまして縫ひ目を少し濕らして裏から烙鐵をかけて仕上げます。

第三圖



掛ぎは

四、穴縫ぎ

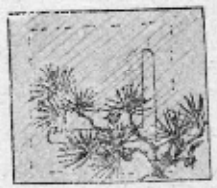
圓く傷んで居るならば、圓形に又鉤裂の場合はその型に致します。圓型にはその周圍に切り込みを入れて、圓く格好よく裏へ縫ひ代を折り返します、そして其の穴よりも大きい其切を裏にあてます、其のあて切れの周圍を襞でおさへて置きます、この時矢張縞目と布目とを氣をつけて合せます。次ぎに表から布が平にはまる樣に注意してマツリ紐けの樣な針使ひで布を抄つて接ぎ合せます、これが出來上りましたら、裏返して裏の當て切れの周圍を表に針目の目立たぬ樣に、かくし襞でおさへて置きます、そして烙鐵をかけますと出來上ります。

五、色紙繼ぎ

第四圖

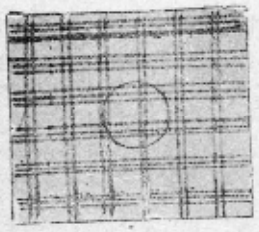


表

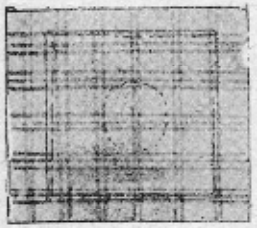


裏

第五圖



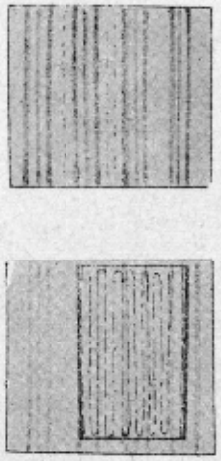
表



裏

布に穴が明きませんでも地の弱つてゐる時即ち薄すぎれがしてぬけそうになつてゐる處へは、色紙繼ぎを致します。傷んでゐる部分よりも少大きい共切れか、又は外の布を當てて其の廻りを色紙絲で當てた布の端より一針先から大針小針で圖の樣に繼いでゆきます、これは丁寧になさらないと見苦しくなります。

第六圖



しきしつぎ　裏

同上　表

六、刺し繼ぎ

地質が少し傷んだ時色紙繼ぎする程でもありません時に、刺し繼ぎにしておきます。絲は解絲か又は共色の細い絲、又は色紙絲で織地の通り細かく刺しておく仕方であります。

◇絹布の繼ぎ接ぎの仕方

絹布の繕ひ方も又毛織の中のメリンス等の地質の薄い物は、大體木綿類と繕ひ方は同じ樣でありますが、多少違つて居りますから、次に述べる事に致します。中にも稀にしか必要がありませんで、しかも大切な繼ぎ方もありますラシヤの繼ぎ方、縮緬類の繼ぎ方等は其の一つの例であります。やりやうでは少しも目だたぬ樣にも出來れば又見苦しくもなるものですからなかなか手際を要します。

繼ぎ接ぎ用には解し絲と申て織絲の解たものを用ひます。これは目立たぬのでよろしいのでありますが、弱いので使ひにくいから共色の苧絲を使ふか、時には生絲を用ひ、物に依つては普通の縫絲を使つても差し支へないものもあります。

針は掛け接ぎ用の細いもの即ちメリケンの十二番位が適當であります。

一、片返し接ぎ

綿布の場合と大體同じであります、絹布は一體に地薄ですから大ていの場合に、この仕方で間に合ひます。

仕方は良く布目や縞目を合せて、襞で二枚の布を押へておきましてから縫ひ合せます、其の針目はなるべく細かくいたします。

つぎ糸の種類

絹布片返し接ぎ

絹布割接ぎ

絹布掛け接ぎ

二、割接ぎ

綿布の場合と大差がありませんが其の仕上げ方が違ひます、接ぎ合せたならば絲はゆるい位にしておきます、絲がつれて居りますと布が縮んで、見苦しくなります。其仕上げ方は縫ひ目を割りましたその縫代に、姫糊か續飯のごくしたものを針の先につけて裏から細く接ぎ目の邊にひいて、烙鐵をかけてはりつけます。續飯といふのは御飯を練つてこしらへた糊のことであります。

三、掛け接ぎ

縫ひ方は綿布の場合に同じであります、卽ち接ぐべき二枚の縫代のところから裏へ折ります。若し折りの附きがたいものは烙鐵で折りつけます。そして表と表と合せて二枚の布の縞目や布目をよく揃へ、絲で押へて動かぬやうに致します。

先づ繰り絲二三本を手前から向へ針を出して抄ひ、マツリ紉けをするやうな針使ひで縫ます。全部すみましたら絲を取つて縫目を割り絹布の割り接

絹布縫接ぎ

縮緬の掛け接ぎ

ぎの仕上げの様に姫糊の淡くしたのか續飯の淡くしましたものを針尖につけて裏から接ぎ目につけて裏から烙鐵をかけます。

四、縮緬類の掛け接ぎ

縮緬類は特別でありまして、等しく掛け接ぎといつてもその方法が違ひます。先縞目や布目に注意して接ぎ代を折ります、そして西の内紙か又は厚い美濃紙の類を縦に五六分(二厘)の幅に裁ち切つて、これを接ぎ代の處へ裏から當てて接ぎ代と一諸に折るのでありますす、絲をかけて二枚ともこの様にしますす、若しこの様にしませんと縮緬類は伸び縮みのはげしいものですからその接ぎ目の處ばかり伸びて見苦しくなります。そして兩方の折り山を正しく合せて、絲をかけて經絲凡そ二本おき位に緯絲一本を抄つて、五六針進みましたなら、一針づつスカラ掛けにして全體出來上りましたら、紙を取りすてて割り接ぎの様に姫糊の淡くしたものを縫代にひいて、烙鐵をかけて仕上げを致します。

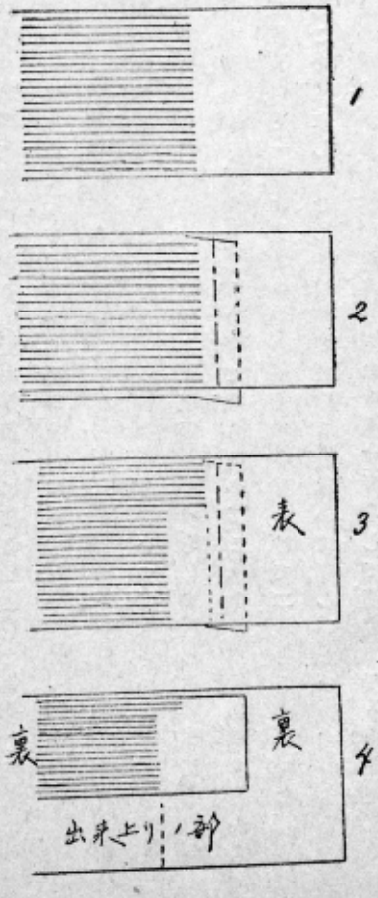
五、繰り接ぎ

この接ぎ方は稀にしか用ひません、極く目立つ場所を接ぐ時とか、餘り他の接ぎ方では目立つていけない時にはこの仕方に致します。

この接ぎ方のよい處は、裏に接ぎ目の出ない事と表の出來上りの美しい事とであります、然しこの接ぎ方は、なかなか練習も入りますので大ていの場合には他の接ぎ方で間に合せて、めつたに用ひられませんが知つておきますと

第七圖

縁り接ぎの圖



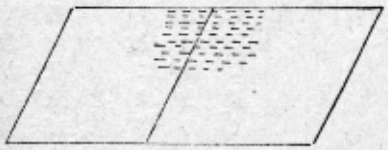
重寶する場合も多い事と存じます。

先づ一方の布の端を第一圖の樣に三寸位解して經絲だけに致します。

次に第二圖の樣に接ぐべき二枚の布を、縫目や布目をよく合せて三分位重ねて襞をかけます。そして解した絲を一本づつ針に通して他方の布の緯絲を抄つて縁地の通りに五六分刺して行つて、絲を引き締めてよく接ぎ目を合せます。こうして全體すみましたら絲や布の餘りを、きれいに切りすてて烙鏝をかけて仕上げます。

第八圖

寄せ接ぎの圖



六、寄せ接ぎ

この接ぎ方も、餘り度々用ふる樣な事はありませんけれども、縮緬物の衿、肩明等はとかく裂ける場合が多いものですし、又大人物を子供物に仕立直すとかいふ場合にはこの仕方によらねばなりません。

其の仕方はまづ接ぎ目の解れはきれいに切り取つておいて、布目と縫目とはよく注意して裁ち目を突き合せます

そして兩方の裏から三四分程入つた處まで織地を刺して接ぎ合せます、最後に烙鏝で仕上げます。

七、色紙繼ぎ

繼ぎ絲には解し絲か又は共色の割り絲を使ひ、針は繼ぎ針を用ひます。仕方は綿布の場合と大體は同じでありますが、その針目は二目落しか三目落しにして極く細かく、そしてもつと丁寧にする事が綿布の場合と違つて居ります。

八、刺し繼ぎ

これは綿布と全く同じであります、地質が弱つても別に色紙繼ぎにする程の事も無い時には、布を當てないで色紙繼ぎと同じやうにさしておきます。

九、穴繼ぎ

損じた場所を圓形か方形に切りとりまして、圓形でしたら、そのまはりに四角でしたらその四角に切り込みを入れて裏へ縫代を折り返して、烙鏝をかけます、其切を裏から當てまして、よく織目や布目を合せて鉄で押へておいて細かくマツリつけます、全部マツリつけて繼いだ布のまわりにも、切り込みを入れて圓のやうに開きます、つまり縫代を割つてしまふのであります、そして、縫目に濕りをおいて烙鏝をかけて仕上げます。

第九圖

綿布穴繼ぎ裏



◇毛織物の繼ぎ接ぎの仕方

メリンスの樣な地の薄いものは綿布の仕方でも、よろしいのであります。ここでは主として地の厚いラシャ類について述べます。此頃は洋服が大變に多く用ひられますから、どなたもラシャ類の繕ひ方は一通り心得ておかなければなりません。

針及絲の注意は綿布の場合に述べたと同じであります、但し解絲は使ひません。

一、突き合せ接ぎ

厚地の毛織物の接ぎ方は、全部この方法であるといつてもよい位大切であります、其仕方はまづ接ぐべき布の兩端を平に切り揃へ、毛並縫目等によく注

毛織物には解糸は使へないこと

毛織の突き合せ接ぎ

から當てまして、よく織目や布目を合せて鉄で押へておいて細かくマツリつけます、全部マツリつけて繼いだ布のまわりにも、切り込みを入れて圓のやうに開きます、つまり縫代を割つてしまふのであります、そして、縫目に濕りをおいて烙鏝をかけて仕上げます。

◇毛織物の繼ぎ接ぎの仕方

メリンスの樣な地の薄いものは綿布の仕方でも、よろしいのであります。ここでは主として地の厚いラシャ類について述べます。此頃は洋服が大變に多く用ひられますから、どなたもラシャ類の繕ひ方は一通り心得ておかなければなりません。

針及絲の注意は綿布の場合に述べたと同じであります、但し解絲は使ひません。

一、突き合せ接ぎ

厚地の毛織物の接ぎ方は、全部この方法であるといつてもよい位大切であります、其仕方はまづ接ぐべき布の兩端を平に切り揃へ、毛並縫目等によく注

毛織の穴繼ぎ

子供の着物は揚げの仕様一つ

意して裁目を突き合せます。そして兩方とも五六分の深さに繊地の中を抄つて、接ぎ目のところばかり表にかけて細かく剌します。最後に烙鏝をかけ刷毛で毛並を整へて仕上げを致します。

二、穴繼ぎ

先づ繼ぐべき穴を圓型に綺麗にきりとります、そしてその穴にきつちりはまる様に、共切れを同じ形にきります。その穴にはめこんで、よく裁目をそろへ、勿論縞目や布目をよく合せて動かぬ様にして突き合せ接ぎと、同じ仕方でつぎます。

こうすると丈夫でありますが、なれませんと見苦しくなりますから、裏から淡い糊をつけた他の布をあてて、熱した烙鏝をかけて、はりつけてもよろしいのであります。

◇子供物着物の揚げの仕方

子供の着物は腰揚又は肩揚げの格好がなかなかむづかしいものであります。この揚げの仕方一つで、いかにも可愛らしくも見え又、ダラシない形にも

地袋斗の不注意はびの一原因

布の耳のゆるんで居るもの

見えるものであります。

肩揚は、脊縫と袖付の中央を揚の山に致します、腰揚の方は、揚の山を境にして四分、六分、の割合になる樣に致します。

つまり揚の山より上を着丈の六割とし、揚の山より下を着丈の四割と致します。この割合に致しますと、たとへ揚の非常に多い場合でも、又極少ない場合にも、同じ樣に格好よくゆきます。

◇地袋斗の仕方

新しい反物を仕立てます場合には、それぞれ布の整理をする事が肝要であります、若しこれを怠りまして、良い加減にして仕立ますと非常に仕立にくいばかりでなく仕上も悪くありますし、地の目も曲つて居りますからいけません、地質によりましては紺絣などの如く、非常に耳のたるんで居るのもありますし又非常に耳のつつてゐるものなどもあります。

一、耳のゆるんで居るものは、其のゆるんで居る處に霧を吹きます。そして卷棒なり卷板なりに卷いて置きますと宜いのであります。

耳のつつて居るもの

帶芯の地製斗

布を引伸ばすには斜に

筬目のきせは淺く

二耳のつつてゐるものはつつてゐる部分を延ばす樣にしながら、布一面にアイロンをかけますとよいのであります。こうしても尙耳のつつてゐる樣な場合には、耳に切り込みを入れる事もありますが、然しこの切込みはなるべくなさらないで整へた方がよいのであります。

ついでに帶芯にする三河木綿について申上ませう。

三河木綿は新しいものを其儘用ひますと、後に非常につまりますから、初めにすつかり霧を吹いて少し間をおいて後火熨斗をかけます。

三、布を引伸ばすには、布目のままに眞直ぐに鏝をかけると却つて縮みますから、布を斜めに引張つて鏝をかけると、どんなにでも伸びます。其故羽織の前下りの樣に布が斜になつて居るところに鏝をかけるときは、充分注意して靜かに輕くかけないとすぐに布が伸びてしまひます。

尙終りにモウ一つ注意を申ませう。すべて縫目のきせはなるべく淺くしないと狂ひができます。殊に袖付は決して三厘以上かけてはなりません。但し羽織の衿は一分以上かけます。

一つ身單衣

普通仕立上寸法

標附け方

第五講　一つ身單衣

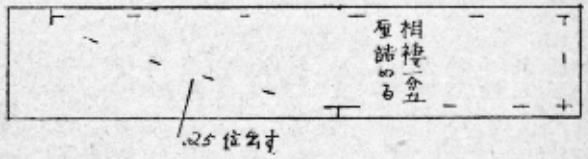
普通仕立上寸法

袖丈	長袖	一尺二寸五分
	筒袖	六寸
袖口		三寸五分
袖附		三寸五分
袖幅		四寸五分
		五寸五分
身丈		二尺—二尺三寸
後幅		一パイ
前幅		一パイ

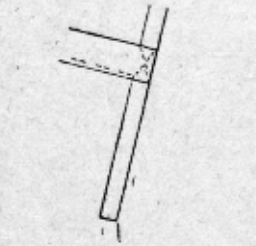
身八ツ口	二寸五分
衽下リ	二寸五分
衽幅	三寸五分
相襖幅	衽巾より一分五厘つめる
衿肩明	一寸
衿幅	九分—一寸
衿下	四寸五分—六寸

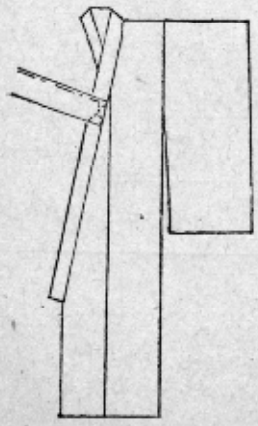
一ツ身は衿下が短いから劍先が細なつてよく前が合さりませんから衿附の標を劍先から凡そ二寸五分位の處で二分から二分五厘の丸みを附けます、相襖幅は一分五厘詰めで外は本裁の標附けのやうにします。但し身頃は身幅を凡て一つぱいにします。

衽の標附け方



附紐の附け方



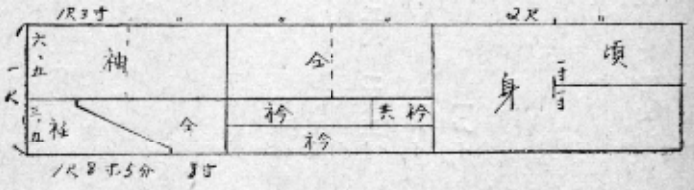


附紐の附け方

附紐の附け方は男女によつて區別します、即ち男兒は紐け目を下に向けて縫ひつけ又飾紐をかけるのに雌針を表にして圖のやうにし、女兒は紐目を上にして飾紐は雄針を表にします。

一ツ身濶袖鈎衽の裁方（兩面物）

裁ち切り袖丈　1尺3寸
衽下り　1寸5分

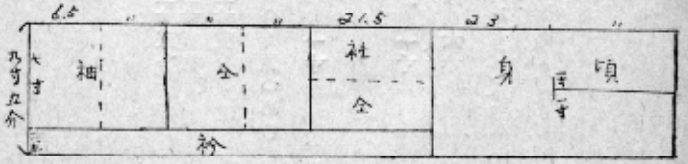


積り方

〔公式〕　袖丈×4＋身丈×2＝總用布
（總用布－袖丈×4）÷2＝身丈

一ツ身筒袖別衽の裁ち方

裁ち切り袖丈　6寸5分
衽下り　1寸5分

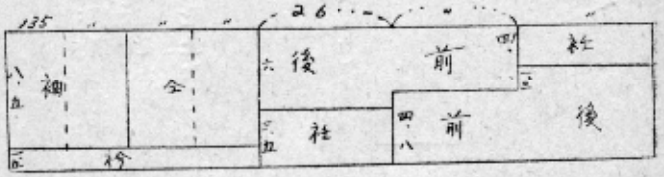


第六講　三つ身單衣

普通仕立上げ寸法

袖丈	長袖	一尺三寸
	筒袖	六寸五分
袖幅		七寸五分
後幅		一パイ
衽幅		一パイ
衿幅		一寸
袖口		四寸五分
身丈		二尺五寸
		三尺
前幅		一パイ
相褄幅		二分詰める
衿下		八寸
袖附		五寸
身八ツ口		二寸三分
衽下リ		三寸
衿肩明		一寸

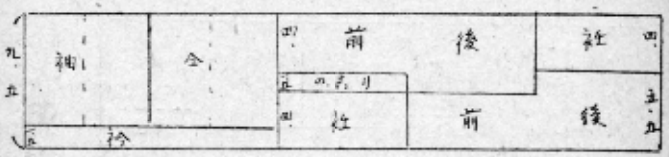
方ち裁身つ三て二物巾並



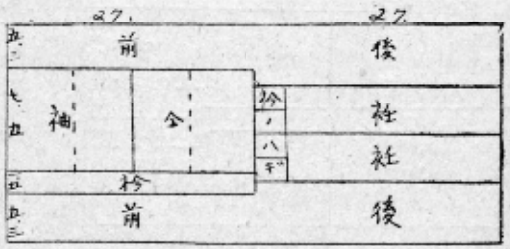
積り方

〔公式〕　袖丈×4＋身丈×3＝總用布
（總用布－袖丈×4）÷3＝身丈

方ち裁身つ三物面片



方ち裁身つ三物巾大



積り方同上

積り方

身丈×2＝總用布

縫ひ方注意

背は袋縫にします衽附は前身頃の縫ひ込みが淺いので袋縫とすることは困難であるから裁目をまとひ縫にして衽をつけます。

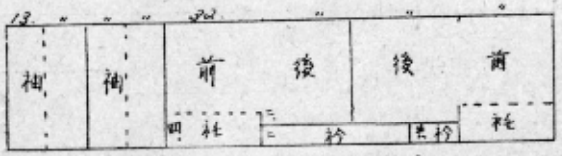
四つ身單衣
普通仕立上げ寸法
並巾物四つ身裁方
大巾物四つ身裁ち方

第七講　四つ身單衣

普通仕立上り寸法

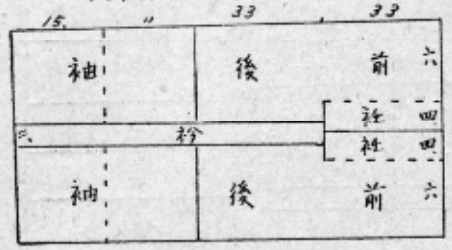
袖丈	長袖	一尺二寸五分
	元禄	八寸五分
	筒袖	七寸
袖附		五寸
後幅		七寸
衽下り		四寸
衿下		一尺二寸
袖口		五寸
身丈		三尺―三尺三寸
前幅		一パイ
相接幅		二分詰める
衿幅		一寸二分
袖幅		八寸
身八つ口		二寸五分
衽幅		三寸八分―四寸
衿肩明		一寸五分―二寸

圖一　並巾物四つ身裁ち方



〔公式〕　袖丈×4＋身丈×4＋衽幅＝一反用布

圖二　大巾物四つ身裁ち方



〔公式〕　（袖＋身丈）×二＋一＝一反用布

裁ち方の種類
標附け方
元禄袖
身頃

裁ち方の種類

四ツ身は前衿裁車裁・逆衽裁・摘衽裁・大幅裁等種類が澤山あります。第一圖裁ち方のやうに布幅が狹くて衿巾の狹い時は衿裏を用ひます。(一)の裁方は最も普通なもので、第二圖はメリンス・縮緬等の片面物にも、亦兩面物にも應用できます。

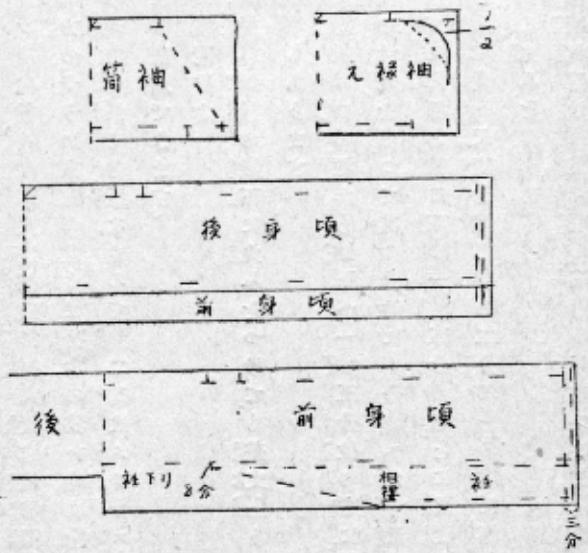
標附け方

筒袖。筒袖の袖下に丸みをつけても差支へありません、又八ツ口を袖下にある事もあります。

元禄袖。口の標から袖下へ一寸五分位の處に標を附け、この標を袖丈の標の間の寸法を計つて、其の寸法に五分加へた寸法を手前へ計つて袖下に標をつけて、この標と袖口下の一寸五分の標とに尺度を當てて、斜に標をつけて其の中央で角へ尺度を渡し、其の二分の一の處に標をつけます、これを標準として袖の丸みを作ります。

身頃標附け。後身頃の標附けが終つたならば後身を取り除けて前身頃及

標附け方



び衽の標をします。前身頃は衿肩明から眞すぐに前幅の標をして、次に衽附の標をつけます。まづ衽下の標をつけてから裾で前巾の標から三分衽下りの處で八分相接では衽幅から一分五厘ほど詰めて、以上の三點に標をつけこの標に渡つて衽附の標をします。次に劍先から衿下の標まで斜に尺度を渡し劍先から八分下まで衿附に一分五厘程の丸みをつけて

本裁女物袷　仕立上げ寸法　裁ち方積り方

順次衿附の標をします。
縫ひ方は三つ身單衣に同じ。

第八講　本裁女物袷

仕立上げ寸法

袖丈	一尺六寸	袖口	六寸	袖附	六寸
袖幅	八寸五分	身丈	三尺八寸—四尺	身八ッ口	三寸五分
後幅	七寸五分	前幅	六寸	褄祕	一分五厘
衽下り	六寸	衽幅	四寸八分	相接幅	二分詰める
衿肩明	二寸二分	衿幅	三寸	衿下	一尺八寸五分
袷き	一尺六寸五分	袖口祕	五厘		

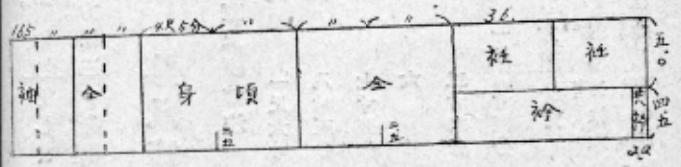
裁ち方積り方

表用布の裁ち方は、本裁女物單衣に同じであります。
裏用布は通し裏の物もあるが多くは褄廻し布と、胴裏布と別品を用ひます。

本裁女物単衣袴衽裁ち方
裾廻しの裁ち方

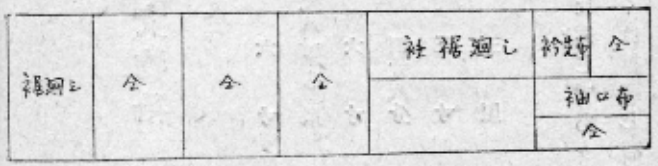
本裁女物單衣袴衽裁ち方

用布　並巾　3　丈
裁切　袖丈　1尺6寸5分



積り方

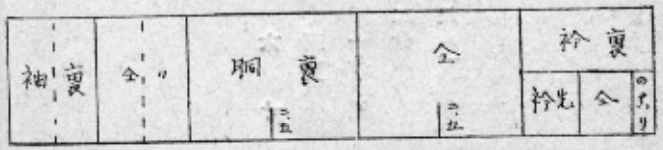
〔公式〕　袖丈×4＋身丈×6－衽下り×2＝總用布
（總用布－袖丈×4＋裁ち切り衽下り×2）÷6＝身丈
（身丈－衿下＋衿肩廻し及衿先縫代）×2＝衿丈



積り方

〔公式〕　裾廻し丈×4＋衽裾廻し＋袖口布＝裾廻し總用布

並幅物で胴裏の裁ち方

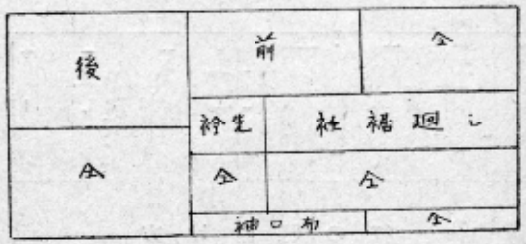


積り方

〔公式〕　表身丈－裾廻し丈＋縫代＋衽×2＝胴裏丈

裾廻し裁ち方（並巾物）
大幅物で裾廻しの裁ち方

大幅物4尺4寸で裾廻しの裁ち方



裾廻し用布は、凡そ九尺を用ひます。

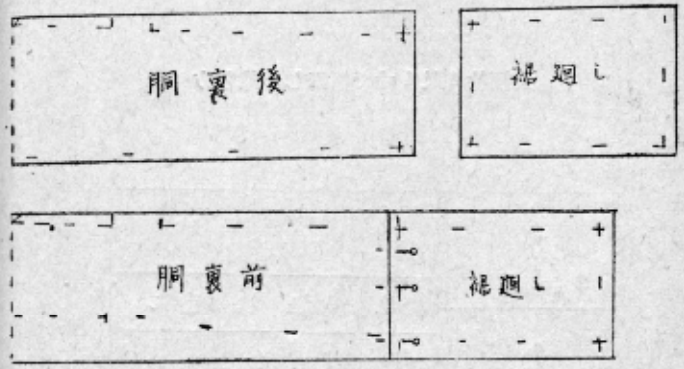
裾廻し丈は、凡そ身丈の三分の一位。

衽裾廻し丈は、衽丈の凡そ三分の二位。

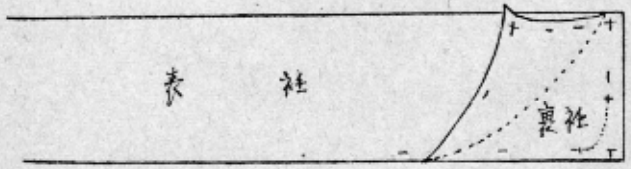
衿先布は、片方の衿丈の五分の一位にします。

上圖裾廻しの裁ち方は用布の充分にある時の方法ですから用布の充分でない時には袖口布は前巾を缺いて衿先に半巾布を用ひます。

標附け方



衽の標附け方



注意　裾廻しには廣幅物を使ふ事が多いですが幅の廣さは其の地質によつて多少の狹い廣いがあります。

標附け方　表袖及び表身頃は木裁單衣に同じく裏袖、表袖と同樣にして折り重ねます。表袖より丈を五厘袖口五厘袖幅五厘を詰めます。次に袖口布を重ねて袖口布並びに袖口掛の標をつけます。そして振り八ツ布をつけ

る場合は袖口布も同樣にします。

胴裏及び裾廻し。凡て表身頃に準じて標をつけます。裾廻布を四枚重ね裾口を右にして圖のやうに重ねて置いて、丈巾の標をつける、巾は表より五厘詰める。胴裏も同樣にして山袖附身八ツ口巾の標をする。丈は表丈より裾廻丈を減じたものに衽の二倍を加へて尙胴接の着せとして心持だけ寸法を增して標を附けます。

次に胴裏の後身頃を左手に開き前裾廻しと胴裏の前身頃との胴接ぎの標を合せて胴裏と裾廻しとを假につないで前身頃の標附をします。

衽。衽先と裾廻しを接いで二枚を重ねて、其上に表衽を二枚重ねて、衽の二倍だけ裏衽を裾で長くし置く。

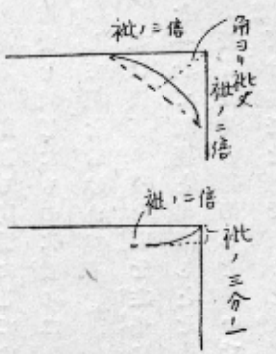
衿下。幅丈衿附の標をつけ褄形の標附をする事は四つ身袷の通りであります。

衿。衿先と袷裏とに接ぎ合せの標をつけ、表衿を重ねて丈幅の標をつけます。

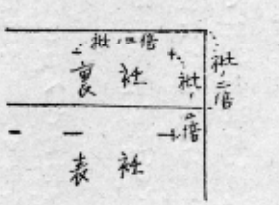
褄形の作り方と褄のあげ方

先づ一方を衽下一方を衽巾とみなして標をつけます、そして衽下の方に角から袖の二倍の寸法を計り衽巾には同じ角から袖巾の三倍の寸法を計つて、それをつなぐ時は斜の線となります、この斜の線の中央と衽下の角に渡つ

（一）



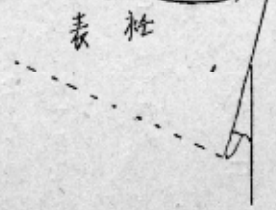
（二）



（三）



（四）

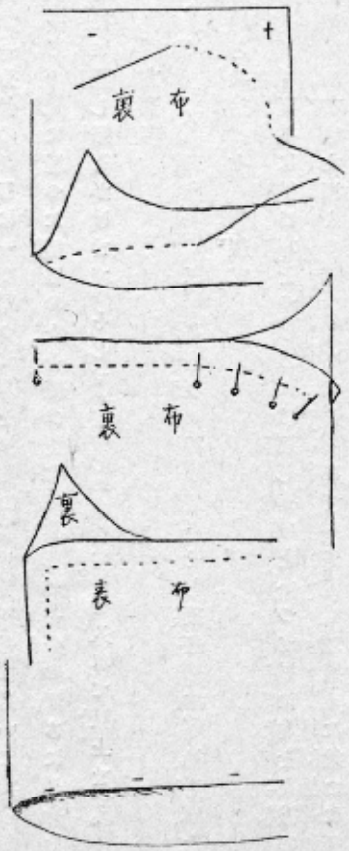


て線を畫きその線の上に角から袖だけ計り其の點を通つて丸みをつけて、これを裏衽につける形とします。

一、別の紙に一方を衽下、一方を衽巾とみなして標をつけてその衽下の角

をイ、とし角から袖の三分の一に標をつけてこの標から衽幅に袖の二倍の寸法を標してロ、としこの二點イ、ロに渡つてゆるい丸みを作つてこれを表衽の

（五）



（六）（七）（八）（九）

切下げの形とします。そして三圖のやうに衽を重ねます。次に四圖のやうに其の形に切つた紙を當てゝ褄の標をつけます。次に五圖のやうに襟絲又は縫絲で細かに褄形の間を縫ひ縮めて表の衽巾と同じくします。次に七圖

縫方順序

のやうに表衽と裏衽と合せて表をみて縫ひ合せます。次に八圖のやうに衿下を縫ひます。其縫ひ方は、表は棲形の反對の形に(四圖)のやうに、裏は縫ひしめの形通りに待針を打つて、一針ぬきに、縫ふ先々の待ち針を立てゝ棲形の間丈は一分位の針目に一度縫つて絲を棲先に二寸位殘して置いて其の絲で再び棲形の先に縫つた縫目の上を縫ひます。其して一分の深さにきせをかけて、衽に隱し躾をかけます。そして九圖のやうに綿を入れて仕上ます。

縫方順序

一、袖附け　二、表身頃　三、裏身頃　四　裾合せと繼繼　四、袖附　六、衿附けと共衿　七、裾綴ぢ

一、袖裏袖に袖口布をつけるには廻し掛けといつて袖に布を裏袖の標に合せ袖口布は丈標より縫ひ始めて角の所で一針返し標通りに袖口に折りをつけて幅に待針をして縫の方を縫ひます、此の時袖口布の角を少し斜に抄つて緩めて置きます。他方の端も始めのやうにして丈標を合せて縫ひます。兩角を四角に折つて、袖口布へ折をつけて引返して躾をかけます。廻し掛けにしないときには袖口布の附ける方丈縫つて、丈は折つてかくし躾をかけて置きます。

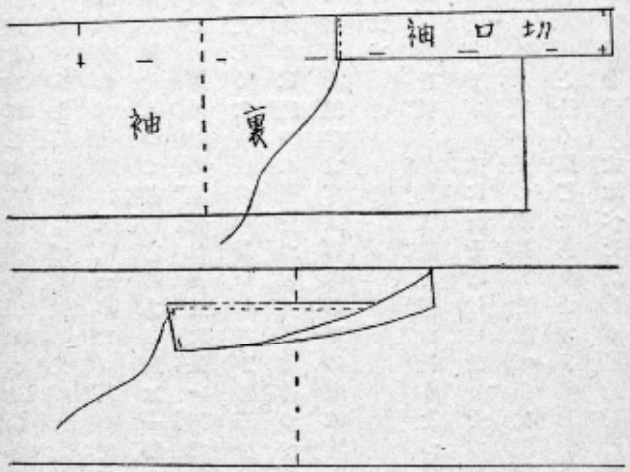
次に表、裏袖の袖口明の標を合せて山に待針を打ち裏袖の方を少し張り加減にして袖口明に待針を打つて縫代は表は眞直に裏は留の所で標通りに留より五分位の間で縫代を凡そ二厘程淺くして棲形に縫ひ出す着せを五厘位かけて表布の方へ折り袖口の四つ留をする。

四つ留の仕方

表袖の表を出して袖口を揃へ右

四つ留の仕方

圖方かけの掛し廻布口袖



袖は山を右にして右内袖の表のきせ山から針を出して、内外の袖山を抄ひ外袖のきせ山を縦に抄つて、内袖の先の針目から少し離れた所へ針を入れて中で結び合して切るか又はそのまゝ其の糸で袖下を縫ひます。次いで袖の標の通り待針をうつて袖口布のある所は一針ぬき又は半返しにして四つ縫にします、この際外袖の縫代は自然に長い間で折り出さないと、袖口下に癖がついて見苦しくなります。続いて袖下の三分の二位までを四つ縫ひにして先は表、裏別々に縫つて折をつけ丸みを作つて表に返し、更に振りの所のみを裏返して振りを縫ひます、其の際袖下の處は裏を稍張り加減にして引返して躾をかけます。

表身頃

二、表身頃　背及び脇を縫ひ折りをつけて、脇の縫込みを自然に開いて躾絲でとぢます。次に紐を附けて折りをする事は單衣と同じであります。

裏身頃

三、裏身頃　先づ胴接ぎをして、折は胴裏につけて隠躾をかけます。其他は表身頃と全く同じであります。但し背の折は表の背と反對にします。

裾合せ

四、裾合せ　丈比べを正しく裏身頃を袵の二倍だけ長くして裾合せをします。そして袵下を下から上に、上前下前共縫つて躾をかける。次に一身八ツ口をとめて、身八ツ口を縫つて躾をかけます

留めの仕方

五、袖附　先づ袖附に留めさして表裏の袖をつけます。

留め方　表袖から、表裏の身八ツ口を抄つて、裏袖を縫に身八つ口の裏表から針を出して、表袖口で結び合す、この留を前後の袖附都合四ケ所にする。表の縫代は山で一分五厘の縫代となるやうに折り出して針を打ち、三枚附として袖に折をつけ裏は標通り二枚附として折は身頃へかへす。

裾綴ぢ

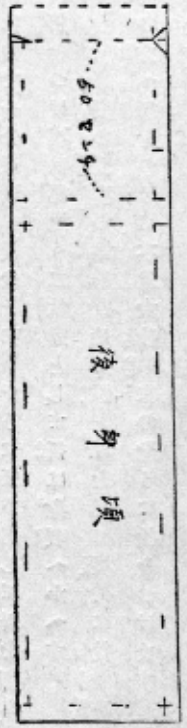
六、袵附　身頃の表裏の標を合せて假とぢをして裏袵に袵先布を接ぎ合せて裏袵の方へ折をつけて本裁女物單衣のやうに袵をつけます。そして共袵をかけます。

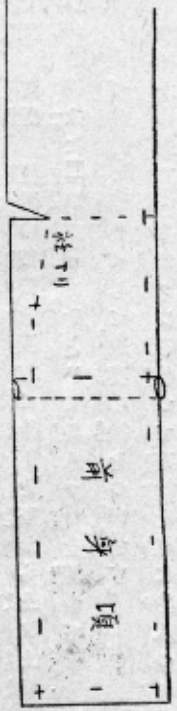
七、裾綴ぢ　表裾の折目から二分程上つた所に紐を除いて前幅の裏に三針後幅に四針、表は其の間にも針目を出し、つまりその倍の數を針目で裾綴をします。絲は表の縫絲を用ひます。

本裁男物袷
仕立上げ寸法

第九講　本裁男物袷

仕立上げ寸法





袖丈　一尺四寸　袖口　七寸×七寸五分　袖附　一尺一寸五分

裁ち方積り方
標附け方
揚の標附け方
仕立上げ寸法

袖幅　九　寸　人形　二寸五分　身丈　三尺五寸内外
後幅　八　寸　前幅　六寸五分　衽下り　五　寸
衽幅　四　寸　相接巾　二分詰め　衿肩明　二寸一分
衿幅　一寸五分　衿下　一尺七五寸分　ゆき　一尺七寸五分
据衽　一分五厘

裁ち方積り方

（女物袷と同じです）

裏は出来上り身丈より、二寸五分か三寸位長く裁つて置いて肩山で揚をして置きます。

標附け方

揚の標附け方

イ、肩山で前身を後身の方に五分繰越します。

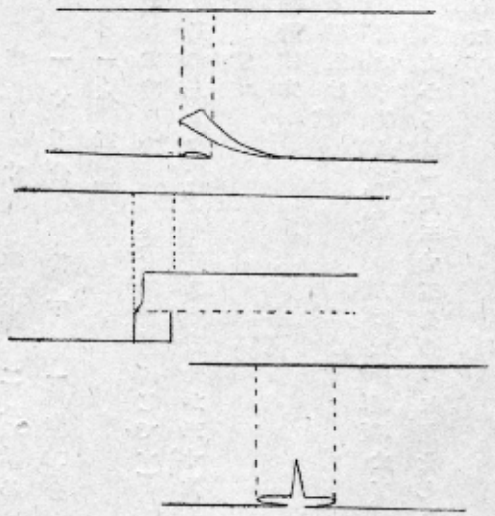
ロ、肩山から約一尺三寸五分の處に標をしこの標から下に揚になる寸法をつけます。

後身頃を左に取りのけて、前身頃の揚をする部分を標の通り布を折り畳み針

縫ひ方

裏揚げの仕方

一圖



二圖

で止めて置きます。

縫ひ方

縫ひ方は女物と同じです但し人形は裏表別々に縫ひ開いて躾をかけて置きます。

揚は肩山を衿肩明まで標通り摘み縫にして一圖のやうに後に折つて躾をかけ衽附の標より二分程外を折つて躾をかけて置きます。

揚の多い時は二圖のやうに縫目を割つて隱躾をかけます。

本裁女物綿入

仕立上げ寸法

裁ち方積り方

標附け方

縫ひ方

袖口含み綿

第十講　本裁女物綿入

仕立上げ寸法

袖口袵　一分　　褄袵　二分―二分五厘

其の他の寸法は本裁女物袷と同じであります。

裁ち方積り方

裁ち方積り方は本裁女物袷と同じであります。

標附け方

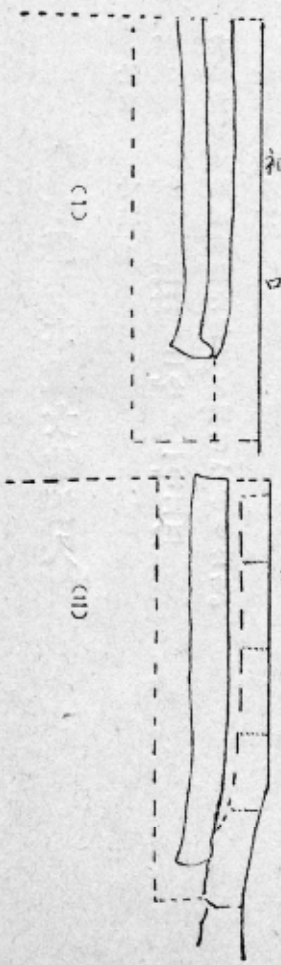
(1)袖　表袖の標附け方は本裁女物袷と同じですが袖幅を上の方で袖口明まで袵の二倍だけ廣く振八ツ口では袖幅を五厘つめ袖附で丈を心持詰め八ツ口では丈を五厘詰める、尤もこれは地質に依つて寸法をかへなければならない事は勿論であります身頃其他は袷と同じです。

縫ひ方

袖口含み綿　まづ輕く袖山に折をつけ一寸位の幅の綿一枚を圖の様に三

ッに折つて折山が布の折山に正しくしつくり入る様にします。袖口を二圖のやうにかぶせて針目を出す處を定めます。針目は袖口の留に一つそれから五分上に一つ袖山から一寸下に一つ、尚この間を圖のやうに四等分して三針を出しますと針目の數は六針となりますがなほ實際はよく綿を含めるためこの四等分した間にも綿だけを抄ふ針を使ひます。

注意 この針の數は六寸の袖口明針數ですから、袖口の大さによつて針數を適宜にかへねばなりません。總ての綿と布との釣合は心持綿をゆるむやうに又絲もゆるくします。



身頃 表も裏も單衣のやうにそれ〳〵衿附まで縫ひ脇縫ひは斜に開いて躾でとぢておきます。

次に裾合せをして表に折返して躾をかけ褄を上げて紅にだけ疊躾をします。

袖附の留めは裕と同じであります。

綿の入れ方

表裏とも裏返して脇縫ひの所から折つて前身頃を中に入れます、つまり表後身頃が上に裏後身頃が下に其の中間に左右の表裏の前身頃が入るわけであります。

袖も無理のないやうに表裏を重ねてつれないやうに先眞綿を引いて其の上に綿を延べます、この時肩から上に五、六寸程出し裾の方は二寸程長くして置いて尚兩脇にも綿巾の都合のよい様にのべて置いて、袵綿を巾八分裾の總巾よりも一寸位長い丈の綿を二つ折りにして作ります袵綿を袵山に入れて身頃からつゞいてゐる綿をかぶせ、袖の方は、袖口留めの二分位下から綿に切

り日を入れて振りの處まで切り含み綿のある身八ツ口の處は綿を切り取つて袖口以下の綿は前身頃の分となし上の綿は袖口の含み綿とすれ〳〵に幅を切つて置きます、肩山と兩脇は表身頃との間に程よく折り込んで、其の上に眞綿をひいて兩手を肩の方から表裏の間に入れて兩脇の裾を綿と一處に持つて肩から引き返へします、そして前身頃の裏が上にある樣に置いて、袖前身頃に綿を入れて衿下は五分幅を廣く綿を切つて置きまして、このやうにして綿を入れます。

紺け方

裾によく綿を含めて、假とぢをして衽の中綴ぢをし、次に褄先を六分程縫ひ綿をよく含め裏衽の衿下に含み綿をします、この場合は平鉄で綿をおさへます。

衿の裏表を合せて中綴ぢをし、衿先の留をして衿先を縫つて、衿の綿を平にして表衿に含めて、衿巾に折り裏衿は表衿巾より二分ひかへて折つて合せ候をかけて衿下紺と衿紺とをします。

留め方

次に袖口を紺けます、まづ表袖の袖口を裏がへして裏の端まで身頃からついてゐる綿を平に直し、若し長い場合は餘分の綿を切つて其上に表袖口を被せてよく山を合せ寸法通りに袖を出して袖口の留をします。

留め方　表の内袖の縫込みの間から、きせやまの心持内方へ針を出し次に表の外袖の同じ位置の處へ針を入れて、外の裏袖へ通してから内袖の裏を縦に取つて其縦に取つただけはなして、もときた通り反對に裏の外袖から表の外袖表の内袖と絲がねじれぬ樣に通して始めの絲と、しつかり結び合して切る、袖を定めて候をかけ、袖口下二寸位の處を掛針にかけて留より五分位の間は少し表をつり加減にして丸味をつけ、それより上は平な調子にして表のきせ山から五厘奥を一分位の針目で紺けます。

縦綴ぢと袖綴ぢ　出來上つた外側から裏をみて表裏の縫目をよく合せ縫目の間から針を入れて、下になつてゐる表の縫込みを抄ひ其の針を又裏の縫目の間に出して、脊縫も脇縫も裾廻しより上まで綴ぢます。

袖綴ぢは女袷と同樣ですが、袖に綿が入つてゐるから其綿が袖の中に充分

本裁男物袷羽織　普通仕立上げ寸法

入る様に針の尖でつゝき出し綿は指先で揉み等してよく綿を殺して表裾の折り山から出批だけはいつた處を綴ぢます。この時綴ぢ絲がつれると批が見苦しくなりますから絲のつれぬやうにします。

第十一講　本裁男物袷羽織

普通仕立上り寸法

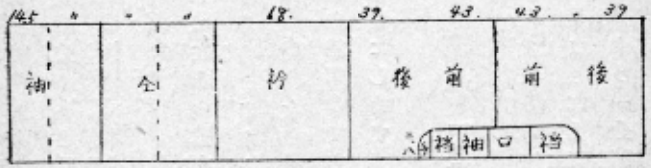
袖丈	着物と同寸	
袖口	着物と同寸	
袖附	總附にする	
袖巾	着物と同寸	
身丈	着物の四分の三に一寸を加へる	普通二尺八寸内外
後幅		着物と同寸
前幅		五寸
衿幅		一寸七分
襠幅		一寸七分
衿肩明		着物より二分増し
前下り		一寸
乳下り		脊より一尺一寸内外
裄		着物と同寸
繰越		二分

裁ち方と積り方　表の裁ち方　男羽織表の裁ち方　男羽織裏の裁ち方

裁ち方と積り方

表の裁ち方

表總用布から袖丈の四倍と衿布とを取り其の殘りを身頃にします。衿丈は衿肩明と前下りと肩の繰越と衿先縫ひ代との合計凡そ六寸を出來上り身丈に加へてそれを二倍した



積り方

〔公式〕　用布－(袖丈×4＋衿用布＋前後の差×2)＋4＝後丈
後丈＋前後の差＝前丈
身丈＋6寸×2＝衿用布

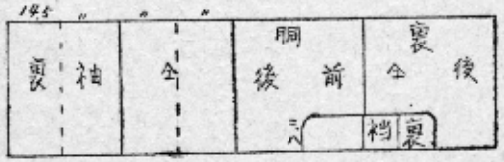
男羽織表裁ち方

表用布並巾2丈9尺
裁切袖丈1尺4寸5分

積り方

〔公式〕　袖丈×4＋(出來上身丈×2－後丈＋胴接代)×4＝裏總用布

男羽織裏の裁ち方



積り方

ものが總丈です。身頃は前後の差として四寸程前身頃を長く裁つか、又は前下りと繰越分のみを長く裁ちそして胴裏を前後同じ長さに裁つてもよいです。前身頃は幅二寸八分程裁ち切つて袖口布及び襟布乳布等とする、袖口布としては一尺四寸五分位のもの二枚乳布としては五分の物二枚をとり取りを二等分して左右の襟布としまます。

裏の裁ち方　出來上り身丈の二倍から裏裁ち切後身丈を減いて其の殘りに胴接ぎの縫代を加へて四倍したものが胴裏で其れに袖丈の四倍を加へたものが裏の總用布であります、胴裏の前身頃から表と同じく巾二寸八分裁ち切つて襟裏にします。

第十二講　本裁女物長襦袢

普通仕立上り寸法

袖丈　着物より五分廣く
袖口　廣袖
袖幅　着物より一分詰め
身丈　着丈より一分詰め
前幅　着物より五分廣く
身八ツ口　後三寸　前四寸
袖附着物より二分五厘詰め
後幅　着物より五分廣く
前下り　五分
袖丈　着物より二分五厘詰め
袖幅　着物より一分詰め

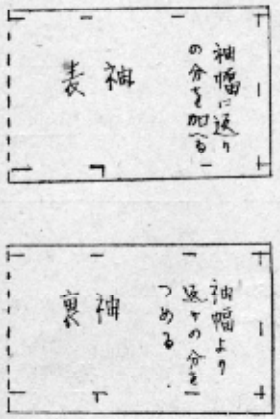
標付け方
袖
後身頃

落して衿の足ない時は中央に足し布を用ひます。

裏の裁ち方は表の裁方と同様で唯違ふのは身丈を表より袱の二倍長く裁つて、紳衿のときは衿裏はいりません、裾廻し布をつける時は並巾二尺六寸を半巾に裁ち内二尺を衿裏とし、残りを横布として使ふのが普通であります。

標附け方

一袖　袖口を毛抜合せにする場合には、表袖裏袖とも同じに標を附けます。又大名袖として表袖幅の縫代を一つぱいにしておき、その中から仕立上げの袖幅を計つて裏へ返る分を計つて置いて、裏袖は表袖の裏袖へ返る分を袖巾から減じた其の残りを裏袖巾として標をつけます。縫ひ込みは振り八ッの方へ入れて置きます。



次に袖丈袖附袖巾の標をつけます。

二後身頃　中表にして二枚合せ肩から

衿
裏身頃
据廻し
前身頃

ら折つて前身頃を下に後身頃を上にして置く、この時前身頃は後身頃より裾を一寸出して置いて、身丈、袖附身八ッ口、後巾、肩巾等の標をつけます。

三前身頃　後身頃を左に取りのけて、前身を出し身八ッ口の標を一寸下げてつけます、前巾の標の附け方は寸法通りに下から一尺五寸程直ぐに上は衿肩明の處から絲を引張り肩から三寸の處に丸味を持たせて、斜に衿附の標をします。

四裏身頃　表身丈から袱の二倍を長くします、其の他は表身頃と同様です

五裾廻し　裾廻しに横布を附けるならば脊から二つに折り、背の縫代を定め次に後幅を計つて脇の縫代を取り、次に前幅の標附け方圖のやうにします若し布丈の短い時は脊や脇の縫代をとらないで横布をそのまゝ縫目なしに使つてもよいのです。

六衿　廣衿ならば衿巾を上から下まで三寸にして標をつけてから、衿丈を計ります、衿附けの縫代を一ぱいに標します、衿を紳け衿にするときは衿肩明の間一寸五分にして裾で三寸の巾にしてその間にも斜に標をつけて、二つ折

りにするのであります。

縫ひ方順序　縫ひ方順序

一袖　表袖と裏袖との袖口になる方を合せて縫つて、折りは裏袖の方を返して、きせ山から一寸五分の處に六分の針目に隱絲をします、次に袖下の縫ひ代を合せて表裏それぞれ合せて待針を打つてそれから袖口の折り山から二つに折つて表裏を合せて待針を打ち直します。この時片袖許り出來上らぬやうにします。袖下は八ッ口二寸五分位手前まで四つ縫をし、八ッ口の方は表裏別々に縫ひます。そして一旦表に返して袖口の方を整へ、更に八ッ口の處のみを裏返して表袖裏袖の袖巾の標を合せて八ッ口を縫つて表に返して絲をかけます。

身頃

二、身頃　表は脊脇を縫つて、折りをつけ、裏は胴も裾廻しも背脇を縫ひ胴接ぎをし裾廻しの方に折をつけて隱し絲をして表裏の裾合せをします。衽を整へて假綴ぢをし縫目をとぢ身八ッ口の留を女物袷のやうにして前後の身八ッ口を縫ひます。

袖附　袖附及び留め方は女物袷に同じ。

袷附

四、袷附　前身頃の表裏をよく合せて縫ひ目の際を絎絲で假縫ひをし袷及び身頃の標を合せて待針を三枚一度に打つて袷をつけ袷先を縫ひ折をつけ三ッ袷を入れて袷を綴けます。

掛綴ぢ

五、裾とぢ　裾とぢは後身頃に五針前身頃に四針を出します。

六、前の弛み　前の弛みは身八ッ口で一寸長くなつてゐるからその分だけ身八ッ口下で摘み表身頃に針目を出してとぢておきます。

男物袷長襦袢

七、半袷　半袷に芯を入れ、裏袷をつけて褄へ本袷に綴けつけます。

第十三講　男物袷長襦袢

男物袷長襦袢の裁ち方積り方及び縫ひ方等は大體は女物袷長襦袢に同じですからその違ふ點のみを掲げます。

一、男物袷長襦袢は無雙即ち引返しとして裾を毛抜き合せに縫ふことが多いですし、袖も大體無雙にします。

二、女物長襦袢と違つて前身丈に弛みをつけません。
三、袖附は長着よりも二分以上少なくして人形を拵へ男物袷のやうに袖附をします。
四、衿附は女物と同じく衿巾は上下共も一寸四分にして絎けつけ半衿は長着の共衿のやうに絎けつけます。

第十四講　腹合せ帯

一、普通仕立上寸法

幅　七寸五分――八寸五分
丈　一丈――一丈八、九寸――一丈一尺位まで

帯巾は時の流行によつて廣い狭いがあり、又用ふる人の體格によつても廣狭を考へる必要があります。即ち丈の高い人は廣い帯を低い人は狭くすると格好がよいです。腹合帯は別名晝夜帯とも言つて、普通兩側異つた帯地を合せて仕立るものであります。

腹合せ帯
普通仕立上げ寸法

二、布の整理

どんな織り方の帯でも仕立にかゝる前には必ず布の整理をすることが大切です。まづ布の耳を合せて織り出しと織り出しとを揃へて見て長短があつたならばその差をよく調べて幾度も布目の正しく揃ふまで充分に直します。そして織り耳が釣れて居て手で直らないものは火熨斗か烙鏝で伸ばし帯地の中央よりも織耳の少し弛む加減にします。若し織耳の釣れ方の甚だしい場合には布の端に切り込みを入れて後烙鏝で伸ばします。兩耳を伸ばしたならば、帯地全體に裏から火熨斗をかけて丁寧に布の地のしをとります勿論左右の兩端の長さは同じにならなければなりません。

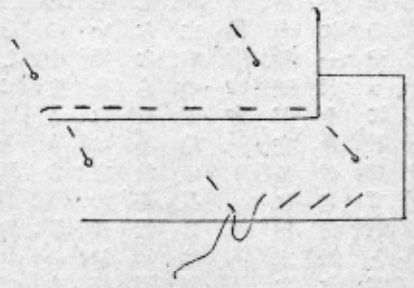
三、標附け方

布の整理が完全に出來たならば帯の表側を中にして二枚合せ釣合を見て中央に一尺をき位に待針を打つて帯の兩側の釣合をよく檢べて縫ひ代の邊を圓のやうに絹絲で假とぢします。

帯巾は仕立上げ寸法に一分を加へ、模様の加減を見計つて巾丈の標をつけ

縫ひ方

圖方けかの襞假



ます。四角は更に五厘づつ丈巾を廣く標をつけて出來上りのきせを多くします。標は輕く通し篦を用ひます。

注意 一、縫出しは全部出さないで模様の加減を見計つて適當に縫ひ込んでもよいのです。

二、片側特別に長い時又縫端の都合模様の如何によつては手の方の一尺六寸位の處に適當に揚をすることもあります。

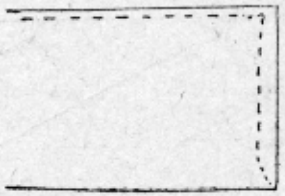
四、縫ひ方

兩端八寸位の間を細かく半返し縫にし他は一針抜きか又は抄ひ針にして一方の中央を帶巾だけ殘して全體を縫つて四角は圖に示したやうに五厘程突き出して縫ひます。

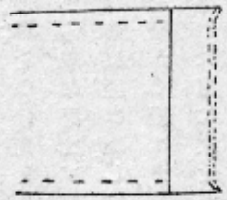
折のつけ方 まづ端に一分五厘のきせをかけて折り縫ひ目にとぢつけ次に巾に五厘のきせをかけて折り角を整へてよくとぢつけます。縫ひ込みがあまり厚くなるやうなら物によつては角の折り込みを適宜に切り落してもよいです。

芯の入れ方

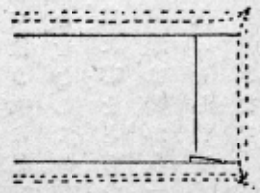
圖方ひ縫の角の帶



圖方り折



圖方り折



芯の入れ方

芯布は裁つ前に全體に平に霧を吹き、アイロンをかけて地のしをしてから芯布の一方の耳を裁ち切つて、次に仕立上げの帶巾と同寸法に他の一方を裁切ります。丈は凡そ帶丈一尺について一分の弛みを加へます。芯は地質の薄い方に入れた方がよいのです。芯の入れ方は帶の上に芯を載せて一方の

仕上げ
飾りとぢ

端に芯を待針でとぢつけておき、他方の端から帶地のみを引いて靜かに離し芯の弛みを定めて五寸おき位に待針を打つて芯を平等に弛めておきます。次に待針を縫目の方に移し芯を縫ひ込みに五分位の針目でとぢつけます。芯を開いてその上に眞綿をひいて芯を再び帶皮の上にのせて、とぢつけて、又其の上に直綿を引いて、四方に引絲をつけ角を先に返して置き次に縫ひ殘した處から表に返します。よく引合せをして四方に躾をかけ前に縫ひ殘してをいた處に芯をとぢつけて其處を細かく綴けます。帶の兩端は端から一分五厘程離れた處に躾をかけて、仕上げをします。

仕上げ　火熨斗を掛けて壓を置きます。

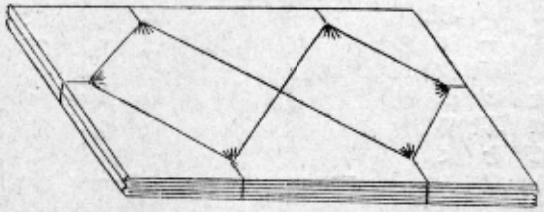
飾りとぢ　六つ折りの屏風疊みにして紅白の絲を二重にし帶巾の中央に兩端から各々一寸の深さ

圖のやうにして二個所にとぢをし、都合六個所とぢ終りたならば絲を菱形にかけておきます。

注意　一、地薄のため二枚芯を使ふ場合は一枚を帶巾に裁ち他の一枚を帶巾よりも縫ひ込みだけ狹く裁ち二枚合せて芯の中央をとぢつけて一枚芯と同じやうに入れる。

夏物紹の帶等には模樣のある芯地を用ひますと表から透けて見えてよいものであります。

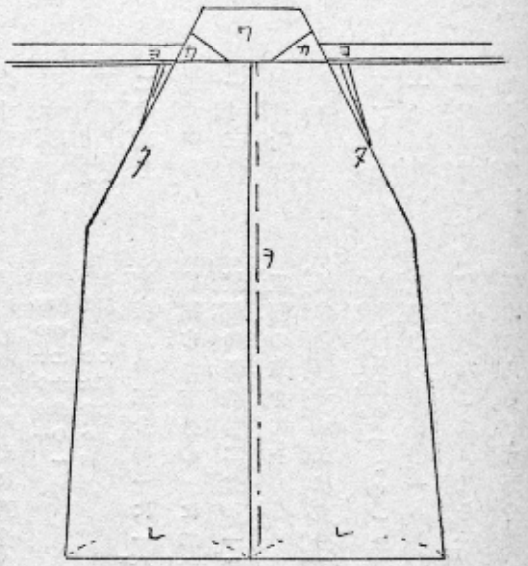
圖のやうに仕立上げた帶せ合



注意

男袴各部の名稱

（後）



レ　タ　ヨ　カ　ワ　ヲ
後　股　後　附　腰　後
巾　上　紐　菱　板　襞

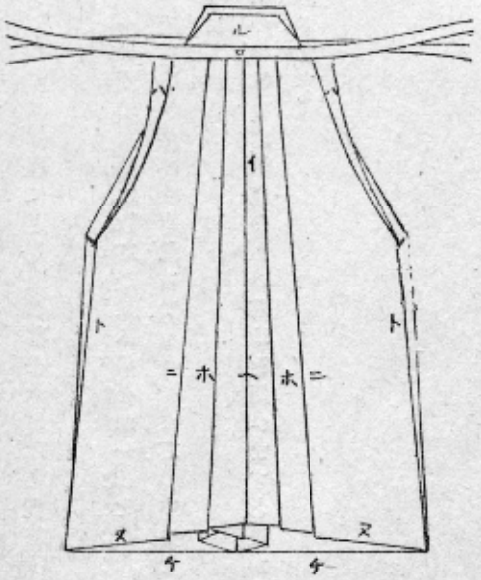
普通仕立上げ寸法

紐下　二尺三寸

割り出し方

着丈の十分の六に一寸加へる

男袴各部の名稱（前）



イ　ロ　ハ　ニ　ホ　ヘ　ト　チ　リ　ヌ　ル
紐　前　控　一　二　三　相　脇　前　脇　裏
下　紐　紐　の　の　の　引　し　上　切　前
　　　　襞　襞　襞　　げ　　　　
　　　　　　　　　　巾　上　脇　裏

第十五講　男袴

相引	一尺六寸
後巾	八寸
後腰巾	六寸五分
後重ね襞	上八分 下四分
腰板幅	上四寸三分 下六寸五分
腰板の高さ	二寸三分
附菱巾	二寸四分
附菱の高さ	一寸三分
前脇襞幅	四寸七分
前紐附巾	八寸
前衿襞巾	上八分 下一寸五分
管襞巾	一寸二分
襦の高さ	一尺二寸五分
乗間	九寸五分

紐下の三分の二に五分加へる

着物の後幅に同じ

後幅の四分の三に五分加へる

後幅の十分の一

後腰の巾六分の四

腰板巾の三分の一に一分加へる

後腰巾の三分の一に二寸位加へる

腰板の斜線の二分の一に二分加へる

後幅の五分の三

後巾と同寸か又は五分廣く

後巾の十分の一

後巾の五分の一より一分狭く

前脇巾の四分の一

相引の高さより凡そ一寸五分を減ず

後巾に凡そ一寸五分加へる

裁ち方と積り方
布の數と裁ち切り寸法

切り上げ	一寸五分
後紐	丈 二尺二寸五分 巾 八分
前紐	丈 尺 巾 八分

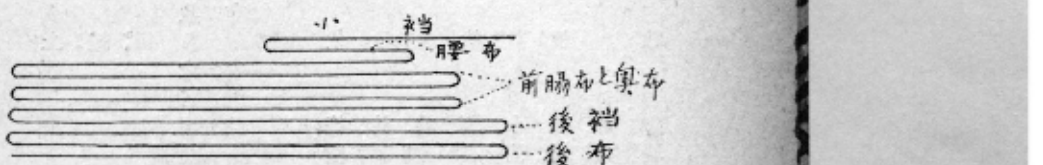
後巾の五分の一

裁ち方と積り方

布の數と裁ち切り寸法

二枚	後幅丈 二尺六寸五分（裾に巾の八寸五分の所から切り上げ二分付ける）
二枚	後襠丈 二尺六寸三分（切り上げ一寸三分つける）（襠の高さは一尺三寸五分）
二枚	前脇布 丈二尺六寸五分（切り上げ八分）
二枚	前奥布 丈二尺五寸七分（切り上げ八分）
一枚	腰布丈 六寸（但し二つに切つて使ふ）
二枚	小襠丈 一尺六寸二分（襠の高さ一尺三寸五分）
二枚	後紐丈 二尺二寸五分
	前紐丈 八尺——九尺（全部の長さ）
二枚	附菱丈 二寸——三寸二分

布の折り方の圖



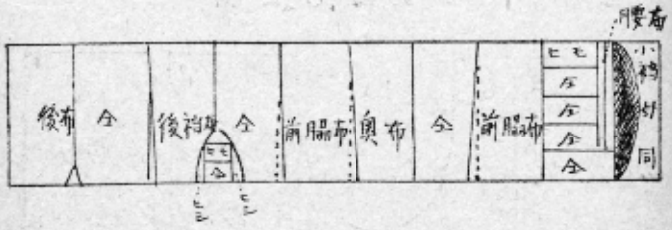
鋏の入れ方

積り方が終つたならば折り方圖のやうに折疊み右の方が裾であるから左の方に鋏を入れて後布後褄布前脇布と奥布（つゞいたまゝ）紐腰布小褄を切り離す（但し二枚づゝ布はつながつてゐる）

一、後布　後布の裾を眞直ぐに裁つて、幅八寸五分の處から褄附の方へ二分の切り上げを附けます。

二、後褄布　後褄の裾に一寸三分の切り上げをつけてそこから褄の裁ち切りの高さに標をつけ次に乘間より小褄布を減じた殘りの寸法を後褄布の小褄附の方から計つて刳りの巾とします。その刳り方は褄の高さを標してイとし、その殘りを二等分して中央を口とし（但し刳りの幅標の上にこのイとロとの間に斜線を引いて中央に一寸三分ほど斜線の凡そ六分の一の丸みをつけて刳

本裁男袴の裁ち方



積り方

〔公式〕 1. 紐下＋裾幅代＋縫ひ代＋切り上げ＝後布丈

2. （總用布－（後紐丈＋腰布＋小褄）＋裁ち違ひ）÷3＝後布丈

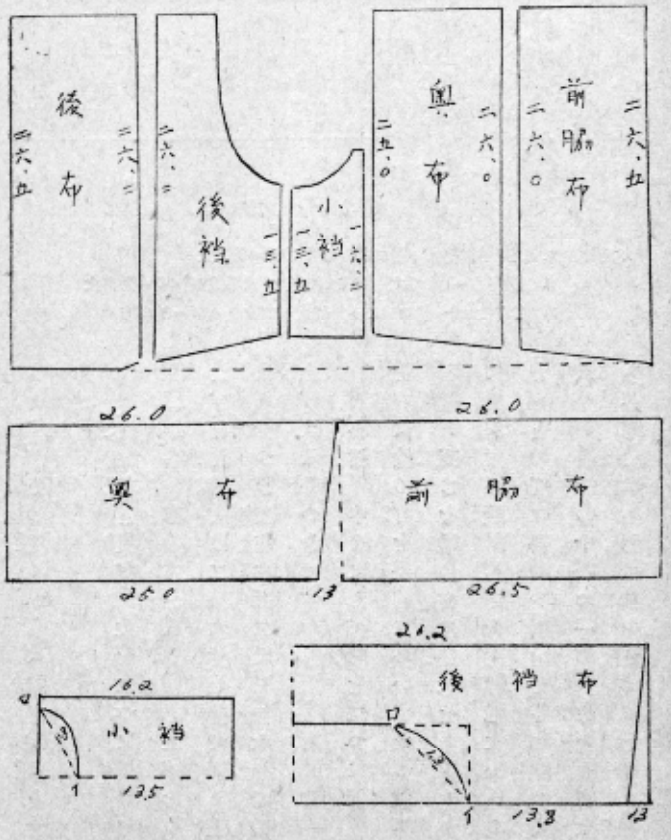
3. 後布丈×3－裁ち違ひ＋後紐丈＋腰布＋小褄＝總用布

ります。その殘りからは紐と附菱とを裁ちます。

三、前脇布と奥布　丈を二つに折つて折り目から奥布の方へ八分切り上げをつけますと前脇丈は二尺六寸五分で切り上げは八分つき奥布丈は二尺五寸七分で切り上げは八分つきます。

四、小褄　中表にして幅を二つに折り裾を右に輪の方を手前において、まづ裁ち切り褄の高さを輪の方に標してイとし上部に奥布附の縫ひ代二分を標してロとしイとロとの間に斜線を引いてその中央で約八分の（斜線の十分の一の丸みをつけて裁ち落して輪の方も裁ちます。

切り離した圖



五、紐布と腰布　つぎにおるまゝ幅を五等分して前紐一本を裁ち切り次に腰布を取つてその殘り布の幅を四等分して二本を後紐他の二本を前紐としまします。

標附け方

一、後布　二枚の布を中表に重ね裾を右に相引を手前にして、裾縫け代を出來上り二分になるやうに標し、次に相引の高さを標して相引の縫ひ代を二分につけて、寸法通り上下に後幅の標をつけ、後襠附縫ひ代及後丈の標をつけます。但し後丈は紐下に切り上げと外に衿紐附の高くなる分の二分を加へた寸法です。後丈の標の線上に後幅の二十分の一即ち四分を後幅の標から投げの方によせて標をつけ、この標から裾まで斜に標をつけて後襠の標にします。次に後丈の標の線上に後腰の標から投げの方へ後腰巾の二分の一を計つて標をつけて相引の處まで斜に折つて投げとし、更に二つに折つて襞をかけてから上の一枚の布を取り除いて左脚の後布に後重ね襞標をつけます。即ち後丈の線上に後幅の十分の一即ち八分を後襞標から計つて重ね襞とし

左脚の後布はこの標の通り下まで眞直くに折つて右脚の後布は後襞の通りに折ります。

二、後襠布　二枚の布を中表に重ねて裾を右にして圖のやうにおいて後幅の腰立て標にならつて腰立て標裾絡及び小襠附の標をつけて乘間の縫ひ代を四分につけ上の幅を裾につけてその縞目を通して標をつけます。

三、小襠　二枚重ねておいて、裾絡及び縫ひ代の標をつけます。

四、前脇布　二枚の布を重ねて、相引を手前に後布のやうにおいて、裾絡代相引の高さと縫ひ代丈の標をつけ、次に脇襞幅の標をつけて、これを一つの襞の折の山と定めて、次いで奥布附の縫ひ代を標します。

五、奥布　二枚の布を中表に重ね裾を右にして圖のやうにおき前脇布附の縫代を標しそれから一寸八分離して二の折り山を標して乘間の縫代を四分に標をつけ、それから二寸六分計つて三の襞の折り山を標します。三の襞の深さ即ち重ね襞の山はこの標よりも尚一寸六分乘間の方へよせてつけます

注意　襞の折り目などには筆で標をつけないで絲標を用ひます。

縫ひ方順序
縫ひ合せ方

縫ひ方順序

一、縫ひ合せ方　二、襞取り方　三、筐襞取り方　四、腰板の作り方　五、前紐附けと腰立　六、仕上げ

一、縫ひ合せ方

左右の投げを八分位の針目で表には極く細かく針目を出して絡ける、投げは斜で伸び易いから伸ばさないやうに注意します。

二、後襠と後布とを縫ひ合せ兩脚とも襠の方へ折りをつけます。

三、前脇布と奥布とを縫ひ合せ奥布の方へ折りをつけます。

四、奥布と小襠とを縫ひ合せ小襠の方に折りをつけ五分程の針目で隱し襞をかけます。

五、後襠と小襠とを縫ひ合せて、小襠の方に折りをつけ五分の針目で隱し襞をかけます。

六、乘間を袋縫ひにします。

七、相引を縫ひ前布の方に折りをつけます。

襞の取り方

八、兩脚布とも裾綴けの襞をかけて四分の針目に綴ます。この際後布の後幅標の處に襞を一つ取つて切り上げの形を作ります。

二、襞の取り方

一、後襞　乘間の處で後襠上部の縫ひ目を眞直ぐに褄まで縞目を通して兩脚布二枚を一緒に襞で押へこれを後の中心にします。後布の腰附を左に取り就廻しを右にして後布を出して、襠を右脚に折り返して中央の襞の處を折つて、乘間の折りを右脚に返します。次に左脚の重ね襞を標通りに折つて中央と後布の腰幅二分の一の標と合せて右脚は後襞の標の通り折つて左脚の後襞標の上に重ねます。即ち後重ね襞は上で八分褄で四分にしてあらく襞をかけます。

二、前襞　襞を取つた後布を下にして前布を上に出して襞の山に折りをつけます。但し右脚は三の襞を折りません。乘間の前の縫ひ目を乘間の後の縫ひ目に重ねて中心を定めて右脚三の襞標を中心に重ねて懐ろの襞の折り山は定めて左脚三の襞標をこれに合せます。これより順に二の襞一の襞を

裾の取り方

腰板紙の裁ち方

注意

上下の寄せ襞幅の寸法通りに寄せて襞をかけます。

襞の上下共二寸程離れた處にそこの寄襞幅と同寸法に飾り襞を上・中・下の三個所にします。

三、笹襞の取り方

後腰襞の二分の一より二分少ない寸法を紐附の縫ひ代の線上に笹襞幅より二分少ない寸法を標して、次にその標より笹襞幅を計つて標をつけます。笹襞の折れた中を開いて、上から相引の處の笹襞の消えた處まで縫つて、その絲で裏を新け相引留に門留をします。

四、腰板紙の裁ち方

腰板紙は美濃紙二十枚程の厚めの板目紙で、普通仕立上げ寸法の通りに裁ちます。まづ腰板の幅と高さを以て長方形を畫いて、次に腰幅の六分の一を兩端から計り、その六分の一の處から下の腰板幅の處へ向つてそれぞれ斜線を引きその通りに裁ち落します。流れを計つて狂ひがないかを試します。

注意　袴地が絹地ならば上の左右の角を一分五厘程の丸みをつけて裁ち

ます。又別に半紙を八分の幅に裁ち固く撚り又二分五厘幅の紙で腰幅の凡そ二分の一の長さを作つておきます。

附菱布の裁ち方

腰巾の二分の一を附菱の巾とし腰板の高さに二分五厘を加へたものを丈とし裁ち切ります。

裏打ちの仕方

薄い美濃紙か生半紙をもんで手で伸し、裏腰布及び附菱布の周圍に細く糊をつけて下圖の様に張ります。

表腰の貼り方

表腰布及び腰板紙の中央の裏にそれぞれ標をつけ、腰板紙の表側の下部に二分の幅に糊をつけ糊を一旦輕く拭つて、表腰布の下を裏の方へ四分折り返しの出來るやうにして中央をよく合せて兩脇に布を平等に出して貼りつけます。この際こよりに糊をつけ下部の腰板からはづれない程度の處に貼りつけ指先で表からこよりの廻りを押へて落ち着かせ次に裏に折り返す分に

後紐附とその留め方

附菱の位置

糊をつけて腰板の裏側へ貼りつけます。兩脇の布を下方から計つて紐巾より二厘狹く腰板の際まで切り込みます。次に腰板の上部と兩脇を裏の方へ折り返して貼りつけます。

附菱の位置

腰板の斜のまゝ計つてその二分の一に一分加へたものを附菱の高さとし腰巾の三分の一に二分位加へたものを附菱の巾として表腰に針を立てゝ標としします。附菱布の縦の方に二分五厘の折りをつけ折り目を腰板脇の表に當て先に標をつけた通り附菱の形を作り形の崩れぬやうに裏側から疊綴をかけておきます。次に表腰の附菱の標に合せ腰板の脇と附菱とを毛抜き合せにして附菱の下方を裏に折り返して貼りつけます。

後紐附とその留め方

紐の輪の方の端より五分の處を腰板の脇の下から紐巾の高さの處に合せ二本の撚り合せ絲を用ひて紐の裏側から針を出して、腰板の脇と紐とを一緒に抄つて絲を結びその絲を切らずにそのまゝ紐の下部腰板の角に針を下し

表返して紐巾を三角に折りその字に絲を掛けて留めておきます。

裏腰布附け方

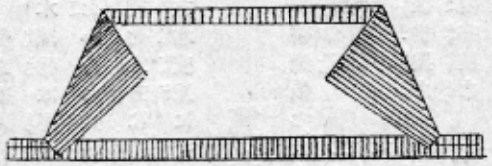
裏腰布を二分五厘の縫代にして後布の腰立ての處へ當て裏からあらく縫ひつけておきます。

腰立て方

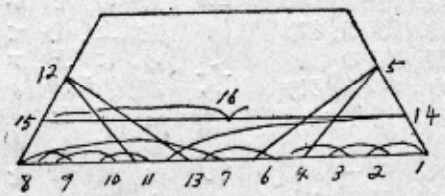
表腰布の下の角の縫ひ込みを紐の中に入れ紐の新け爰した部分を新けます。表腰板の表を出して後布の腰立ての處眞直ぐに當て左右の投げを少し張り目にして附菱を起して待針を打ち裏返して裏腰布を見て圖の數字の順序に絲をかけて腰立てをします。但し(5)と(12)との針は腰板と附菱の上の角とに通し(14)と(15)の針は腰板に通して表裏の腰布と紐の上とを少し抄つて共に絲をかけます。又(16)の針は一度表に抜き出して直ちに元の針穴から斜に裏に通し腰板にだけ針目の出るやうにして裏で(14)から(15)に渡つた絲にかけて打ち留をします。絲は二本撚り合せて用ひ表腰には少さく針目を出す。腰立てが終つたならば裏腰布の上と脇を表から五厘位控へて折つて內側の

周圍に糊をつけて表腰に貼り合せます。

圖の方り貼腰表



圖の序順掛絲て立腰



前紐附と腰立

前紐の新け爰した處へ美濃紙を紐巾の二倍に折つてとぢつけ前紐の中央と前腰巾の中央とを合せてよく釣合を見て待針を打つて半返し縫にします。この時三の襞から端まで一分程紐附を上げてつけて紐の厚さを一樣にするために小布を入れて平にして新けます。

腰立ては前に說明したやうに腰板を挿へて腰立てをします。

右が終つたならば引返して絹布ならば眞綿又は布で股上の凡そ三分の一の處から乘間の縫ひ代を包み縫目

より外にはづれないやうにかゝりつけます。

仕上げ

木綿物は薄く霧を吹いてアイロンをかけて、鏝を伸し絹物は白布を被ひその上から火熨斗をかけて仕上げをし、圓のやうに相引の中央より一寸程上から裾を上方に折つてその上に上部を折り重ねて三つに疊み前後の紐を揃へて、左右交互に折り重ね、右左の端と中央との三個所に紙封をします。

第十六講　女袴

女袴　普通仕立上げ寸法

普通仕立上寸法

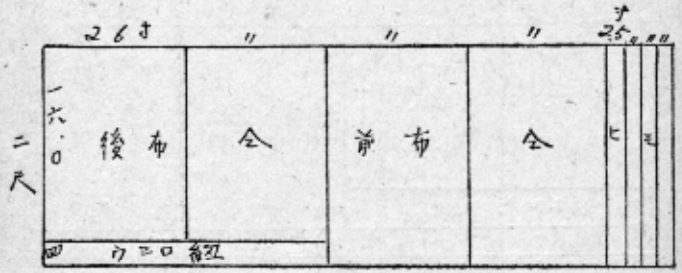
紐下　二尺三寸
後脇巾　六寸
後笹襞巾　四寸七分
前寄襞巾　下一寸八分五厘
前の重ね　一寸
八分
前紐幅

相引　一尺六寸五分
後の重　一寸
前脇巾　四寸七分
前腰巾　八寸五分
後紐巾　一寸五分
前紐丈
八尺

後巾　六寸
後腰巾　八寸
後寄襞巾　下二寸一寸
前笹襞巾　一寸二分
後紐丈
五尺

大人女袴の裁ち方

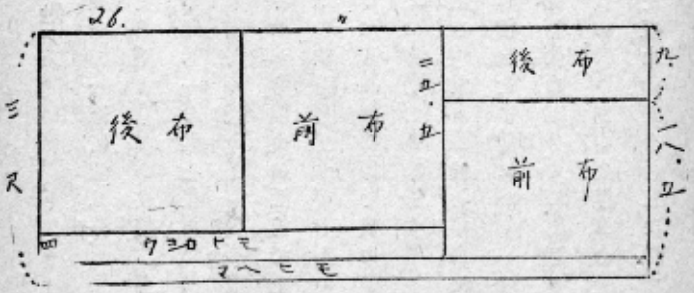
大人女袴の裁ち方



積り方

〔公式〕後布丈×4＋前紐巾×4＝總用布

大人女袴の裁ち方

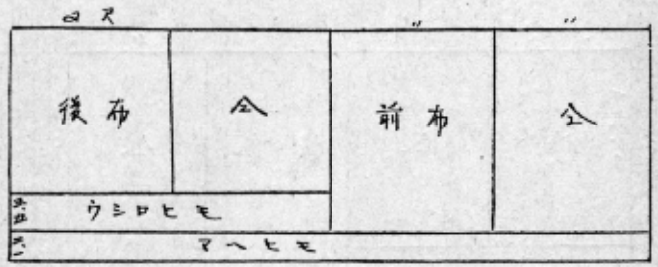


積り方

〔公式〕後布×3＝總用布

標附け方

中裁女袴の裁ち方（大巾）



積り方

用布縫＝4×後布〔公式〕

標附け方

(1)後布　一、裾絎標五分、二、丈標、三、相引の丈と縫方、四、中央縫ひ合せの標、五、後脇巾即ち一の襞を後巾の四分の三に標す。六、相引の縫代より先へ後巾を假に計つて、それから中央の標までを二等分しそこを二の襞とします。七、上の布一枚を取り除けて重ね襞の標を後巾十分の一だけを中央に寄せてつけます。

(2)前布　前布二枚を中表に重ねて、裾口を右に相引を手前におく。

一、裾絎代巾五分、二、丈標、三、相引の丈と縫代の標、四、中央縫ひ合せの標、五、一の襞を後巾の五分の三に標す、六、後と同

縫ひ方順序　後布及前布の縫ひ合せ

じやうに相引の縫ひ代より假に後幅を計つて、それから中央の縫ひ合せ標すでを三等分して中央からその三分の一の寸法の處を三の襞とする。七、三の襞と一の襞の中央を二の襞をする。

縫ひ方順序

一、後布及び前布の縫ひ合せ、二、裾絎、三、襞取り方、四、笹襞取り方、五、相引門留及び壓、六、紐絎、七、前紐附、八、後紐附及び飾り紐

後布及び前布の縫ひ合せ

一、後布の中表を中にして、左脚になる布を一分五厘出し縫ひ合せて、折りは着物の脊縫の折りと反對につけます。そして一分五厘を折り込んで折り伏せ縫ひにします。前布を中表に合せ左脚布を右脚布より一分五厘出して縫ひ着物の脊縫の折りのやうに折をつけて伏せ縫にします。もし前布が三布の場合は中央へ折りのかゝるやうに縫ひ合せ、折りをつけて伏せ縫にします。

二、裾絎　裾を三つ折り絎にします。もし裾廻し布をつけるならば裾廻し

布と裾とを縫ひ合せ折りは裾廻し布の方へつけて隠し襞をかけ表布を一分五厘折り返して裾廻し布の端を表に縮けつけます。

三襞取り方　後襞の取り方　イ、まづ後布左右とも標通りに一の襞及び二の襞の折りをつけて、左脚の方は二本の標の内中央に近い方を折ります。これを重ね襞といひます。

ロ、中央の縫ひ目の上に左脚の二の襞標を合せます。即ち重ね襞は中央より一寸程右脚の方へ寄せて重ねます。

ハ、次に右脚の二の襞山を左脚の二の襞標に重ねます。即ち後の重なりは一寸です。

ニ、次に寄襞巾を定めて一の襞を作ります。即ち寄襞巾の上は一寸下は一寸八分とする。襞の上の飾り紐を上中下の三個所に千鳥に掛けます。

前襞の取り方　イ、一の襞二の襞及び三の襞を標通りに折ります。但し右脚布の三の襞は重ね襞となる二本の標の内中央に近い方を折ります。

ロ、右脚布の重ね襞を一寸程中央より左脚の方へ出して重ね次に左脚布の

襞取り方　前襞の取り方

三の襞を重なり一寸にして躾をかけます。

ハ、後と同様に寄襞巾を定めながら襞を取ります。寄襞上の巾は後巾の十分の一、下は後巾の五分の一です。但し下の寄襞巾はそれより五厘位減じても差支へありません。

ニ、襞の上に飾り紐を上中下の三個所に後と同じやうに千鳥に掛けます。

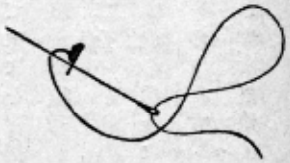
笹襞の取り方

後笹襞の標附　後腰巾の二分の一より二分少ない寸法を中央より標して第一圖のやうに折つて、紐附の縫ひ代の線上に笹襞巾より二分少ない寸法を標して次にその標より笹襞巾を計つて標をつけます。

前笹襞の標附　前腰巾は後腰巾より五分廣いため笹襞標附は中央より後巾の二分の一より二分五厘多く標し次に笹襞巾より二分少ない寸法を紐附の縫ひ代の線上に標して、次に出來上り襞巾を計つて標をつけます。

笹襞の作り方　標附の寸法で相引留の際まで少し丸みを持たせて、笹の葉の如き形に格好よく折りをつけ形が整つたならば中を開いて三分の針目に

門留の仕方



し外へ出る針目は少さくしてとぢつけ下方は稍小針に裏側を縫けます。

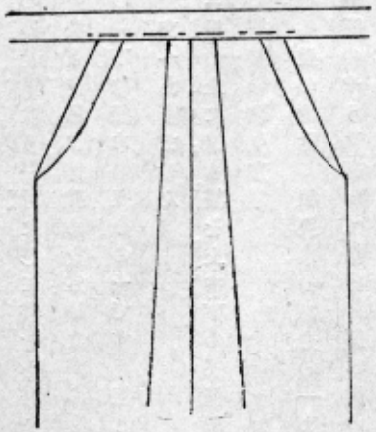
相引門留及び匿　相引を縫ひ合せ始め終りとも二寸五分返し留にし折りは前布につけ裾縫の縫け殘した處を縫けます。

門留　相引の上の端に一分位の大さに門留をします。

門留めの仕方　圖のやうに門留の巾に絲を二三本渡して針をその絲の下をくゞらし針の先についてゐる絲を掛けて中央を弛く、兩端を堅く一分位の大きさになつたら絲を裏で留めます。

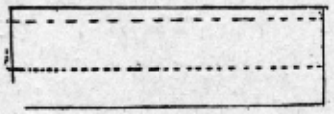
後紐の附け方　先づ圖のやうに厚紙を裁ち切ります。そして紐は

後腰飾絲の附け方



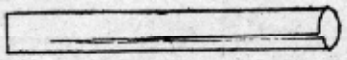
圖方ち裁板腰

(1)



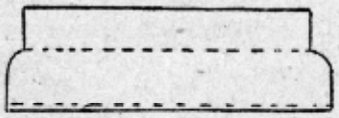
(1)を點線から折つたもの

(2)



紐山の兩角を5分の丸みをつけて裁ち落したもの

(3)



腰附の巾より二寸位多く眞中を明けて先に縫けて置きます。それに厚紙の裁つたものを厚紙の折り山と紐の折り山とを合せて躾で紐のゆるまないやうに折つて置いて圖のやうに飾絲を通して後腰と紐の眞中とを待針でとめて、二本絲で紐山から一分奥を半返しで縫ひつけます。そして縫ひ代は全部厚紙の間に入れて、紐を縫けつけてしまひます。前紐も前腰巾より二寸程廣く縫け殘して置いて、紐の折り山より一分奥を半返へしに縫ひつけます。前紐附は其の兩端を三分位づゝ上に上げてつけます。縫ける前に、三の襞の縫

夜着
普通仕立上げ寸法

ひ込みのうすい處に半紙を畳んで入れます。

第十七講　夜着

普通仕立上げ寸法

（大夜着）

袖丈	一尺七寸
袖丈	普巾一パイ
袖ふき	四寸
身丈	五尺二寸内外
後丈	八寸五分
脊入	四寸
前巾	八寸五分
衽巾	五寸
衽下	六寸
衿ノ下	二尺
袖口ふき	六寸五分
肩明布	四寸二分

（中夜着）

一尺四寸五分——一尺六寸	
普巾一パイ	
二寸五分内外	
四尺八寸	
八寸五分	
七寸五分	
四寸	
六寸	
一尺八寸五分	
五寸三分	
三寸四分	

（小夜着）

一尺四寸	
八寸五分	
二寸内外	
四尺五寸	
八寸五分	
七寸	
四寸	
五寸五分	
一尺七寸五分	
四寸	
三寸	

衿巾　三寸五分
裾ふき　一尺五分
燈　四寸
掛衿　三尺五寸
肩當　四尺

二寸六分
八寸
四寸
三尺五寸
三尺五寸

二寸五分
六寸五分
四寸
三尺五寸
三尺五寸

袖の割出し及び寸法

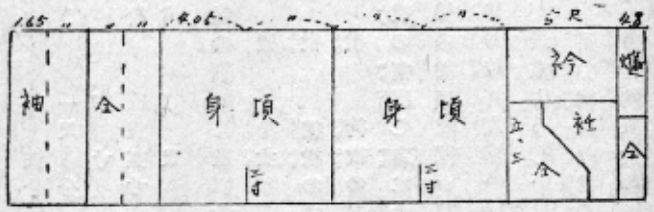
袖　身丈の五分の一又は五分の一強　八寸——一尺
衿　袖　裾袖の二分の一　四寸——五寸
袖　袖　衿袖の二分の一　二寸五分
右袖の割出し方は大中小何れも同じ。

綿の種類に就いて

白綿・赤綿・打直綿の三種類で何れも上・中・下の區別があります。普通赤綿の上等が最もよろしい日方は夜着の大きさに依つて異なります。

大　目方約百匁目　巾　二尺六寸五分　長さ　四尺八寸内外
小　目方約五十匁　幅　二尺四寸　長さ　四尺三寸

夜着表の裁ち方



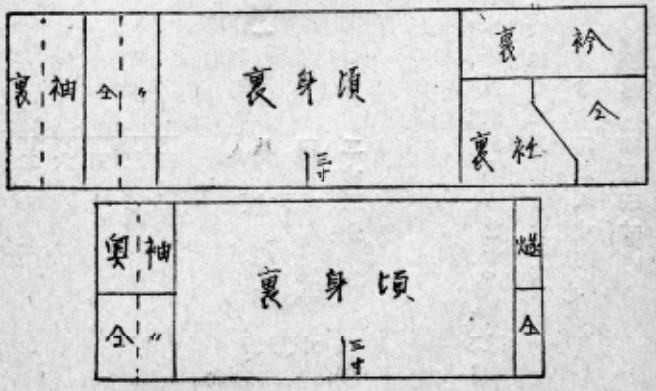
積り方

〔公式〕袖丈×4＋身丈×4＋襠＋衿丈＝總用布

《總用布－〔袖丈×4＋衿丈＋襠〕》÷4＝身丈

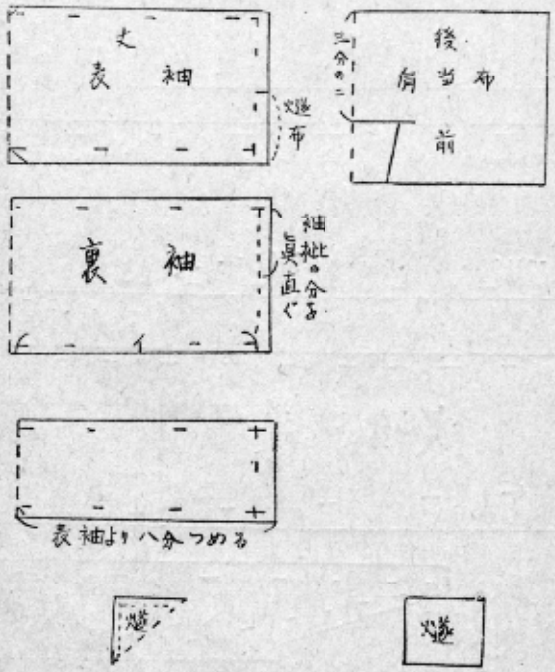
夜着裏の裁ち方

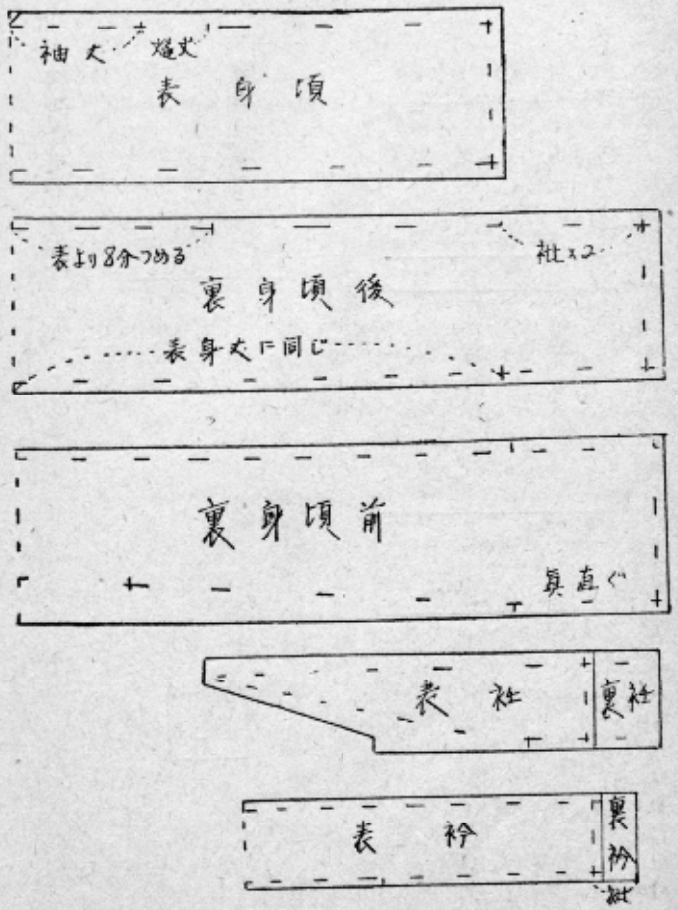
（用布並巾）



〔公式〕裏袖丈×6＋裏身丈×4＋襠＋裏衿丈＝總用布

標附け方





夜着縫ひ方順序

一、袖

一、表袖に襠を入れ袖を縫ひ袖の方へ折ります。
二、奥袖も表袖と同様に襠を入れ袖下を縫ひます。
三、裏袖の袖下を縫ひます。
四、袖口合せ　以上何れにもかくし躾を入れます。
五、合ひ標　裏袖と奥袖の上・中・下にします。

二、身頃

一、表の脊脇衽を縫ひかくし躾をします。
二、裏の脊脇衽を縫つてかくし躾をします(脊は上り五寸・裾は出袱の二倍だけ縫ひ其の間は明けて置きます。)
三、裾合せ　かくし躾をします。
四、衿下を縫ひ　かくし躾をします。
五、衿付け　表裏を接ぎ合せかくし躾をします。(表は表袖裏は裏衿を付け

廻す）

六、表裏の袷　合せ裏の方へかくし躾をします。

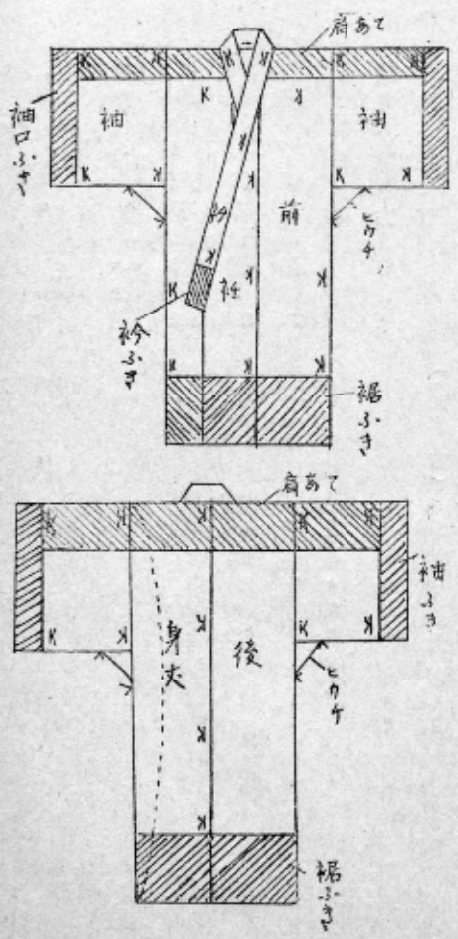
綿の入れ方

一、布の置き方　疊み方　綴ぢ方

裏を出して疊んで前身頃を下に置いて、後身頃及び袖に眞綿を引きその上に綿を置きます。裾には衽山より凡そ一尺袖口には衽山より八寸位長く平に延べます。厚味を加減して裾と袖口には別々に衽綿を入れます。全體に眞綿をひき前身頃を上に出して後身頃同様に綿を入れます。衿下衿先は稍厚みに綿を入れ眞綿を引き棲先の背筋の裾脇衽の縫ひ目にそれぞれ引糸をつけて背の縫ひ殘した處から引返し綿をよく含ませて後に合標を合せて裏袖との縫ひ殘しを綴けつけて綴ぢ糸をつける。

綿は縦横横縦と繰り返して接ぎ目は兩方から引き伸して、合せ目の高くならないやうにして、衽は一枚毎に衽綿を入れます。

肩當及び掛衿



肩當布の兩端を伏せ縫ひにして前後を折り躾をかけて後に掛衿の兩端を伏せ縫にして共衿をかけるやうにしてつけます。

出來上り圖と各部の名稱

蒲團種類

第十八講　蒲團

一種類　丈、綿の分量

一、敷蒲團　三布蒲團　表裏　同じ布　丈四尺八寸　綿一貫五百匁

二、掛蒲團　四布蒲團　表裏　四布　丈五尺以上　綿一貫五百匁
　　五布蒲團　表裏　五布　丈五尺以上　綿二貫匁

外に各々眞綿少し

裁ち方積り方

裁ち方積り方

（用布）　（積り方）　（裁ち方）

三布蒲團　一反　丈の六倍　全體を三等分す

四布蒲團　表裏　一丈九尺二寸　普通一反　表丈の四倍　裏丈の五倍―六倍　表か四等分　裏五六等分

五布蒲團　表裏　一反　丈の五倍　丈の五倍　表裏共全體を五等分します。

縫ひ方

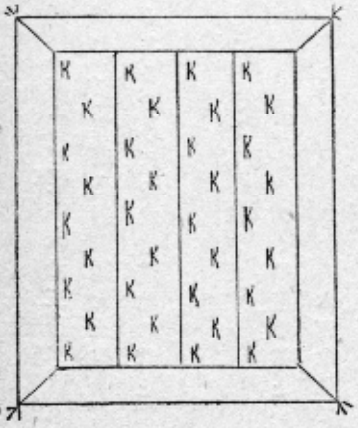
蒲團出來上り圖

出來上り圖

（敷蒲團）



（圖蒲團掛緣額）



蒲團の綴ぢは、敷蒲團は、たて綴にした方が宜しいですが掛蒲團は横綴にしても差し支へありません。

縫ひ方

一、表裏各縫ひ合す(脊縫と同じ)上下六寸五分又は八寸位縫ひ口を開きます。

二、表裏各かくし鉄をして、裏表全部周圍を縫ひ合せます。

三、折目は左が高くなるやうにつまり着物の背と同じ折の方を表とす。

綿の入れ方

裏を引きかへし口明きを下に置きます。

綿は中になる毎に二寸五分小さく、縦横縦横といふやうに入れます。

普通敷蒲團は一布に付き五百匁から六百匁位です。

掛け蒲團は一布に付き四百匁位がよろしいです。

座蒲團は大幅正方形――四五百匁――六、七百匁

四布蒲團――四布半の正方形――八百匁――一貫匁

綿の入れ方

子供洋服洋服の部の寸法の單位は、分でおります。

第十九講　子供洋服

活動盛りの子供の衣服として洋服を用ひますことは、衛生上にも、また活動

下着の種類

着方の順序

の上からも、經濟上からも、大變よいことゝ思ひます。けれども洋服も下着を正しく用ひないで、上着だけを用ひましたのでは、其の特徴を失ふことゝなりますから、下着は是非用ひなければなりません。それですから、最初に簡單な下着類の作り方を二、三記しませう。

下着の種類

一、シャツ　二、コーセットウエスト　三、ドロワース

四、フランネルペティコート(冬)　五、ホワイトペティコート(夏)　六、スリップ

着方の順序　先づ着用の順序は、シャツ、コーセットウエストを上體に、下體には、ドロワースを用ひ、冬季には其の上にフランネルペティコート、夏季にはホワイトペティコートを用ひます。そして其の上にスリップを用ひて上着を着用するのであります。即ち夏季には冬用下着の代りに夏物を用ひ、フランネルペティコート、コーセットウエストを省いて、コンビネーションを用ひて、靴下も半分のものを用ひます。

スリップは薄い地質の上着を用ひました時に多く用ひるものであります

て、これを用ひた時は、ホワイトペティコートを省いてもよろしいのです。

(一)　寸法の割出し方と原型の取り方

(一)寸法の取り方　腰骨の上部のくびれた處を境として上半身下半身に分けます。

一、下胴線……紐をしめた處を云ひます。

二、背　丈……頸の附け根から下胴線迄の處即ち初めに紐をしめた處をいひます。

三、背總丈……頸の附根から、膝裏迄の長でありまして、これが洋服の丈となるのでありますから、十二、三才からは洋服の丈は少し長くなります。

四、胸　圍……上胴線とも云ひまして、胸の最も高い處の兩脇の下の周圍を申します。

五、裄　丈……手を自然にたれて、頸の附根の眞中から肩山を通つて、手首までの長さを云ひます。

六、脇　丈……下胴線から膝頸迄の丈を申します。　この寸法は下穿を作るのに必要であります。

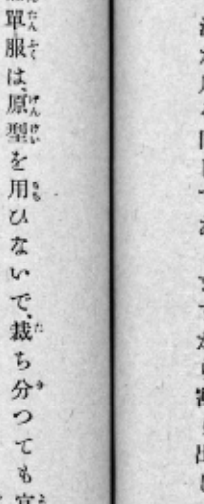
(二)標準寸法出し方　子供洋服の標準寸法は、大人物と違つて、一人〳〵の寸法をはからないでも、年令によつて大體の見積りが出來ます。しかし子供の發育の程度や實際の年令に依つて、多少加減しなければなりません。

一、背丈　一才を六寸としまして、一才を增す毎に三分づゝ增します。例へば、一才は六寸で二才が六寸三分、三才が六寸六分となります。かやうにして一才から十五才迄の子供の背丈を出す事が出來ます。

二、背總丈　嬰兒の服は、二尺から二尺五寸にします。　これは和服の場合に着丈よりも長く仕立ると同じことであります。

そして、二才から八才迄の背總丈は背丈の二倍でありますが、九才から十五才までは背丈の二倍に一才を增す毎に八分づゝ增す割合になつてゐります　即ち左圖のやうな割合になるのであります。

七才



77×2=154分

八才

79×2=158分

九才

82×2+8=172分

十才

85×2+8×2=186分

十一才

87×2+8×3=198分

三、新丈　背總丈の四分三にします。しかし春着や夏着は、半袖又は八分袖といたします。

四、上胴下胴腰廻り　何れも背丈の二倍にいたします。子供物は上胴下胴腰廻りの寸法が、凡そ同じでありますから、割り出し寸法によります。

子供の簡單服は、原型を用ひないで、裁ち分つても宜しいですが、やはりどんな場合にも應用出來るやうに裁ち方をしますには、矢張り原型を用ひた方がよいですから、原型の裁ち方を申します。この原型の裁ち方は、最初めむづかしいやうですけれども、其年齢の子供の原型を一度裁ち切つて置きますと、どんな形のものを裁つときにも、用ひられまして、大變便利であります。

標準寸法

年齢	背丈	背丈	胸圍	裄丈
一才	六寸	一尺九寸八分	一尺二寸九寸	二尺三寸八分
二、三才	六寸三分	一尺二寸七分	一尺二寸七分	九寸五分
四、五才	六寸九分	一尺三寸七分	一尺三寸五分	一尺三分
六、七才	七寸四分	一尺四寸八分	一尺四寸八分	一尺一寸
八、九才	七寸九分	一尺六寸六分	一尺五寸八分	一尺二寸四分
十、十一才	八寸五分	一尺八寸五分	一尺六寸九分	一尺三寸五分

十二、三才　九　寸　二尺三寸五分　一尺　八寸　一尺七寸四分

十四、五才　九寸　五分　二尺四寸五分　一尺　九寸　一尺八寸二分

以上の標準寸法によつて、圖のやうに基礎線を引きます。次に左の順序によつて製圖をします。

い線は背丈　ろ線は上胴廻りの二分の一に其の十分の二の弛みを加へたものでありまして、この二つの基礎線によりまして、最初の上半身の原型が出來るのであります。但し下着の場合は十分の一の弛みを加へます。

イ、背丈を四等分して、三本の絲を引いて1.2.3.の符號をつけます。

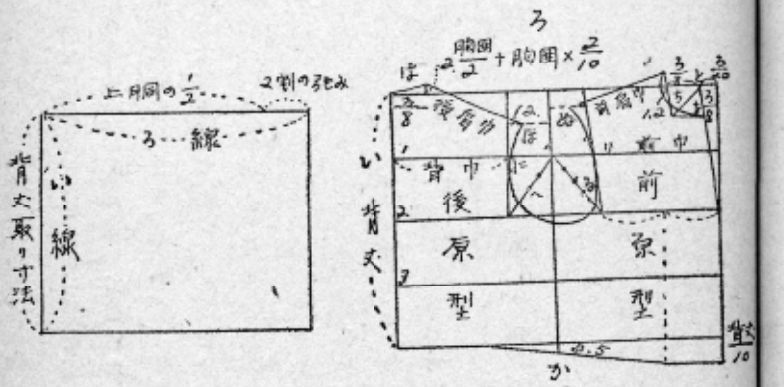
ロ、ろ線の中央から左に四分寄せて、縦の線を引きます。この線に依つて前後の身頃を分けるのであります。即ち左を後身頃に右を前身頃にします。

ハ、左の角からろ線の八分の一の標をつけ、更に其の八分の一を上に出して背の中心から其れをつないで、後の衿ぐりとします。

ニ、ろ線の三分の一に縫ひ代(八分)を加へて、其れを第二線まで引いて、背巾を定めます。

圖の方し出り割の型原

（圖の方り取の圖）



ホ、ろ線と第一線の中央で背巾より右に一分二厘餘り出して後背巾を引きます。

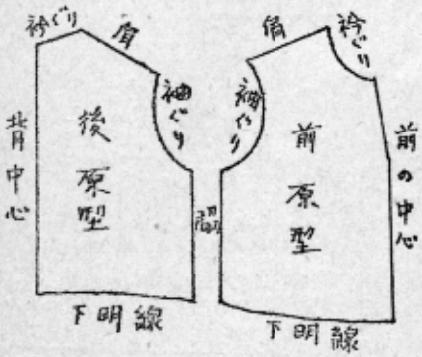
ヘ、圖のやうに、斜線を引いて、其れを四等分して標をつけます。ほとにと。十文字の處との三ケ所を通つて、格好よく後の袖附の線を引きます。

ト、次にとろの線の二十分の一の胸ぐせを取ります。

チ、と、ち、は、ろ線は八分の一で後の衿肩と同寸であります。とを起點として、左と下方に標をつけて、ゆがんだ四角を畫きます。

リ、にと同寸で胸ぐせに添ふて線を引いて前胸巾を定めます。
ヌ、ろとほの中央に線を引いて、後肩巾より二分少ない寸法を、ちの突端から引いて、前肩巾を定めます。
ル、斜線を六等分して、脇の下の處を七厘刻り下げて、丸く前袖ぐりをつけます。

圖した離り切を型原



ヲ、斜線を四等分して、ちの線の處で七厘くり込んで、前中心へ丸みをつけて、あごくりの線とします。
ワ、背丈の十分の一の前下りをつけますこのやうにして製圖をしたものを裁ち切りますと、上圖のやうになります。

(二) ドロワース

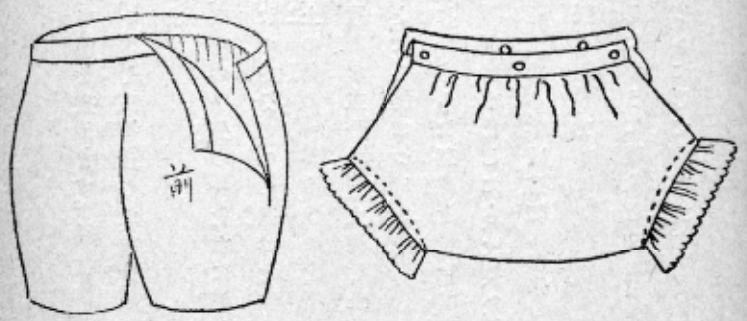
ドロワースは下穿のことで、コーセットウエストにつけて着るのでありまして、幼兒のドロワースは、股刻りが上り過ぎては不便ですから、出來る丈股刻りを淺くいたします。
其材料としては、冬は綿ネル、メリヤスの類を用ひ、夏はキャラコ、縮等を用ひます。

(一)積り方 脇丈に上下の縫ひ代と後を上げる寸法を加へたものが丈でありますから布の巾と型紙の大さによつて、丈の二倍又は裁ち違ひ等を加へて積ります。

(二)型紙の裁ち方 紙の輪を左にして、次のやうに製圖いたします。

イ、脇丈……腰骨の上から膝頭迄の寸法
ロ、腰廻りの四分の一に、其十分の二を加へた寸法でありまして、このいろの長さを以つ

幼兒用ドロワース　　ドロワース(左脇明)



て長方形を畫きます。

ハ、い線を三等分して、三分の一の處に股上、股下の線を引きます。これを、はとします。

ニ、は線の三分の一を右に延します。

ホ、にの三分のこの長さを圓のやうに斜に出します。

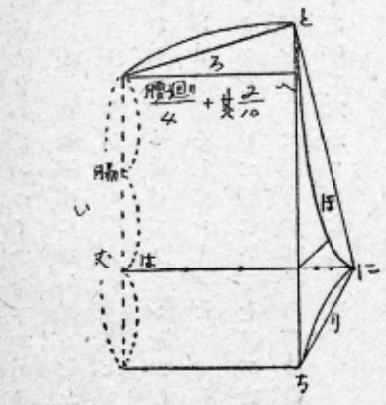
ヘ、上の角のへから、ほ、にを通つて丸みを付けて、線を引きます。

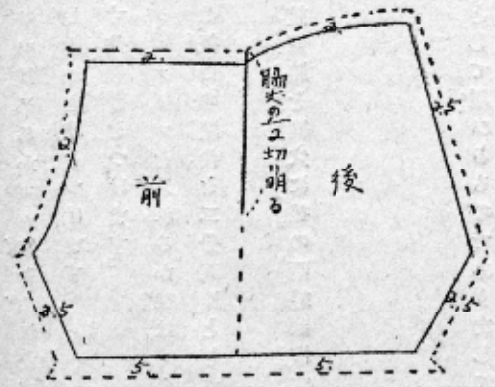
ト、股上の五分の一丈後を上げて、いの上端から斜線を引いて、少し丸みをつけてとにも結びつけます。

チ、にから、ちに斜線を引いて、其の中央で二分位内側に刳りをつけます。全部製圖が出來ましたら、い、ろ、へ、ほ、に、ちを切ります。これが前身であります。右脇を上から半ば迄切ります。

型紙を裁ちますには、前後の二枚とも先づ後の線通りに裁ち切つてから、圖に示したやうに、縫代を裾に五分、上の帶の處に二分、前後の股上、股下には二分五厘づゝにして裁ちます。

方ち裁の紙型





(三)縫ひ方順序

一、前後の股上を充分にのばして、袈縫か、割り縫か、伏せ縫にします。

二、股下も同じやうに縫ひ合せます。

ブルマース

三、前と後の帯のつく處を下胴の寸法に縫ひ縮めるか、ゴム紐を入れます。それから、下前後脇明に持ち出しを上前に見返へし布をつけます。

四、ゴムを用ひない場合は、出來上り巾一寸位の帯をつけます。

五、裾口を折り曲げて、ミシンをかけるか、ゴムテープを入れるか、又はレースをつけます。そしてレースをつけるときは、裾口の縫代を二分五厘として、先にレースをつけて假に股下を縫ひます。

六、帯をつけた場合は、前後の帯の中心と前兩脇を縫穴に、後の兩端は横穴にそれぞれ穴をあけて、穴かがりをします。

(三) ブルマース

これもドロワースのやうに、子供の下穿として用ひるものでありまして、本體は上着と同色のものを用ふるのでありますが、場合に依つてキャラコ、縮、フランネル等を用ふることもあります。ブルマースは、下穿として仕立方も簡單でありますし、着けるにも便利で暖かでよいものであります。ドロワース

積り方　裁ち方　縫ひ方

をたゞ少し寸法をゆるめにいたしたやうなものであります。

(一)積り方

ドロワースと同じであります。

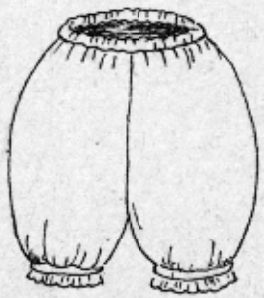
(二)裁ち方

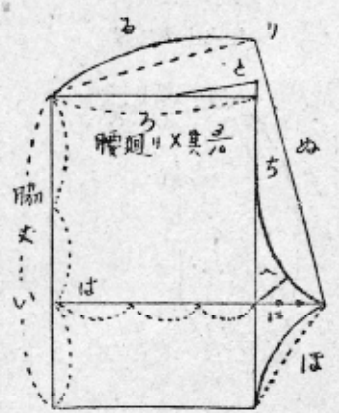
大體ドロワースと同じでありますが、ろ線を腰廻りの四分の一に十分の三又は十分の四を加へて裁ち切りの縫ひ代は、上を一寸にいたします。

(三)縫ひ方

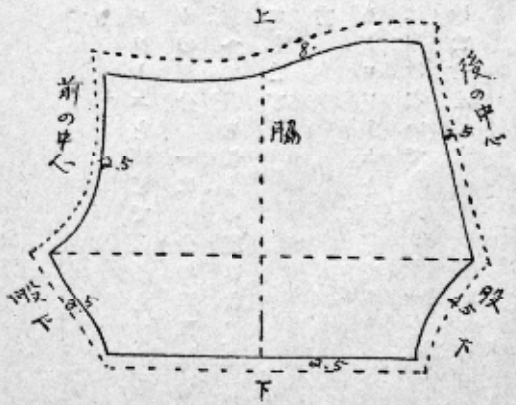
縫ひ方もドロワースと同じでありますが上に帯は附けないで、ゴムテープをつけて、脇を明けません。

ブルマースの仕立上りの圖



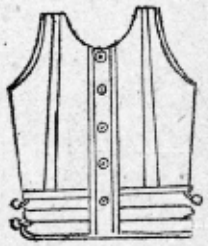


型紙を開いた圖

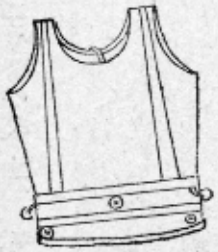


(四) コーセットウエスト

女兒用後



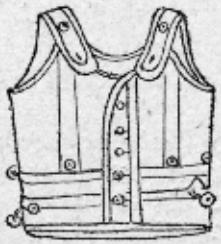
女兒用前



ガーター



男兒用前

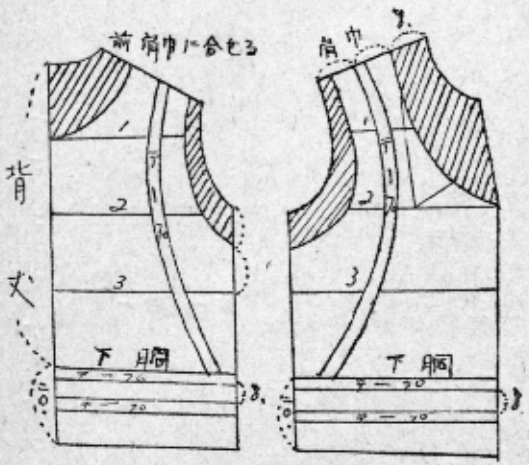


コーセットウエストは、ドロワース、ペティコート、ズボンやガーター（靴下吊り）を吊るものであります。材料は、カッラギ、キャラコの類を多く用ひます。

（一）積り方　二尺巾のものでしたら、出來上り身丈の二倍に縫代と前下りの分とし

て一寸を加へたものが用布です。

(二)型紙の裁ち方　年齢に相當する寸法で原型を裁つて、脇から前後の二つに切り離して原型の肩巾を三等分して、あごくりの方で二の線まで其三分の一を剃り落します。丈に袖剃りは肩で四分、脇の縫目の處は二の線と三の線の中央迄裁ち落します。



(三)布の裁ち方　型紙を布にあてゝ、丈は二寸長く前は縫ひ縮めの寸法として八分程型紙より前の巾を廣く裁ちます。而して、コーセットウエストは男子は前掛けとし、女子は前にふくらみをつ

けて後掛にしますから、明の方に布の耳を用ひまして、他の方を輪にして裁ちます。

(四)縫ひ方順序

一、前の裁ち目に一寸巾の持ち出し布を見返へし布とをつけて、表から飾りミシンをかけます。

二、兩方の肩を袋縫か伏せ縫ひにします。

三、斜布のテープを附けてミシンをかけます。これはドロワースとペティコートを吊るために力布としてつけるもので前後とも肩の中央から、半袖剃りに添ふて縦に下胴までにつけます。

四、衿剃り、袖剃り及び裾の裁目を全部斜布で挟んで、ミシンをかけます。其の時前の縫ひ縮めの寸法を重なりから左右一寸程離れたところにいたします。

(五)　コンビネーション

積り方

裁ち方

これはウエストとドロワースを續けたもので、子供の下着として極めて便利なもので材料は綿フランネルや、ヤクコ、ネンスーク、縮等を用ひます。

(一)積り方　大巾で背總丈の二倍が用布となります。コンビネーションの裁ち方にも左のやうな種類があります。

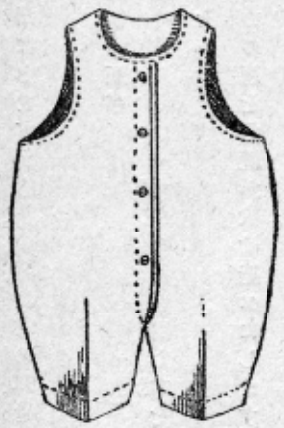
一、前後共一枚の續いてゐるもの(出來上り圖のやうに)

二、前丈一枚の布で、後は上下別の布を使つたもの。

三、上部と下部と縫ひ合せたもの。

何れの裁方にしても大差はありません。

コンビネーション
(圖の(り上出來



(二)裁ち方

一、仕立てやうとする子供の年齡に依つて、裁ち切りました原型に依つて、袴刳り、袖刳りを圖のやうに定めます。凡て下着は上着の方から出ないやうにしなければなりませんから、コンビネーションも、袴刳り、袖刳りを裁ち落します。

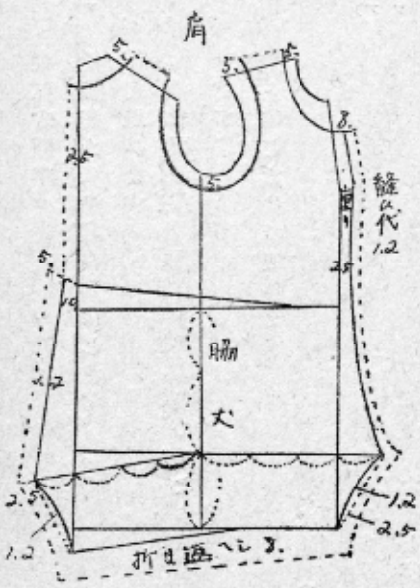
二、原型の前下りの線を脇丈だけ引き延ばします。

三、脇丈を三等分して、ドロワースのやうに股上、股下の境の線を引きます。

四、脇を中心として、前は巾の三分の一をのばし、後は股上の五分の一を下げて三分の一を引きのばし、前は二分五厘の持ち出しをつけて、後は下胴線の處で一寸出して、更に五分上をのばして重なりをとります。

五、後股下の寸法は前と同じ寸法にして、中央で一分餘り刳つてから圖のやうに縫代をつけ

圖の方ち裁のンョーネビンコン

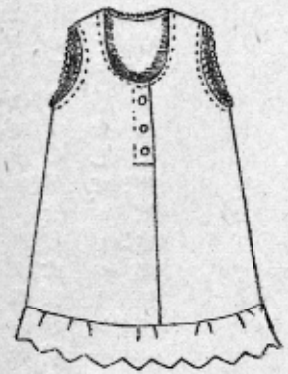


て裁ちます。

(三) 縫ひ方順序

一、背を袋縫か、伏せ縫ひかにします。
二、股下を縫ひます。
三、左右の身頃の前の重なりから、後の重なりにつゞけて、一寸巾の見返へし布をつけます。
四、背縫と同じ方法で縫ひます。

圖のり上立仕ップリス
(ップリスの明前)

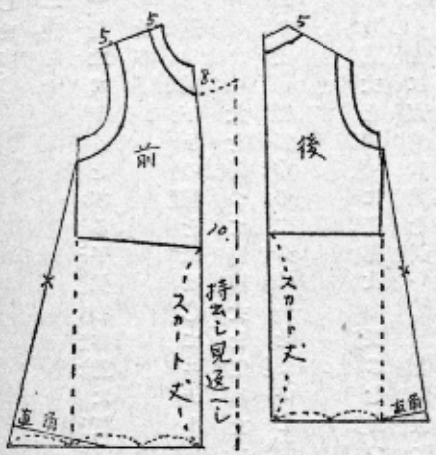


五、衿ぐり、袖ぐりに細い見返へしをつけます。
六、仕上げをして、穴かゞりをして鉤をつけます。

(六) スリップ

スリップは薄いドレスを用ひまし

圖の方ち裁の紙型ップリス



た場合には是非用ひなければならないものとされてゐまして、ウエストとペティコートとを連ねたやうなものであります。裁ち方も極簡単であります。用布は主に紹寒冷紗、麻、ボイルキャラコ等を夏の材料として用ひ、冬季用としては毛繻子、キャラコ、羽二重、琥珀、紹紬等が多く用ひられますが場合によつては、上着の裏地を以つて作ることもありますし、夏薄いドレスを用ひます時等は、透いて見えますから、上着と配合のよいものを選んだ方が宜しいです。

(二)積り方 大巾物(二尺、又は一尺八寸ならば、背総丈の二倍と、裾につけますレースボタン、スナップ等が必要であります。但しレースは、裾の開きの一倍半を普通

裁ち方

布の裁ち方

とします。

(二)裁ち方

一、仕立てやうとする子供の年齢に相當した原型によつて衿ぐり、袖ぐりを定めます。

二、前は前下りの線を延ばしてスカートの丈とし、後は背の中心から矢張りスカートの丈を計つて背總丈を定めます。

三、裾を原型の巾の二分の一を開いて、前脇丈の線に直角に線を引いて、前下りをとります。

四、前脇丈と同寸に後脇丈の長さを計つて、裾巾の半分の處に尺度をあて、後脇丈の線に直角に線を引いて、前と同様に裁ち落します。

(三)布の裁ち方　圖のやうに、衿刳り、袖刳りには縫代をつけないで、其他に二分五厘の縫代をつけて、圖のやうに裁ち切ります。但し裾につけるレースの巾丈布の丈を減じて置きませんと、背總丈が長くなります。そして裁ちますときに、前後の身頃を裁ち合せにいたしますと、布が經濟になります。

スリップを裁つときの注意

縫ひ方順序

スリップを裁つときの注意

一、背總丈は上着よりも五分程短かくいたしませんと、下から見えて見苦しいです。

二、衿刳り、袖刳りは上着よりも多くいたします。

三、裾の開きは凡そ原型の一倍半でありますが、流行によつて上着の開きの多いことゝ、少ないことゝがありますから、其れに應じてスリップも、裾の開きも加減しなければなりません。

四、明は前に限つたわけではありません。肩でも後でも宜いのであります

(四)縫ひ方順序

一、前明の標(スカート丈の四分の一まで)下を右は中央の線から、二分五厘先を、左は中央の線から、二分五厘内側にはいつた處を縫ひ合せて見返へしを作ります。

二、前明の部分は、右は縫目の所を折り山として、左は縫目から五分先を折つて、裾をかけて表からミシンをかけます。

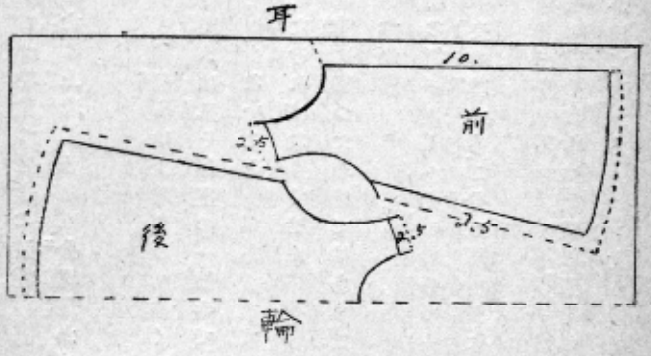
三、肩と脇を袋縫か、伏せ縫ひにして、折りは前にかへします。

四、衿刳り、袖刳りにて、正しく切つた斜目布を巾二分位にしてつけますが、レースをつけることもあります。

五、裾にレースをつけます。其の附け方は先づ裾を端から六、七分の處を折り山として、二分五厘位の深さに表を見てミシンをかけます。其れから、レースを裾巾に縮めて、縫目を表に向けて、裾に躾で縫ひつけます。そして先に縫つた二分五厘巾にミシンをかけて折り山をレー

布の裁ち方の圖

（布の丈を二つに折つて裁つ）



スの假とぢの處に合せて、又表から、ミシンをかけます。但しレースの縮め方はなるべく平均に縮むやうにします。

六、全體にアイロンをかけて仕上げをしてスナップをつけます。スナップは、上前に凸起の方を、下前に凹んだ方をつけるのであります。

（七）ペティコート

ペティコート

ペティコートは、女兒や婦人に缺くことの出來ない下着の一つであつて、冬季は、フランネルペティコートを用ひて、其の上にホワイトペティコートを用ひます。材料は、本ネル、綿ネル、毛繻子、縮出羽二重等で多くは作ります。

裁ち方

（一）積り方　スカートの丈の二倍に帶の布として、二寸五分位加へます。そして其の外に裾の飾りとして、共布か刺繍布、レース等が必要であります。

（二）裁ち方　圖のやうに巾は輪にして、半胸圍の一倍半の廣さとして、丈は上着の丈より五分位短かくなりますやうに、脇丈を定めます。そしてレースを附るときは、其の丈布の丈を短く裁ちます。帶の丈は腰廻りに其の十分の一

のゆるみを加へまして、縫代と重なり代とを加へた丈にして裁ち落します。巾は一寸八、九分とします。其の外に一寸二、三分の巾の持ち出し布がいります。

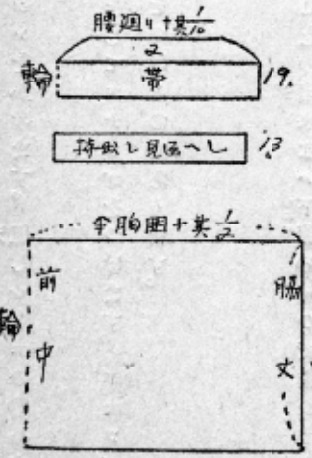
(三)縫ひ方順序

一、胸圍の一倍半の布を輪にして、丈の三分の一丈縫ひ殘して置きます。

ペティコート仕立上りの圖



ペティコートの裁ち方の圖



二、後の明に持ち出しと見返し布とを附けます。一寸三分巾の布を裏にあて淺く縫つて五分位の巾の緣をとります。一方は裏側に返へしてまつりつけ、他の方は其のまゝ開いておきます。其の時切り込みの廻りは、着物の衿肩明のやうに縫ひます。

三、腹部を帶丈と同じ寸法になる迄に縮めます。

四、帶を裏側からつけて、巾を五、六分に折つて、表から飾りミシンをかけます。

五、仕上げをしてから穴かゞりをします。穴は兩脇は縱穴、後の中心は下着になる方が横穴で、上前になる方を横穴とします。

第二十講　女兒服

凡て和服に比べますと、洋服は小供服のやうなものでも、僅かの工夫又は材料の違ひによりまして、大變變化のあるものを作ることが出來ます。それですから、其の基礎となる裁ち方丈を記しますから、それを基礎として、各自色々の工夫することは肝要なことであります。

（一）女兒服（其一）

普通に簡單服と申して裁ち方縫ひ方共に簡單で少しの無駄布もなく可愛らしくて輕快で、夏服にも冬服にも適當な形であります。材料としては、夏は朝鮮木綿、セッパ、ギムガム、麻、ボイル等は夏服地として用ひますし、冬はサージカシミヤ、ビロード等を用ひます。

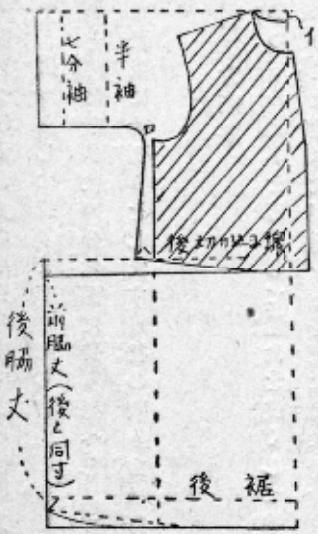
女兒服（其一）



（一）積り方　普通の二尺巾物でしたら、背總丈に裾の折り返へし三寸五分と外にポケット布として、四寸程入用でありますが、ポット布は場合に依つて、上着の缺き落しから取れば宜しいです。但し用布のラシャ巾の時は半分の丈で宜しいのであります。

（二）型紙の裁ち方　左圖のやうに前の型紙を當て、衿刳りや、袖丈は時節に依り又は好みに依つて加減します。脇の切り込みは後は眞直に前は型紙にならつて斜に裁ち込みますから、後裾は上の裁ち込みの差と、前下りの分丈短くなります。裾の開きはスリップのやうに原型の二分の一だけ開くのですが布巾は一ぱいに用ひることもあります。概して子供物は裾の開き多い方が運動に便利であります。又縫ひ込みの縮め方は、下胴線の處に限りません。上にしても下にしても宜しいのであります。但し前後の切り込みの差は必ず附けなければなりません。

方ち裁の紙型



（三）裁ち方順序　用布を横二つに折つて其れを更に縦に二つにして、前

下りの差をつけて、背丈の中央の處で布の輪の方を二分五厘程後の方が狹くなるやうにづらして折ります。即ち肩山の布目が少し斜目になります。

袖下と脇に縫ひ代四分位裾に折り返へし二寸五分位袖口に一寸位つけて裁つて、最後に衿刳りをします。衿の刳り方は好みに依つて種々の形に作ります。

(四)縫ひ方順序

一、脇の下の丸みを延ばして、縫代を濃くして袖下を袋縫ひにします。袖下の丸みの間は縫ひ代が深いと奇麗に出來ます。

二、スカートの兩脇を縫ひ合せて、折りは前身頃に返へします。

三、スカートを縫ひ縮めて胸に縫ひつけます。そして縫ひ代は薄い布で包みます。

四、袖口や裾口を豫定の寸法通りに折つて、まつるかミシンをかけます。

五、後明に出來上り四分位の緣を左右の身頃を續けて、右身頃だけ緣を内側に折つてまつります。

六、衿刳りに五分巾の見返へし布をつけます。

七、ポケットを下胴線より一寸下に、一つ或は二つつけます。

八、仕上げをして、スナップをつけます。

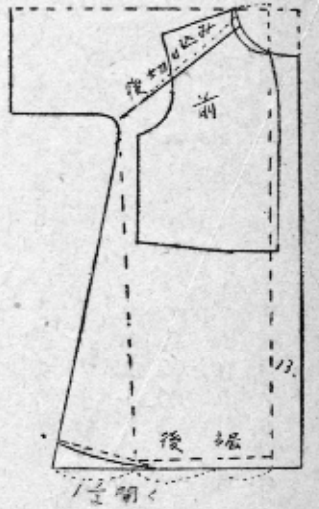
(二)女兒服(其二)

女兒服(二の其)

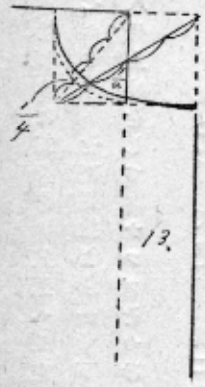


この型は三、四才から七、八才までに適當な形で、裁ち方は其の一と大差はありませんが、衿刳りから脇の下に斜に縫ひ目が出來ますことと、前後の衿刳りに少し縫ひ縮めが出來ることが少し違ひます。袖口や裾の裁ち方や緣取りは、各々好みに依つて自由に裁ちます。

型紙の裁ち方



衿刳の伸し方



(一)積り方　其の一の積り方と同じであります。

(二)裁ち方　これも矢張り原型をあてゝ裾の開きを原型の二分の一としまします。衿刳りは仕立上りの圖のやうに縮めますから、衿肩明を一寸三分大きく圖のやうに出して一寸三分の角に向つて斜線を引いて其の四分の一だけ刳ります。

袖附の摘みは、後は肩から二分五厘離し、前は肩から六分程下つた處で八分程摘みます。

(三)布の裁ち方　布の裁ち方は其の一と同じでありますが、袖と身頃は切り離して裁つても宜しいです。

(四)縫ひ方順序

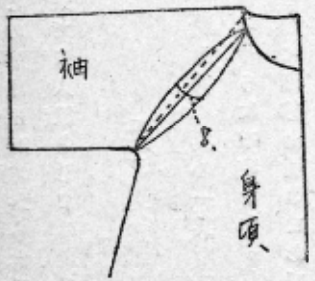
一、袖附けを縫ひ合せまして、袖の方にかへして表から飾りミシンをかけます。

二、袖下と脇を袋縫ひか、伏せ縫ひか又は割り縫ひにいたします。

三、後の明に其の一と同じやうに持ち出しと見返へしをつけます。

四、衿刳りを原型の寸法になる迄縫ひ縮めまして、配合のよい斜目布を附けます。

袖のつまみ方



五、袖口や裾口を折つてまつるか、又はミシンをかけますが、其の縁の形は好みに依つて色々に工夫することも出來ますし、又こゝにも斜目布をつけても宜しいのであります。

六、仕上げ、スナップを後の見返へしにつけます其の附け方は前と同じにいたします。

この形は三、四才から十二、三才迄の女兒に適當する形でありますが、少しの工夫で婦人服としても用ひられます。

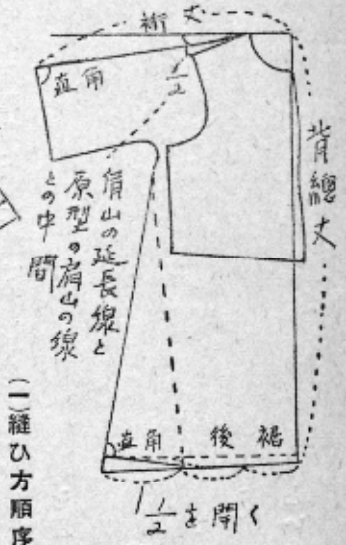
（三）女兒服（其三）

（三の其）服兒女

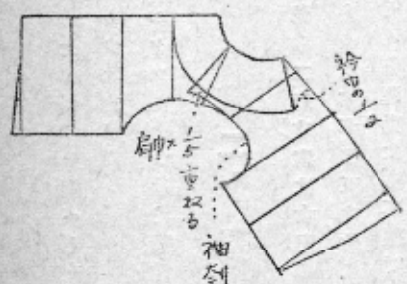


（一）裁ち方　其の一、其の二の裁ち方と大差はありません。たゞ肩を出來上り圖のやうに下げます。其の裁ち方は原型の肩山と、それから引いた直線との中間に直線を引きまして其の線を肩下りの線としまます。そして新丈を定めて、其の丈の處で直角にして袖口の明きを定めます。其の他は前の物と同じであります。たゞ衿がつきますから其の裁ち方だけ記します。

方ち裁の頃身



方ち裁の衿



（衿の裁ち方）　後の原型を、袖の刳りの方で肩巾五分の一を重ねて、衿巾は第一線までにします。前は一分餘り廣く、中心から衿巾の二分の一を開きます

（二）縫ひ方順序

一、肩巾を縫ひ合せて、折りを前に返へして飾りミシンをかけます。

二、前の眞中を四寸程切り離して、細く緣を取ります。

三、袖下と脇を袋縫ひか、伏せ縫ひか、又は他の厚いものゝときは、割り縫ひにします。

四、衿を表裏縫ひ合せて、身頃の中心に合せ

て、衿の上に斜の見返へし布をのせて、ミシンをかけて縫ひ代を包んで身頃にまつりつけます。

五、ポケットをつけて、適當に飾りをつけます。

第二十一講　男兒服

男兒も二、三才迄は女兒の簡單服と同じやうなものを用ひましても宜しいのでありますが、四、五才位になりますと、男兒は矢張りズボン附けのものでありませんと、運動にも不便ですし、格好もおかしいですから、ズボン附きのものを用ひた方が宜しいです。

男兒服（一の其）



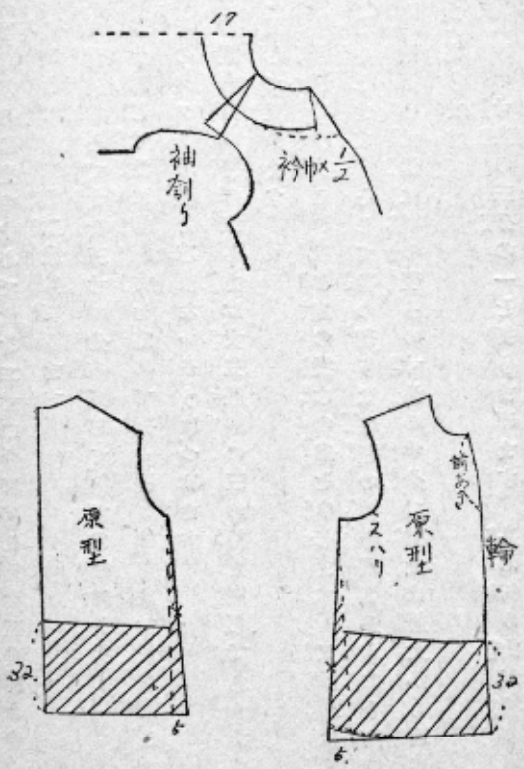
（一）男兒服（其一）

この形は、三、四才から六、七才迄に適する形で、ズボンは半ズボンといたします。

裁　ち　方

す。

（二）裁ち方　一先づ胸圍に十分の一の弛みを加へまして、原型を裁ち切りま



一、身頃　前の原型の中心で丈を二寸二分延ばし、裾を五分開きます。
二、前の明きは第二線迄裁ち切ります。
三、後も背の中心で丈を三寸二分のばして、裾で五分開きます。
四、後脇丈同じ寸法に、前脇丈を定めて、裾の開きの中央で裁ち落します。そして前身のスワリの標を忘れないやうに、つけます。

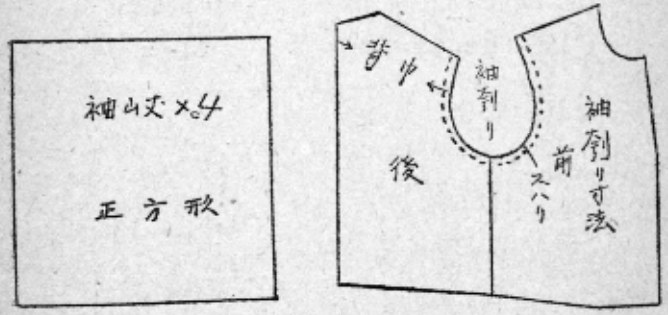
(二)衿の裁ち方　衿の裁ち方は、女兒服其の三の衿と同じでありますから、襲圖丈を記して置きます。

(三)袖　洋服の袖丈、これは和服の袖巾の處を申します。又袖巾は和服の袖丈の處を申します。そして袖の剳りは原型の袖の剳りから二分内側を計ります。袖附けの寸法は袖の剳りの寸法の半分で袖丈は綰丈から肩巾を引いたものであります。

一、袖附けの寸法の三分の一を折りあげます。其の折り山が袖のスワリとなります。

二、スワリの處で、袖附けの三分の一だけ下つた處から、斜に袖附けの寸法を

袖の裁ち方



計ります。

三、袖山の丈を上の裁ち目から計ります。

四、袖口の寸法とり、其の十分の一小さく計りまして、袖附と袖口とに線を引いて、そこから折つて、第三圖のやうに、袖剳りと袖口を定めます。

イ、袖附けを三等分して、スワリの三分の一の處に斜線を引きます。

ロ、斜線の中央で斜線の十分の一のゆるみをつけます。

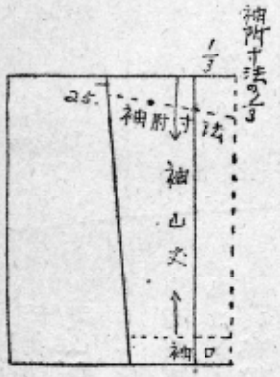
ハ、スワリの處から、横に三分の一を伸ばします。

ニ、裁ち目から三分下げます。

ホ、ハとニを二等分して、第三圖のやうに中

袖の裁ち方

第一圖
袖例りと袖附口を定めた圖

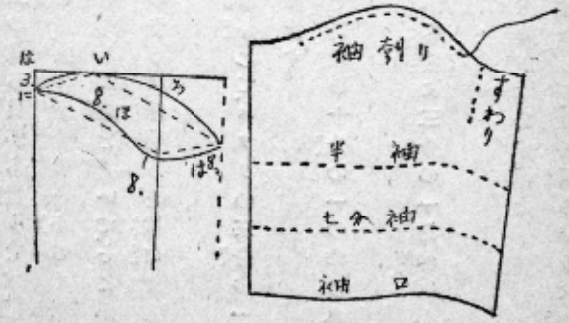


第二圖



第三圖

第四圖
（第三圖を開いた圖）



央から、上と下に七厘づゝ丸みをつけます。

へ、袖口をスソリの折り山で、十分の一の切り上げをつけます。

一、布の裁ち合せ方

二尺巾のもので裁ちますと、袖につぎが出來ますが布巾が充分あるときはつがないやうに裁ちます。

(二)縫ひ方順序

一、袖下を袋縫か伏せ縫にして、折りをスソリの方に返へします。

二、カフスは袖口の出來上りより、一分大きく、巾は好みによつて適當に定めまして、袖口明に縫ひ合せます。

三、肩と脇を縫つて、折りは後にかへします。

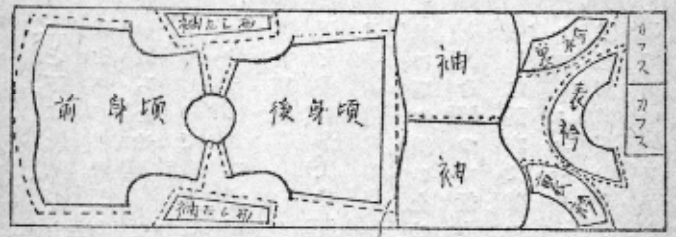
四、前の明に斜布で細い緣をとります。

五、衿を裏表合せて縫ひ合せ身頃につけます。

六、袖附を第四圖のやうに裁ち目から、二分入つた處を二本の絲絲で、細かく縫ひしめて、袖のスソリと、身頃のスソリを合せて、袖山の最も高い處を前の肩

ズボンの裁ち方

裁ち方綜合圖



につくやうにして、肩の邊は袖の方をやゝゆるめに、脇のあたりは、袖の方をやゝつらし加減にして、襞で假り縫ひをして、表から袖のスソリを見ましてから、斜布を身頃の方にあてミシンをかけて斜布で縫ひ込みを包んでまつりつけます。

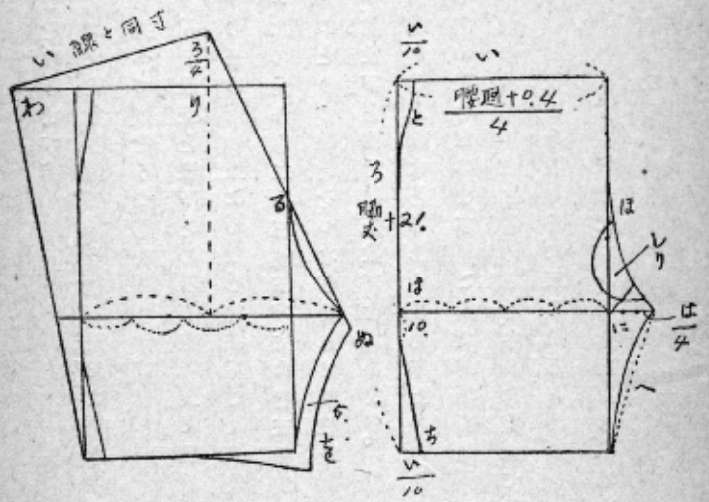
七、釦をつけます位置に、一寸巾の力布を當てゝ、仕上げをいたします。

(二) ズボンの裁ち方

イ、い線は腰廻りに其の十分の二の弛みを加へたものの四分の一であります。

ロ、ろは脇丈(ドロワース)に二寸を加へたものであります。

半ズボンの裁ち方



ハ、ろ線の三分の一より一寸上に直線を引きまして、股上、股下を定めます。

ニ、は線の四分の一を横にのばします。

ホ、前の股上を圖のやうに畫きます。

ヘ、股下に斜線を引いて、其の中央で、一分餘りの丸みをつけます。

ト、い線の十分の一を一寸位眞直ぐに引いて、ろ線の三分の一までに自然に滑しします。

チ、ちもと線と同樣に、裾口の

くせを取ります。

（ズボン後身の製圖）後身の製圖は前身の型紙を布地の上にのせて、筆で上から押へて、型をうつし取ります。

リ、前の股上と股下との境の線の上に垂線をたらし、前身よりも、い線の四分の一の長さだけ上にのはします。これが後身の中心となります。

ヌ、にの角から二分五厘下げて、巾を五分出します。

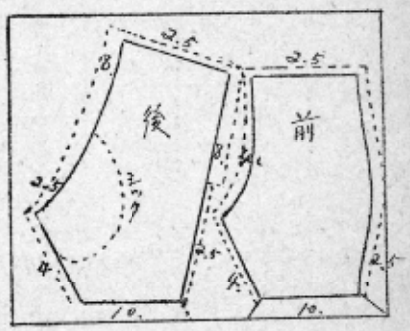
ル、ぬとりの線とをつなぎまして後股上の線をきめます。

ヲ、前股下と同寸に後股下を定めます。裾の線は股下の方で少し下げます

ソ、前身の上の巾と等しく、後身の上の巾を定めて、裾のい線の角とつないで後の脇の線を定めます。これで前後の型紙が裁ち終りました。

（二）布の裁ち方　二枚の布を中表に重ねて、前後の型紙を裁ち合せにいたします。前後の身頃の外に三日月形と、後のシックと一寸五、六分の腰布を裁ちます。腰布は、毛繻子で、シックは、表布の共布か、又は毛繻子で裁つても宜しいのであります。

圖方ち裁の布



小供のズボンは、大人物のやうにいたしますと、とりはづしに不便ですから、蛙股といひまして、前の下の方に一寸五、六分の穴をあけて、其の内側に三日月形の布をあてます。

（三）縫ひ方順序

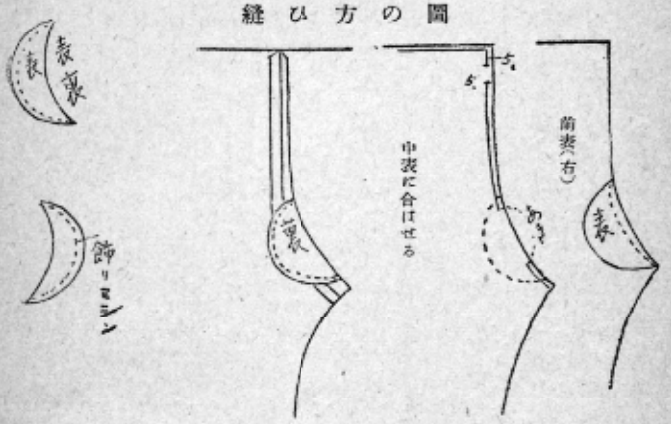
一、三日月形の當布を、中表にして縫ひ合せて、表から飾りミシンをかけます。

二、前身頃に當布をつけまして、左側に倒します。

三、前股上の裁ち目から、五分を縫つて、其の下を五分あけて當布の端から、二分五厘先まで縫つて、前明の下を、更に縫ひ合せます。そしてその上の五分の明は釦穴となります。

四、前の脇明に、布の伸びないやうに二分五厘位の巾の吊布を入れて、縫ひ代を折り返へしてまつります。脇明の寸法は、ろ線の三分の一より、五分下迄に

縫ひ方の圖



します。

五、後脇明の持ち出しに出來上り巾六分位の見返へし布をつけます。

六、後型の上に、前の型をのせて、一分の深さで飾りミシンをかけます。圖のやうに。

七、後股上を、アイロンで充分にのばしてミシンを二度かけます。

八、股下を兩脇つけて縫つて、縫ひ代の裁ち目は、まつるか、又は端がはづれぬやうにミシンをかけます。六分の縫ひ代のうち一寸程折り曲げて折り山から五厘程内側にミシンをかけて縫ひ目を割ります。

九、シックの後の中心を合せて、後の股上の縫ひ目と合せて、廻りをまつります。

一〇、裾の裁ち目に端のミシンをかけて、折り代をまつりつけます。

一一、上の裁ち目に一寸五分巾の腰布をつけて、一寸巾に折り曲げて、飾りミシンをかけます。

一二、後身に圖のやうな位置の處に、三寸位の大さのポケットをつけます。

一三、釦穴を、後と前の中心は縦穴、前の兩脇だけは横穴にします。但し脇巾の開かないやうに釦穴の位置に注意します。

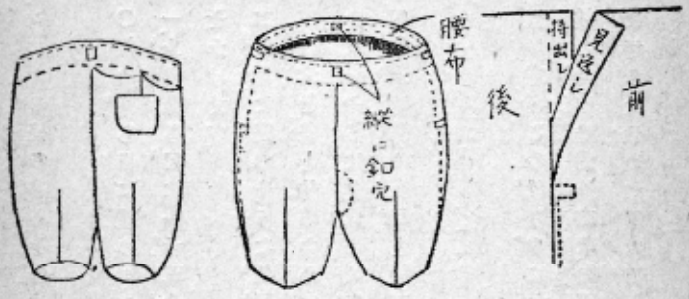
一四、仕上げ、脇の縫目と股下の縫ひ目とを合せて、アイロンをかけます。

(三) 男兒服（其二）

(一)裁ち方　この裁ち方は、女子の簡單服に同じであります。

一、袖と身巾の定め方は、簡單服と同じであります。そして袖丈は七分、又は半袖に好みに依つて裁ち切ります。

半ズボン仕立上りの圖

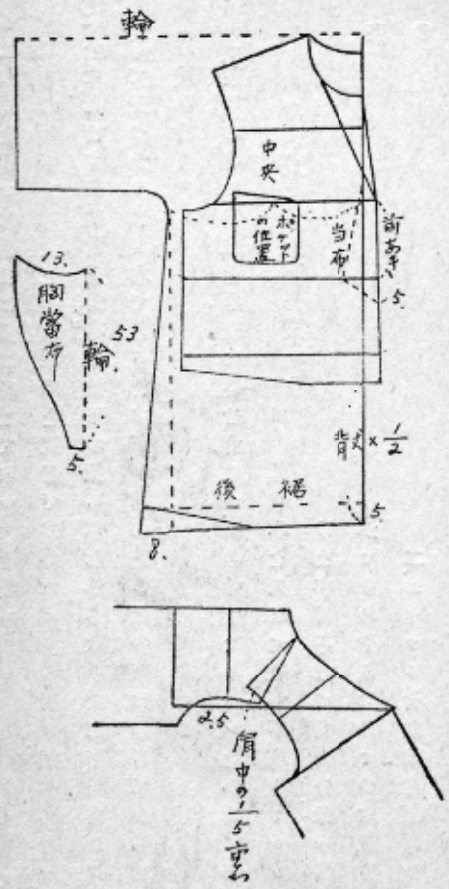




男兒服（其の二）

二、身丈は上胴線の位置から背丈の二分一を伸して、後は五分短くいたします。

三、衿刳りは、第二線まで缺き落して更に第三線迄前の明をつけます。



男子服上着の裁ち方の圖

衿の裁ち方の圖

四、前明に附けるために點線のやうな形の當布をとります。衿は女兒服の丸衿と同じく、後も前の原型を肩巾の五分の一丈重ねて、衿明の止りから、背に

平行に線を引いて、衿丈は第二線までにいたします。

布の裁ち方　**(二)布の裁ち方**　女兒の簡單服と同じですが、たゞ裾の折り返へしを、一寸位にいたします。胸當と當布は、袖下の裁ち落しから取りまして、衿とカフスは別布で裁つか、又は共布でとりますが、共布のときは身頃に續けて裁ちます。

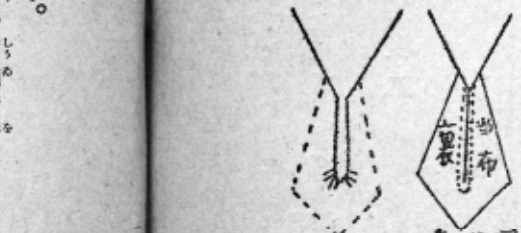
縫ひ方順序　**(三)縫ひ方順序**

一、前明の處に當布を中表に合せまして、明の寸法にミシンをかけて、切り込みを入れて表から飾りミシンをかけます。そして角五分位の間を、穴かゞりのやうにかゞつて置きます

二、ポケットを左前身頃につけます。

三、袖下と脇を袖下から續けて、袋縫ひにいたします。

四、裾を折り返へしてミシンをかけます。



五、衿の周圍を折つてミシンをかけて、女兒服と同樣に衿附けをいたします

但し衿布が地薄のときは、裏衿をつけます。

六、胸當布の周圍を折り曲げて、ミシンをかけて仕上げ、左身頃に一方をまつりつけて、他の方にスナップをつけます。

和洋裁縫講義　終

昭和二年十一月十五日印刷
昭和二年十一月二十日發行

著作權所有

和洋裁縫講義

【定價八十錢】

著者　大妻コタカ

發行者　東京市神田區三崎町三丁目一七四　宇野長永

印刷者　東京市神田區錦町三丁目一八　白井赫太郎

印刷所　東京市神田區錦町三丁目一八　精興社

發行所　東京市神田區三崎町三丁目一七四番地　大興社
振替口座東京五三六八九番
電話九段一五六七番

帝國中學會主事宇野兵次先生著

名士の青年時代

三六判洋裝 價金八十錢 送料六錢

偉人名士の話題を知らずして成功を口にする勿れ、偉人名士の熱と涙の物語りは我々にとつて最も貴重な教訓である。本書は現代一流名士二十餘名の小說より面白い事實物語りを集錄す。

帝國中學會主事宇野兵次先生著

男女必讀 夫婦大學

四六判洋裝 價金九十錢 送料六錢

戀愛の勝利、理想の結婚をしたき人は是非一讀あれ！本書は愛の成立、人間性解剖、夢幻的快樂、三角關係の惱み以下數十項に渉り異性の心の美本也裡を解剖し覺される秘訣を面白く說いてある。

山内秋生先生著

立志小說 新生の扉

三六判洋裝 價金八十五錢 送料六錢

片田舍に生れた一青年の奮闘努力の物語で、其裝幀美本面には四得と日本の大戰爭があり、恩師もあれば可憐な少女もあり生別死別、又は滑稽もあり途に榮冠を頂くまでの波瀾萬丈の物語り！

山内秋生先生著

少女物語集 月夜の嘆き

四六判洋裝五色刷 價金八十錢 送料六錢

青い月夜に忍び泣く少女は誰でせうか、この物語りを讀んで泣かぬ人はありますまい。本書は山内先生の心血を注がれた名著で、長短二十餘數十人の少女の境遇と運命を寫し出したもの？

山中靜也先生編

吹方と曲譜集 ハーモニカ獨習講義

四六判洋裝 價金六十錢 送料四錢

頭書に疲れた後月の光る夜ハーモニカを吹奏する事は青年としてこれ程樂しみか知れぬ。本書は器械の說明から吹方曲譜の讀方迄敎へてある。說明親切故少しも知らぬ人でもスグ吹けるやうになる。

西村渚山先生著 山中靜也先生共著

短歌と俳句の作り方

三六判洋裝 價金八十錢 送料六錢

自分で感じたものを短歌や俳句に作ることは非常に面白いものである。本書はその作り方、解し方、歷史、色紙短册の選擇法までかんでふくめるやう說明してある。

東京市神田區三崎町三丁目 大興社 振替口座東京五三六八九番

病院長齋藤次六先生著

看護と手當法 通俗醫學全書

三六判洋裝金文字 價金七十錢 送料十錢

本書はいろいろな病氣の原因と症狀、藥劑と看護法、醫師の職務と迄の手當法まで男女の病氣について一層親切に詳說してある實に本書あるは家はいつも健康と幸福である。

民衆法律研究會編

日常百般解決 法律百科辭典

四六判洋裝金文字 價金八十錢 送料六錢

日常百般より生ずる債權債務、緣組相續其他如何なる難件難問題もチヨツと本書を見ればすぐ分る。病氣の處置藥劑を添附して會員自ら回答する一家を保護する唯一の寶典である。

手紙研究會編

便覽 手紙百科新辭典

三六判洋裝金文字 價金一圓七十錢 送料十錢

本書は手紙研究會諸師が受取人に喜ばれ感心される秘訣について社交の手紙實務の手紙、其他男女の手紙に關する一切を親切に著述された。附錄いろは大字引・ペン習字手本がついて便利。

齋藤平村先生著

三體活用 字くづし辭典

三六判洋裝金文字 價金一圓七十錢 送料八錢

本書は筆記するにも手紙書くにも速く美くしくスラ〳〵と上手に書け、誰が見ても感じのよい字のくづし方がすぐ分る。尙、漢和辭典の役をも兼て便利重寶。

英語著者會編

ABCより會話迄 遠成英語獨習

三五判洋裝金文字 價金一圓三十錢 送料六錢

本書はABCの讀方から書方に始まり、日常の事柄に關する英語の解說、語方、英文和譯の手紙など其他英語に關する總ての知識を數百項に分ちて親切に說明してある獨學者の寶典。

日本青年社編

國語熟語新語外語 新時代語辭典

三五判洋裝金文字 價金一圓五十錢 送料八錢

(イ)新語、一切の胡亂して一ヶ解釋がある故常識典の役をも兼ねる。(ロ)諺、閑雅語を調べ時とんな辭書よりも速くすぐ分る。(ハ)アイウエオかい文字や言葉でもすぐ分る。(ニ)總ての字引の最用をするといろはで引ける。

東京市神田區三崎町三丁目 大興社 振替口座東京五三六八九番

大妻女學校々長大妻コタカ先生著

和洋裁縫講義

菊版洋裝

裁縫は女の生命であり母としての資格であります。本書は大妻校長苦心の著で和服洋服手ほどき口繪寫眞きからつぎはぎ、エプロン、割烹前掛及び男女小兒の洋服のいろいろな形の縫方が記してある

定價 金八十錢 送料六錢

大妻女學校々長大妻コタカ先生著

新型編物と手藝

圖入說明

四六版洋裝

本書は大妻先生苦心の著で數百の圖を入れて生徒に教へるやう分りよく叮嚀に說明してあり、裝口繪寫眞及び插畫入

十二月出來

當今流行のマクラメの編方も敎へてある故本書を一讀すれば誰でもズン〳〵上達出來ます。

定價 金八十錢 送料六錢

大妻女學校々長大妻コタカ先生著

日本西洋

即席料理三百種

四六版洋裝

本書は御馳の炊き方から手輕に出來ておいしく頂ける婦日のお料理及來客の時急說明してあり、裝口繪寫眞及插畫入

刊行

佛西洋料理に特に先生の實地研究が發表されたもの、本書を見ながら好きなお料理が出來ます。

定價 金八十錢 送料六錢

大妻女學校敎諭住田玉子先生著

家事と禮儀作法

菊版洋裝

無作法な女程みにくいものはなく、禮儀正しい婦人程立派なものはない。本書は立方座り方、口絵寫眞和洋食の食べ方から、結婚葬祭に至るまで數百及插畫入種を說明し日常家事のこと迄敎へてあります。

定價 金七十錢 送料六錢

大妻女學校清掃久野進峰先生著

獨習秘傳

生花の講義

菊版洋裝

活花は趣味として面白くまた婦人の人格を養ひます。本書は各女學校の講師である著者が親に宮前插畫も分りよく、花材や道具から四季折々の花の活け方盛花迄を寫眞數十葉入れて說いてある。

定價 金七十錢 送料六錢

銀座美容院主早見君子先生著

見違へる程美くなる

美容法と結髮

四六判洋裝三百餘頁插畫數十入美本

本書は讀賣新聞社が激賞した如く、著者は銀座美容院長として絕えず流行の麗人を結ひ、本書は實際的立場から、洋髮の結ひ方、化粧の仕方、着物の着方を圖解入りで說明した婦人の必讀書

特價 一圓〇〇錢 送料十錢

東京市神田區三崎町三丁目
大興社
振替口座東京五三六八九番

